

て科學的調査を施す結果決定さるべきである。かゝる理由の下に、ルブレーは家族に關するモノグラフィを作製する必要を提議し且實行したのであつた。家族に關するルブレーのモノグラフィは凡そ三大項目に分れ、家族の特性、收支決算、附帶的事項の記載等に分れ、その内部が更に小分されて十八項目以上の多數の記述がなされなければならぬ。すべて家族を分析的に觀察し、歴史的に考察し、且統計的に計量せんとするものである。此種の記録を反復し比較することを基礎とし、別に權威ある人士の助言、政府の統計等を參考として、こゝに家族の標準型に到達せんとするのである。

家族的モノグラフィによつて社會の研究は用意さるゝのであるが、此社會は畢竟人間の肉體的及び精神的欲望に由來するは明かなることである。社會の基礎的要素は土地と人口とである。そして人間は二つの肉體的欲望に支配さるゝのであるが、それは食欲と性慾とである。前者は財産と労働の源泉をなし、後者は婚姻と家族の成立を得しめる。併し乍ら此二つの慾望の安全なる満足が保障さるゝが爲めに、人間は大規模且つ鞏固なる集團を形成することが必要であつて、この必要の爲めに複雑なる社會が成り、社會制度が之に伴ふのである。而してルブレーによれば、社會の主要なる變化は食糧の生産方法の進化に關係するのではあるが、人は單なる動物に非ざるが故に、その精

神的要求をも看過し得ないとする。

ルブレーは著しく多面的である。彼は一面に於て唯物史觀に近き見方を採ると共に、反面には社會の傳統、精神を尊重するものである。ルブレーの研究方法はその最初の著述「歐羅巴労働者」(1)によつて學界の認識を得、門下に幾多の研究者を集め得たことに勵まされ一八五六年社會經濟學會 La Société d'Economie Sociale を設け、その事業として「佛蘭西に於ける社會改良」(2)に社會學的改革案を提示するに至つた。彼は労働者が團結によつて得ることなく、むしろ資本家の保護によりて繁榮すべきこと、社會改革は労働階級より期待されず、寧ろ教養ある上流階級によつてのみ完成さるべきことを述べ、此事は倫理的結論と一致するものなることを指摘したのである。

ルブレーのモノグラフィ的社會調査法は若干の項目上の修正を伴つてその門下に繼承された。併し乍ら此モノグラフィの項目の修正に關して二派が分れる。それは「社會改良派」L'École de la Réforme Sociale と「社會科學派」L'École de la Science Sociale とである。前者はドレー Delaire を主領とし、ルブレーが一八八一年創刊せる雜誌「社會改良」La Réforme Sociale を機關とし、後者はトゥールキル Henri de Tourville、ドゥモーラン Edmund Demolins (1852—1907) 等より成立つた。前者はルブレーのモノグラフィの項目を殆んど其まゝに維持したので

あるが、その対象を單に家族にのみ止めず、工場、職業、自治體等に適用し⁽⁹⁾、屢々大規模なる社會調査を施行したのである。之に反して後者はモノグラフィの項目を修正し、一八八六年以來「社會科學」La Science Sociale なる雑誌を刊行したのであるが、此派は次第に地理的環境の影響を重視するに至つて地理學的社會學に脱化したのである。

トウルギルはド・モーランに比較して地理の外、人種や政治制度が社會現象に對する影響を顧慮せるのであつたが⁽¹⁰⁾、ド・モーランに至りては人種すら一に地理的環境の産物であると認定し、諸民族が過去に於て移動せる足跡を辿つて、此等民族の社會型を確實に決定し得ることを證明せんとした⁽¹¹⁾。すなはち中央亞細亞の草原に居住せる歐洲種族は此草原によつて決定されし生物、牛馬を伴侶とし、これ故に父權的家族を作り、隊商を編成し征服民となつたのである。牛馬故に又特殊の産業生れ、歐洲式社會型成るといふのは其説明の一斑である。此種の「社會科學派」の研究は今日なほ屢々尊重すべきものがあることを否定し得ぬであらう。⁽¹²⁾

アンハー派の社會學に就て包括的研究に J. B. Maurice Vignes, La science sociale d'après les principes de Le Play et de ses continuistes, 2 vols. Paris 1897 年 4 月。アンハーに就て Auburtin, F. Le Play d'après lui-même, Paris 1906; Charles de Ribbe, Le Play d'après sa correspondance, Paris 1884,

2.6d 1906 ネットワールギルに就て Melin, De Tourville et son oeuvre social, Paris 1907 が推される。

佛蘭西に於てコント歿後に暫く停頓したる社會學の思想は、反つてステュアート・ミルを介して英國に輸入され、スペンサーの社會學體系に復活された。コントの實證主義が英國に傳へられたのは夙に一八四八年に遡るのであるが⁽¹³⁾、それは寧ろ實證主義の宗教的側面にのみ止つた。ミルは反つてコントの人類教を排した。彼は又その科學的側面に共鳴したる點に於て、リトレイとも異なるものである⁽¹⁴⁾。スペンサーの研究は此ミルの方法を具體化するものと見做されるのであるが、スペンサーはコントとは獨立に「社會靜學」⁽¹⁵⁾を發表し、コントより學べるは社會學といふ學名其他の術語に限らるゝといはれる。いづれにしてもスペンサーはコントの如くに社會學を社會物理學或は社會靜學として提出することに始まり、次に之を社會生物學とするに進み、更に最後に至つては社會學を社會心理學の研究と見做したのである。

社會學の發祥地佛蘭西に於て再び社會學的氣運が挽回されたのは、普佛戰爭の結果佛蘭西が強く社會的認識を要求した機會に於てである。而してかゝる社會的認識の要求に基き、スペンサーの社會學が英國から輸入され、極めて猛烈なる勢で傳播した。そしてスペンサーの學說中に社會生物學的部分が最大の影響を與へ、その結果こゝに生物學的社會學 La sociologie biologique の擡頭を

見るに至つたのである。當時の佛蘭西社會學者の信ずる所によれば、社會現象は之を單に生物的現象の延長と解することによつて完全に説明し得られ、社會學はかゝる態度を採ることによつて、始めて實證科學としての形式を完備することが出来るといふのである。社會學的法則を生物學的法則に倣つて樹立することこそ社會學者の本分であると考へ、彼等は此見地から社會の進化 適應 分化 競争 淘汰等の問題を攻究したのである。生物學的社會學の傾向を明瞭に代表するものとして 에스ピアス Alfred Espinas (1844—1922) の「動物社會」⁽¹⁶⁾を擧げ得るであらう。併し乍ら生物學的社會學の最も有力なる傾向を代表するものは、社會有機體説 L'organicisme social である。これは社會(その内容は多く民族的社會)を一個の生物有機體と見做し、生物有機體の概念を社會の研究に移植し、類推的方法によつて社會學を建設せんとするものである。

抑々社會を一個の有機體と見立てることは、既にコントによりて爲されて居る。彼は社會有機體 l'organisme social の文字さへ使用した程であつたが、たゞこの見解の徹底を期さうとはしなかつた。此社會有機體説は又スベンサーに採用されし外、波羅人リリエンフェルトによつて極説されるに至つた⁽¹⁷⁾。そして獨逸に於てシェフレは更に之を組織的に展開したのであるが⁽¹⁸⁾、此學説は佛蘭西に於てラルムス René Worms (1869—1926) に果敢なる代表者を見出したのである⁽¹⁹⁾。ラルム

スは一般に無機體と有機體とを比較し、後者が前者と異なる要點は、外形上空間的にも亦時間的にも定形なく可變的であること、内容上吸収排泄即ち同化^{ダイミナリオン}と異化^{カタルシオン}の複合過程行はるゝこと、營養と其結果たる成長 器官的分化 新陳代謝 生殖 死亡等の現象あることを指摘し、有機體と社會(民族を指す)との間に此等基礎現象に於ける共通類似あることを述べて、社會は本質上生物有機體と考へ得るとした。氏はなほ進んでスベンサーの擧げた生物社會間の相違點に就ても批難を加へて居る。曰く、スベンサーは社會に於ける個人の分離性の存在と意識集注性の缺如とを以て、社會が有機體と少しく趣を異にする要點と見たのであるが、前者の特性は社會の場合にも極めて皮相的に可能なるにすぎない。又生物體に於て特質たる所の意識の集注性はスベンサーの考へよりも遙に程度の低きものであつて、社會に於ける場合と重大なる差別のないことが注意されると。

然らば社會と生物とは全然同一種のものであるかといふに、ラルムスはスベンサーのあげた以外の相違を指摘する。すなはちその差異は、社會に於て其構成要素たる個人が高度の心意的發達をなせる關係上遙に彈性が認められること、又社會が複雑なる組織を有する結果として、宗教的知識的集團等を通して生物に見られぬ新しい特性を呈出することであるとして居る。要するに氏は類推的研究の意味に於て社會有機體説を主張するのであるから、社會を生物の一種と見做すことによつて、

社會學の研究を生物學の研究に歸屬せしめやうとするものではない。然るにリリエンフェルトの如く社會有機體説を極端に主張する場合に於ては、社會學は遂に生物學の一部門となり果てる危険がある。佛蘭西に於て此極端に奔れるものは實にポルディエ A. Pordier (63) 其人であつた。

露西亞出身の社會學者にしてつねに佛蘭西語を以て著述を發表したノギコフ Jacques Novicow (Yakov Aleksandrovich Novicov 1849—1912) (64) も亦類推的研究の便宜あることより社會は有機體なりといふ根本的假定を許容して居る。氏は社會の概念を、恰もマルムスに於けるやうに殆んど民族的集團に局限するのであるが、かゝる社會を有機體と認むべきでないならば、之を果して何と認むべきであらうかと反問し、社會を有機體と認識することによつてのみ社會學を、何等の中断なくより、一般的なる諸科學に連続せしめ得る。自然が唯一であることは、ア・プリアリの有有機體説が最大の眞理を包蔵することを教へると述べて居る (65)。此ノギコフの言葉は社會有機體説が宇宙的進化に断續なしといふ根本的確信を基礎とすることをよく明にして居る。

社會有機體説は生物と社會とを比較して、社會も亦一の生物有機體に外ならずとし、生物學の知識を以て社會の研究を爲し遂げんと企つるものであるが、仔細に生物體と社會團體との間の比較研究を試むる時其見解は到底支持するに困難なることが明にせられる。それ故に、社會有機體説をし

て生物學的社會學は程なく佛蘭西に於ても廢れたのである。此派特に社會有機體説の爲めに最後まで踏み止りて防戦せるマルムスの如きも、其後の大著「社會科學の哲學」(66)に於ては社會を優級有機體 *le superorganisme* であると改説し、更に其最後の著述たる「社會學」(67)に於ては遂に「社會構造には有機的の點あること」だけを主張するに過ぎないのである。

ルネ・チルムスは一八九二年に國際社會學評論 *La Revue Internationale de Sociologie* 翌年その母體たるべき國際社會學會 *Institut International de Sociologie* を興した。又チルムス自身一八九五年以來巴里に於て巴里社會學會を主宰し、倫敦 プリニツセル ホストン フタバスト 維納 日本等の社會學會と聯絡をとつた。此諸機關を中心とする一團の社會學者は純粹社會學者のみならず多くの實際家を網羅し、學派的統一は無いが、多方面の問題特に實際問題に觸れたのである。チルムスはなほ國際社會學叢書を刊行しその數六十五冊に上り、其内にはグラッシー R. de la Grasserie の宗教法律に關する研究 (*Des religions comparées au point de vue sociologique, Paris 1899; Les principes sociologiques du droit public, 1911*) キーハ A. Bauer の社會階級論 (*Les classes sociales, analyse de la vie sociale, 1902*) 等がある。又國際社會學會の討議を纏めて紀要十四卷(一八九四年以降一九二二年)を發刊した。

生物社會學は一般に社會現象に對して極めて單純なる考へを有したのであるから、かゝる見地より吾人が教へらるゝ所は尠いと謂はねばならぬ。併し乍ら社會學史上に於いては、生物社會學的學

理も亦興味なしとしない。興味の第一は社會學の研究態度に於て、社會現象を客觀的に觀察説明する傾向を最も明かに主張せる點である。すなはち社會現象を科學的に攻究するが爲めには、人事的社會現象をも一般に客觀的所與として取扱はねばならぬ。又社會現象は必ずしも人間の深き精神的省察、反省的なる意識によつて生み出さるゝものに非ずして偶發的なる無意識の力によりても生起し得る所のものである。従つて之を研究者の主觀にのみ訴へて解釋せんとすれば、往々にして甚しき誤謬に陥る危険があるといふにある。斯様な客觀主義は永く各國社會學界に於て社會學の根本的態度であるとされたのであるが、生物學的社會學は此客觀主義を夙に明瞭に代表したものであつて、これ佛蘭西に於てはその後タルド、デュルケム氏等に至つて愈々力説されしものである。第二は社會現象の取扱に於て、此派が早くから社會の連帶性及び社會の有機的統一性に目醒めしことである。フイエー Alfred (Jules Emile) Fouillée (1838—1912) の契約有機體 L'organisme contractuel) の説(55)の如きは、社會の連帶性を生物學的社會學派よりも更に一層深く考察せしものであり、此意味に於て生物學的社會學はフイエーに重大なる影響を及ぼして居る。又生物學的社會學が社會の有機的統一性に着目したことは、これが直ちにデュルケムの社會學說に通ずる機縁がある。エスピナスの如きは個人意識が相互に其表象を交換し、心的行爲を取交すことによつて社會意識が

ある。意識は一つの我であるよりも寧ろ一つの我等 un nous 大我であると云つて(56)、デュルケムの集合表象説の素地を用意せるものである。このエスピナス、デュルケム間の聯絡はギンスバークなどが特に重視する點である(57)。エスピナスは「社會が生物であるといふことは眞實であるが、社會は特に一つの意識によつて構成されてあるといふ點に於て、爾餘の生物とは區別されるのである。社會は一つの生きた意識、すなはち觀念的一有機體である」(58)と斷定する。但しエスピナスの特色はかくの如き意味の心的社會現象も亦一般生物進化の法則によつて支配されると見るにある。

此外生物學的社會學として獨逸のオットー・アモンの社會ダーケン主義(59)を輸入せる者にラプー ヴ Yacher de Lapouge (1854—) がある(60)。氏は人種は征服によらずともその内部より變化する、すなはち自然淘汰行はれざる人類社會の將來は悲觀すべきものであるとして優生學の方策を示したのである。又ルボン Gustave Le Bon (1841—) の如きも民族心理の研究に於て生物學の見解を交へて居る(61)。氏は民族の心理的特質の基礎たる肉體的特質の總合として人種なるものを認め、人種を以て民族の心理的特質の決定者であると見た。たゞ氏は社會を生物有機體と見做すことに反對し、社會は固有の民族精神を有する點に於て其本質が存することを擧ぐるのであるから、氏の學說は既に純然たる生物學的社會學以上のものである。

生物社會學派と認めるを得ないが。ルトウマン・Charles Letourneau も亦、廣く人間社會生活及びその進化な、人類學 人種學 民族學 教育學 氣候の研究 經濟學 歴史等の諸科學の知識を基礎として研究する外、動物の社會生活を參照して之を攻究すべき必要あることを云ふ。但し氏の研究は主として人類學を基礎とするものじやる。著書に *La sociologie d'après ethnographie*, 3. éd. Paris 1892 の外 *L'évolution du mariage et de la famille; Condition de la femme dans les diverses races et civilisations* 等の特殊研究がある。

- (1) *La science française*, Paris Larousse, Tome 1^{re}, p. 39. (松本譯「社會學の沿革」哲學雜誌, 四六八號)
- (2) E. Littré *Auguste Comte et la philosophie positive*, Paris 1863; *De la philosophie positive*, Paris 1845; *Application de la philosophie positive*, 1850. 氏は「*La Philosophie Positive*」なる隔月雜誌(1862—)を G. Wyruboff と共に主宰した。
- (3) Littré が哲學的實證主義を繼承せるに反し Robinet は宗教的實證主義を Comte の最大の業績と見做し、人類教に重きを置いた。なほ廣く佛蘭西思想界に於ける コントの影響は H. Taine, E. Renan 等に與へられた。(J. A. Gunn, *Modern french philosophy, A study of the development since Comte*, London 1922, Chap. II.)

- (4) 1848年の革命を動機として、少數の者が Comte を盟主として社會改革の調査及び提議を企てたのである。
- (5) A. Cournot, *Essai sur le fondement de nos connaissances*, 2 vols. Paris 1851; *Traité de l'enchaînement des idées fondamentales*, 2 vols. 1861; *Considérations sur la marche des idées*, 2 vols. 1872; *Matérialisme, vitalisme, rationalisme*, 1875.
- (6) A. Matgrin, *La psychologie sociale de G. Tarde*, Paris 1910, pp. 160 ff. Matgrin は Tarde が凡ゆる方面に於て Cournot に負ふことを明にして居る。
- (7) Le Play, *Les ouvriers européens*, Paris 1885, 2. éd. 6 vols. 1887.
- (8) *La réforme sociale en France*, Paris 1864, 6. éd. 4 vols. 1878.
- (9) 「社會改良」派の調査法に就ては P. de Maroussen, *Les enquêtes, pratique et théorie*, Paris, 1900.
- (10) Tourville, *L'origine des grands peuples actuels*, Paris 1907.
- (11) Demolins, *Comment la route créel a type sociale, les grands routes des peuples; essais de géographie sociale*, 2 vols. Paris 1901.
- (12) 例へば英國社會心理學者 W. MacDougall の如き Tourville, Demolins の研究を激賞して居る。即ち *The group mind*, Cambridge 1920, pp. 231 ff.
- (13) E. Barker, *Political thought in England from Spencer to to-day*, London 1915, p. 199.

- (14) J. S. Mill, *A system of logic*, London 1843. 其 Book IV, *On the logic of the moral sciences* (其精神科學の方法を取扱ひ社會學に及んで居る。この部分の佛譯註付のものとして *La logique des sciences morales*, trd. nouvelle par G. Belot 4. éd. Paris 1910 が推される。)
- (15) H. Spencer, *Social statics*, London 1850.
- (16) A. Espinas *Des sociétés animales*, Paris 1877, 3 éd. 1924. 獨譯 *Die thierischen Gesellschaften* übersetzt von W. Schlösser, Braunschweig 1879 (之は第三版による)。
- (17) P. von Lilienfeld, *Gedanken über die Sozialwissenschaft der Zukunft*, 5 Bde, Hamburg 1873—1881; *Pathologie sociale*, Paris 1896, Introduction.
- (18) H. C. A. Schifflé, *Bau und Leben des sozialen Körpers*, 4 Bde, Tübingen 1875—1878. その第二版 (2 Bde, 1896) に於ては社會有機體説は放棄するに傾いた。
- (19) R. Worms, *L'organisme et société*, Paris 1896.
- (20) A. Bordier, *La vie des sociétés*, Paris 1887.
- (21) Novicow, *Les luttes entre les sociétés humaines et leurs phases successives*, Paris 1893; *Les gaspillages des sociétés modernes*, 1894; *Conscience et volonté sociales*, 1897.
- (22) Novicow, *Conscience etc.* p. 3.

- (23) Worms, *Philosophie des sciences sociales*, 3 vols. Paris 1904—1913; 2. éd, 1913—20.
- (24) Worms, *La sociologie, sa nature, son contenu ses attaches*, Paris 1921. 田邊赫利譯「社會學」
- (25) Fouillée *La science sociale contemporaine*, Paris 1883), 6. éd, 1922.
- (26) Espinas, op. cit. 3. éd. p. 100.
- (27) M. Ginsberg, *The psychology of society*, London 1921, 1 p. 51 ff
- (28) Espinas, op. cit. p. 423.
- (29) O. Ammon, *Die Gesellschaftsordnung und ihre natürlichen Grundlagen*. Jena 1895, 3. Aufl. 1900.
- (30) Lapouge, *Les sélection sociales*, Paris 1896; *Race et milieu social*, Paris 1909. 此派の P. Topinard (其人類學的社會學研究を極力辯護した。(L'anthropologie et la science sociale, Paris 1901.)
- (31) Le Bon, *Lois psychologique de l'évolution des peuples*, Paris 1894. 15. éd, 1919; *Psychologie des foules*, Paris 1895, 30. éd, 1921.

生物學的社會學の學理を以てしては、社會現象の説明が不充分なることを明にされ來つて、こゝ

に直接に社會人に基礎を求め、個人の思考と個人の意志其者に頼つて社會現象の説明を企つる氣運を生むに至つた。一八八〇年は略々社會有機體説が隆盛を極めた絶頂であつたが⁽³²⁾、此年に公にされたフイエーの前記の著述は一方に於て社會有機體説を支持すると共に、之を準契約の理論によつて基礎付ける點に於て、既に社會の心的側面に思を寄するものであつた。

フイエーの社會學はその基礎に觀念力 *Idees forces* の哲學説を有する。觀念は自己を實現する力であり、集團的表象はその社會的顯現であると思、この集團的表象は又社會的發達を支配するものと考へる。フイエーの社會學説は A. Guyau, *La philosophie et la sociologie d'Alfred Fouillée*, Paris 1913, II. partie. に紹介されて居る。フイエーの養息キモー Jean Marie Guyau (1854—1888) は夭折せる天才であつて、*L'Esquisse d'une morale sans obligation ni sanction*, 1885; *L'irreligion de l'avenir, étude de sociologie*, Paris 1887; *L'art au point de vue socio-ogique*, 1889 等の名著を數へる。キモーは道德の社會性に對し、道德のみならず、宗教感情も亦人の社交性に其基礎ありとした。藝術觀も亦同様である。藝術は社會上に於て、感情のソリダリテを務めるものであるとした。キモーを一般的に紹介せるものに A. Fouillée, *La morale, l'art et la religion d'après Guyau*, nouv. éd. Paris 1911 がある。

新しき傾向は社會現象を心理學的に理解せんとする企圖である。然し佛蘭西に於いてもルヌキエ Chales Renouvier は道德と歴史とを心理的見方から取扱ひ、特にマリオン François Henri Ma-

rion (1846—1896) は心理學の應用として社會連帶の研究をなせるのである⁽³³⁾。此等の人々は皆適當に心理學的社會學の先行者として數へられる。たゞ心理學的社會學の企圖が社會心理學として大成さるゝに至つたのは、實にガブリエル・タルド Jean Gabriel Tarde (1843—1904) 其人に於てである。氏の社會學説はその三部作たる「模倣の法則」⁽³⁴⁾「社會論理」⁽³⁵⁾「普遍的對立」⁽³⁶⁾に於て極めて奔放自在に展開され、別に「社會法則」⁽³⁷⁾の著述にその要綱が示された。タルドの社會學的思想はなほ最も圓熟せる姿に於て、氏の最後の著述たる「經濟心理學」⁽³⁸⁾二卷に提出されて居る。

タルドによれば特に社會的なる現象、すなはち人間集團現象の總てに基礎たるものは、人々の心と心との間の關係是である。個人心理の諸現象が人間の頭腦細胞間の關係現象として現はるゝが如くに、社會現象は個人心と他の個人心との間の關係現象として成立する。頭腦細胞間の關係現象は頭腦内部の心理學 *Intrapsychologie* (即ち普通の心理學) にして、心と心との間の關係現象の研究は頭腦と頭腦との間の心理學 *Interpsychologie* たるのである。此 *Interpsychologie* は即ち社會學であつて、その性質上或は社會心理學とも呼ぶを得るのであると。かくの如く氏の社會心理學は心と心との關係即ち社會的關係 *le rapport inter-psychique ou le lien social* を究局の對象とするのであるが此社會的關係は常に相互的 *réiproque* の作用と考へられて居るのであるから、氏は

社會の本質觀に於いて心的相互作用説を採るものと云ふことが出来る。而して此點に於て、フイアカントがタルドをば獨逸現代に行はるゝ形式社會學の先行者の内に數へたことは正當のことであらう(90)。

タルドによれば心と心との關係即ち社會的關係は、主觀的側面に於ては之を内在的な同情 暗示 感受性 社交性等に把握し得るに止るのであるが、幸にしてその客觀的表示として模倣 *imitation* が與へられるのであるから、客觀的科學は模倣に依つて社會現象を攻究し得るのである。模倣の法則は社會現象の殆んど總てをば説明し得るであらう。集合せる個人は必然的に此模倣作用を行ひ、そして此作用によりて變化して行くのである。模倣の原理を明にするならば如何にして社會的勢力が形成され、回轉變化さるゝかゞ實證的に説明し得らるゝであらう。かくして個人心理學的法則は社會的心理現象を充分に説明し盡すのである。又廣く考ふるならば、模倣なるものは宇宙的現象としての反復、*répétition* の事象の一つの姿に外ならないことを發見する。反復の事象は物理現象としては波動と呼び、生物現象としては遺傳といふのである。それが社會現象として今模倣に具體化されたのである。タルドは模倣なるものをかくの如く宇宙的現象の一種と見做すことから、自己の社會學説を普遍哲學化するのである。タルドはクールノーを祖師と仰ぎコントの哲學的社會學に儼

らざることゝを漏すを常とするが、氏の到達せる最後の普遍哲學的態度に就て云ふ時は、氏も亦明にコント、スペンサー等の學問的傾向に接近するものと評し得るであらう。

タルドは社會現象の本質を心的關係と見たのであるが、然らば所謂社會即ち社會的集團は如何に觀念さるゝのであらうか。氏によれば現に相互に模倣しつゝある複數人の集合、或は同一原型の描寫といふ意味にて類似的特質を有する複數人の集合が、社會的集團たるものである。而して此社會に於て模倣は利益眞理故に合理的に行はるゝ外に、論理外の影響によつて支配さるゝのである。タルドは論理外の影響が「人間の内部より外部へ」*Du dedans au dehors de l'homme*「優者より劣者へ」*Dr supérieur à l'inférieur* の二つの法則を有するをあげ、更に第三にその根本的形式として傳統と流行の存在することをいふ。

すなはち模倣は社會學上二つの根本的形式に於て現はるゝものである。一つは時間的に一つは空間的に行はれる。前者は一時代より次の時代へと不可抗的に、殆んど命令的に營まれるものであつて、固定保守の原理として行はれ、小規模の社會や孤立的社會に於て特に力強く働くものである。之に反して後者は同時代の人々の間に、一時的 暫定的 多様なものとして營まれるのであつて變化進歩の原理として行はれ、大規模の社會や過渡期の社會に勢力があるものである。タルドによ

れば、此二つの形式は畢竟傳統と流行との區別となる。何れにしても模倣といふ綜合的原理によつて、社會的類似といふ著明なる現象の總てを説明し得るのである。云ふまでもなく現實の社會にはなほ此外、他の原因より類似の事實が存在するのであるが、それは生理的又は環境的條件に由るのであつて、適當に社會現象と稱するを得ざる物的現象なのである。眞に社會現象と稱せらるべきものは、皆模倣の原理より説明し得らるゝと考へる。

然るに模倣はその内容として、模倣同様に本質的なる發明 *Invention* の事實を豫想する。新しき問題に當面した場合、人々は夫々獨創的なる反應によつて之に答へるのであるが、此獨特の反應は當該個人のみがよくする所のものである。それは個人的獨創であつて發明と呼ばるべきものであつて、最初は嚴密なる意味に於て個人的のものであるが、他人に模倣されるに及んで社會現象となるのである。従つて總ての社會的變化と進歩の源泉は天才の發明に歸せられなければならない。かくの如き獨創的個人の行爲は社會學上重要な價値を與へられねばならぬのであるから、デュルケムの如く個人的創意を蔑視すべきでは無いといふ。タルドは發明の社會學的價値をしかく尊重するのであるが、同時に發明も亦終には模倣に還元せらるゝと見る。それはすなはち既存の二つ以上の模倣の傾向が遭遇し衝突し、それ等が相互に適應し協調することから發明が成り立つからである。

信仰や、風習や、感情などの夫々の對立と、その對立の反復が個人意識の裡に發明の努力を生み、こゝに新しき信仰 制度 感情を生むのである。それ故發明を取扱ふ心理學と、模倣を取扱ふ社會心理學即ち社會學とは互に密接に提携することによつて、此等の現象の説明を全ふし得る關係に在るのである。タルドによれば人間の行爲は事實上、三段論法の結論として現はるのである。慾望要求 目的といふは大前提であつて、此目的遂行上に適切なる信仰や認識は小前提である。そして行爲自體は此大前提と小前提の結論として呈出されるのである。此意味に於て、純粹社會學は畢竟社會論理學となる。かくて之に必要な説明の鍵は一般に心理學が提供するものであるといふのである。

タルドの社會學說の要點は以上の如くであるが、一面に於て氏は郷里サルラに於て裁判官たりし經歷上、夙に犯罪の研究に興味を有し、犯罪學上の業績がある。氏は此方面に於てロムプロゾーが犯罪の人類學的研究を行ひ、犯罪型を明にしたことに反對するものではないが、犯罪は又同時に社會的條件によつても成立するとして、犯罪の社會的側面を明にすることに努力した。そしてこの關係に於て群集の研究に志し、又群集と犯罪との關係、社會に於て群集の營む廣大なる役割がルボン等によつて極説さるゝに至つて、更に近代社會に於て最も有力なる要素たる所の公衆 *Le public*

を問題とした(4)。氏は社會的集團を幼稚なる集團形態としての群集と組織ある團結 Corporation に區別せるのみならず、又肉體的集團としての群集に對して精神的集團としての公衆を區別せるのであつた。

タルド學說の詳細なる紹介はマタグラフが試み A. Matagrif, La psychologie sociale de G. Tarde, Paris 1910 又その簡單なる説明は米國に於てマキスが企て居る。M. M. Davis, Psychological interpretation of society, New York 1909. 又タルドの最も圓熟せる社會學說を窺ふを得る「經濟心理學」と群集、公衆の研究等については、我國に於て米田博士の紹介「經濟心理の研究」、「現代人心理と現代文明」等がある。A. Dupont, Gabriel Tarde et l'économie politique, un essai d'introduction du point de vue psychologique dans le domain économique, Paris 1910 はタルドの社會學說を説き、その應用としてタルドの經濟學の紹介に努めたるものである。Roch-Agnusol, Tarde et l'économie psychologique, Paris 1926 はタルドの個人主義的社會觀を經濟生活の研究に關聯して紹介して居る。又 Gabriel Tarde, par ses fils, Paris Michaud は氏の生ひ立ち、經歷、性行等を知る上に無二の參考書とされる。

タルドの如き模倣説は當時英國に於てバジヨットがタルドに先だつて之を問題とした(5)。又米國社會學者ポールドキンも亦タルドと同時に模倣が重要な社會的事實であるとの見解に到達したのであつた(6)。併し乍らバジヨットは之を組織的に提唱せず、ポールドキンは之を心理的事實として

取扱ひ、個人の精神的發達と社會のそれとの間に存する平行現象に着目せるのみであつた。又一方に於て伊太利社會學者シゲレの如きは、タルドの群集、犯罪に關する研究等を補足、展開せしめし意味に於てタルドと共に聯想さるゝ學者である(7)。タルド當時の佛蘭西にあつて、氏の如く社會現象を心理學的に説明せんとする企圖は、歴史家ラコンブによつてもなされて居る(8)。ラコンブは人事現象が根本的に個人心理から發現するといふ見地の下に、テンヌ Taine の人種尊重の見方を非難するのであるが、氏はタルドの考へを裏書きし、社會事實は第一次的に個人的慾望に基づき、第二次的に個人的觀念の產物として現はされる。前者は出來事 l'événement を生み、後者は社會制度を成立せしめる。前者は偶發的の一回的であり、之に反して後者は反復性を持つものである。出來事は逸話的或は美術史を呈出するに過ぎず、社會制度は「科學として考へらるゝ歴史」即ち社會學を可能ならしめる。歴史法則はそれが故に、心理學的歸納法以外の仕方にて論定さるべきでは無いといふのである。

社會現象が其基礎に於て心理的現象なることは、極端なる生物學的社會學の見解を採用せぬ以上當然之を認めねばならぬ。タルドはこの平凡なる事實を明かならしめたと共に、社會現象が單純なる個人心理的現象とは異りて、心と心との間の相互的關係の現象なること、此關係現象としての

心理現象、特に模倣の現象を攻究することによりて、吾人の社會的認識が豊富にされ得ることを、よく力説し且明瞭ならしめたのであつた。此タルド社會學の成功が佛蘭西に於て、又其他の諸國に於て社會心理學的研究を刺戟せるのは多言を要せぬ。現代米國に於てはギディングス、ロス、エルウッド、英國に於てはマクドウガル、フォーラス、獨逸に於てはオイレンブルク、ストルテンベルク諸氏は皆タルドの影響の下に、心理學的社會學の研究に鋭意する人々である(46)。

タルドと同じく、心的相互關係を以て、社會の本質と見て、社會心理學を取扱へるは、ヘルメルト心理學派のリンデネルであらう。(G. A. Lindner, Ideen zur Psychologie der Gesellschaft, Wien 1871) シュタムルの心的相互作用説の如きも、タルドとの類縁を有する。白耳義ブリュッセル大學教授デュプレール Eugène Dupréel の如きは主としてタルドの影響の下に、^{ソツペール・ソツペール}社會關係を社會學の對象とした。(Le rapport social, Essai sur l'objet et la méthode de la sociologie, Paris 1912).

社會學の研究に於て生物學なり又は心理學の立場より社會現象を説明せんとする試みは、夫々其據る所の立場が生物學であり或は心理學であるに従つて、互に對立する傾向ではあるが、社會學を他の科學の範圍に歸屬せしめやうとする態度に於ては共に其軌を齊しうする。又此等の學説は夫々コントの社會有機體觀、ステュアート・ミルの個人主義を反映するものとも考へられるのである。

第十九世紀末までの佛蘭西社會學界の主なる潮流は、いづれにしても此二つの傾向であつた。然るに此二つの傾向に伍しながら、次のデュルケムの社會學主義に先行する第三の傾向が現はれ始めたのである。それは明瞭なる一傾向といふよりは、寧ろ他の傾向に含まれたる曖昧なる或る主張といふべき種類のものであつた。

第三の傾向を代表する個々の學者は、或は生物學的社會學に接近し、或は心理學的社會學に立脚せるものではあつても、特に社會が個人に及ぼす特殊なる影響に目醒めつゝあつたのである。此新しい傾向を包蔵する一團の社會學者の主張する所は、略々左記の點に於て一致せるのであつた。すなはち個人が爲す所のもの、個人が知る所のもの、總べて人が人たる資性の大部分は過去のあらゆる世代の數知れぬ複雑なる協議の結果に與へられたものである。藝術も科學も、法律も宗教も、又道德の如きものも、單なる個人的發明の總和や、個人的觀念の總合や或は個人的意志の總體として説明さるべきものではない。社會全體がこゝに反映したまた協力せるものと見做すのである。こゝに此傾向の社會學者として露西亞出身の社會學者ロベルティ、白耳義社會學者ドグレーフと佛蘭西固有の社會學者イズレーとをあげることが出来る。

ノヰコフと共に故國露西亞より佛蘭西に移住して佛蘭西語を以て著作に従事したるロベルティ

Eugene de Roberty (1843—1915) は最初コントの實證主義的社會學の祖述者として立つたのである(47)。この點に於て氏はリトレーと共に正統實證主義者として數へ得られるであらう。氏はコントの社會學に關する基礎觀念を其儘に踏襲しつつも、社會現象の研究に於てコントの爲さざりし記述的方法を新に採用せんとしたことは注目に價する。氏は「社會科學に於て缺くるは社會の自然史である。すなはち社會現象を出来るだけ分析的に記述することである」といつて居る。然るに氏はその後の著述(48)に於て、コントの影響を脱し、むしろコントの敵となつたと自稱した。

ロベルティの最も獨創的なる學説は、その生物社會的假説 *Hypothèse bis sociale* なるものである。氏によれば有機的事物、生理的事物より超有機的事物への發達には中斷がないのである。社會は超有機的事物であつて、超有機的生活は生物的淵源を有するものであるが、此超有機的生活即ち社會的結合は個人の心理的發達に對して、重大なる影響を及ぼすものである。集合的心意は個人を模造し、集團の一部として變化せしむるのである。又心理的生活と社會生活、即ち道德生活とは生物的的生活に共同の淵源を有するものである。かくして個人精神は生物的社會的に説明されねばならぬといふ。氏によれば超有機的事物の進化は三つの段階を通して營まれる。第一は生物個體的意識、第二は集團的或は集合的意識、第三は社會個人的意識これである。個人的意識は常に社會

的なるものを前提するといふのが氏の見解である。

白耳義はさきに力學的社會學の傾向を最も露骨に代表する社會學者ワックスワイラー Emile W. Arweiler (+1916) を生み、又フイエーと共に契約有機體説を採るドグレーン Guillaume De Greef (1842-1924) を出したのである(49)。

ワックスワイラーは、同様機械觀に基づく社會研究に志したるソルヴェー Ernest Solvay が一九〇二年建立せるソルヴェー社會學研究所 *Institut de Sociologie Solvay* 所長として力學派の隨一と目せらるゝ學者である。氏の主著は *Esquisse d'une sociologie*, Bruxelles 1906 であるが、氏によれば人間社會現象を環境に對する反作用として認むることにより科學的社會學は成立つ。人間に於ける獨特の環境は他人である。人が他人と恒久的に相互作用を行ふは社會的親和 *l'affinité sociale* による。生物的感動が人間に於て此社會的親和となるものである。社會的親和は種々なる段階を経て進歩し、遂に社會的協力 *le synergie social* に至る。社會的親和なるものを攻究するのが社會學の任務であるとして居る。此ワックスワイラーの力學の見方は行動主義と通ずる點がある。従つて行動主義的社會學を問題とする獨逸「關係學」の主筆者ギーゼの如きは、ワックスワイラーをその先行者の一人として居る。(L. Von Wiese, *Allgemeine Soziologie Teil I. Beziehungslehre*, München 1924, S. 43 ff.)

ドグレーンはリトレー、ロベルティ等と共に、コントの科學分類を根本に於て承認する。社會

を有機體と比較することも、氏の願慮せる所であるが、生物個體と社會との間に存する程度上の差異點を數へると共に、氏は最も根本なる兩者の相異として、社會の例に於てその要素たる個人の自由意志の存在をあげて居る。自由意志あることによつて、社會人は他の個人に對して契約的關係に立つのである。此契約的自由は生物有機體の要素に缺如する所のものであり、此自由は社會をして契約的有機體たらしむるものである。従つて社會學の對象は單純なる生物學の手段を以てしては認識し得ざる構成物であつて、それは相互的同意 *le consentement mutuel* の特質を備へ、而して此點に於て、社會學は生物學より判然と區別さるゝ一個の科學たり得る道理であると。

社會體 *le corps social* は有機的 生理的 心的諸現象より區別さるゝ特質を基礎として、之を超有機體 *un superorganisme* と云ふことが出来る。すなはちこれは單純なる個體的有機體とは構造上機能上に異り、内部的外部的の必要に基づき、より完全且特殊なる適應を行ひ、その要素たる個人の相互的同意による集合的意志の賢明なる且方法的なる干涉に基礎をおく所の、集合的努力の優秀なる組織的表現なのであると。ドグレーフはかくの如くに社會を見做すのであるが、超有機體の現象とし營まるゝ社會的諸現象の間には、無論相互的作用が成立つとしても、基礎的現象は經濟的現象であり、此經濟現象より道德的 宗教的 法律的 科學的 藝術的諸現象が皆決定さるゝとい

ふ點に於て、氏はマルクスの社會觀に著しく接近するのである。

前述ロペルティの生物社會的假説は、又心理學者リポーの友イズレー *Jean B. J. Izoulet* (1854) の採用する所となつて居る⁽⁵⁾。氏は光彩陸離として人を魅する筆致を以て、詩人思想家の言を引用しつゝ、自説の獨創的表示を企てたのである。好んで類推法を用ひ社會學を生物學の知識の上に建設し、生物の一般的進化を三つの段階に分ち、細胞より細胞集合たる動物へ、動物より動物集合たる社會へと進化することによつて、こゝに人間社會 *la cité* ありといふ。此意味にて優級有機體 (氏は *Hyperzoaire* 優級動物と稱して居る) たる社會は個人を細胞とし、言語思想道德藝術科學等の總ての文化を生むのである。又動物たる人間を變じて之を文化人とするは、偏に社會の作業である。總ての結合は多産的であり、結合は創造的であつて人間精神も亦社會の所産に外ならない。精神は社會の賜である。 *L'âme est la fille de la cité.* (6)

イズレーは右の如く考ふることによつて、唯物主義と唯心主義の對立、決定論と自由意志の問題、社會主義と自由主義の對抗、暴力に對する正義、無神論と之と戦ふ宗教等を夫々調和し解決し得ると誇つたのである。然るに氏は單に自説を力説するに止り、之を仔細に論證する用意を缺いて居つた。又その説は表面上極端なる社會尊重の思想の如くであり乍ら、その背後には氏の個人主義

が潜在し、その結果社會的進歩は究局に於て個人的能力、個人の天分に淵源するといふが如き矛盾せる結論に到達して居る。殊に氏に於て、社會學は生物學より曖昧に區別さるゝに止まり、社會學は生物社會的科學 *la science bio-sociale* と云ふことになつて居る。

パウロ・バルトはイズレーの社會學を批評して、「氏は社會の心的生活の貴重なる見取圖を提供する。併し乍ら、社會生活が作り出さるゝ機制の詳細なる記述を少しも提出しては居らない」(註)と評して居る。たゞ然しイズレーの總ての企圖は、やがてデュルケムによつて大成さるゝを見る時はエスピナスと共にデュルケム社會學の直接の先行者として重要な學者である。殊にイズレーが協力^{シヤルケ}を伴ふ作業の特殊化を以て生物の進化従つて社會の進化を説明せることなどは、デュルケムの分業論に示唆を與へたること尠しとせぬと信ぜられるのである。

- (32) Novicow, op. cit p. 1.
 (33) Marion, *De la solidarité morale*, Paris 1880, 5 éd. 1899.
 (34) *Les lois de l'imitation*, Étude sociologique, Paris, 1890, 4. éd revue et augmentée, 1904. 7. éd. 1921.
 (35) *La logique sociale*, Paris 1895, 3. éd. 1898.
 (36) *L'opposition universelle. Essai d'une théorie des contraires*, Paris 1897.

- (37) Tarde, *Les lois sociales: Esquisse d'une sociologie*, Paris 1893, 8. éd. 1921. 風早八十二譯「タルド社會學原理」。
 (38) Tarde, *Psychologie économique*, 2 vols. Paris 1902.
 (39) *Kölner Vierteljahrshefte für Sozialwissenschaften*, 1. Jahrg. H. 1. S. 58.
 (40) Tarde, *La criminalité comparée*, Paris 1886; *La philosophie pénale*, 1890.
 (41) Tarde *L'opinion et la foule*, Paris 1601, 5. éd. 1922. 赤坂静也譯, 「輿論と群衆」。
 (42) W. Bagehot, *Physics and politics*, London, 1872.
 (43) J. M. Baldwin, *Social and ethical interpretation of mental development*. New York 1897.
 (44) S. Sighele, *Psychologie des sectes*, Paris 1888.
 (45) Paul Lacombe, *De l'histoire considéré comme science*, Paris 1894; *La psychologie des individus et des sociétés chez Taine historien des littératures*, Étude critique, Paris 1906.
 (46) C. Sganzini, *Die Fortschritte der Völkerpsychologie von Lazarus bis Wundt*, Berlin 1913. S. 188 ff. はこの間の消息にふれて居る。
 (47) Roberty, *La sociologie, essai de philosophie, sociologique*, Paris 1881.
 (48) Roberty *L'éthique, le psychisme social*, Paris 1897; *Nouveau programme de sociologie*, Paris 1904.
 (49) *De Grecq, Introduction à la sociologie*, 4 vols. Paris 1886—1889, 2 éd 2 vols, 1911; *Le Trans-*

formisme social, Paris 1895, 2. éd. 1901; Les lois sociologiques, 1893; La structure générale des sociétés, 3 vols. 1908. De Greef を米國に紹介せるもの D. W. Gouglas, Gaillaume De Greef, The social theory of an early syndicalist, New York 1925 である。

(50) Izoulet. La cité moderne, métaphysique de la sociologie, Paris 1894, 4 éd 1897.

(51) ibid. p.149.

(52) P. Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie, I. Teil: Grundlegung und kritische Übersicht, 3. u. 4. Aufl. Leipzig 1922, S. 412—3.

III

生物學的社會學に於ては、社會現象を生物學的に、或は生物學の學理の類推を以て之を説明し得るとした。又心理學的社會學は心理學の基礎の上に、社會學理論の構成の可能を信じたのであつた。此等の學派に於ては、社會の研究が他の科學の研究を前提して成就されると認めるのであるから、社會學獨特の科學的立場としては存在せぬかの如くに見える。然るに社會學は果して何等か特別なる他の科學の問題よりは全然異なる別種の研究問題はないものであらうか。何等か特質的なる事實が存在して此事實の攻究を中心として、社會學が他の科學とは判然と分離した獨立的科學とし

て成り立つ可能性はないであらうか。思ふに斯學の祖コントは此等の疑問に肯定的答解を與へんとせるものである。すなはち彼は宇宙的進化を論じてその最後の段階としての社會の存在することかゝて之を攻究する特別なる科學としての社會學の論定を企てたのであつた。不幸にしてコントは社會進化論に捉はれ、必要なる社會靜學の攻究を閉却したる結果、社會現象の究明に幾多の缺陷を残したのである。それが故にコント以後の學者は或は再び生物學に頼り、或は又コントの斥けたる心理學的研究に復歸した。ロベルティ、ドグレーフ、イズレー氏等の努力は、いはゞ再びコントの立場に歸つて社會學に獨立科學の體面を與へんとすることであつた。たゞ此等の人々は社會學に獨立の可能性を認定せんとして、而も不徹底なる態度に終らざるを得なかつただけである。然るに此問題を正面より徹底的に解決し得たと自信し、佛蘭西社會學の發達史上未曾有の有力なる學説を提出し、又一般佛蘭西學界に於て最も鞏固なる學派を作るに成功せる者は實にコントの實證的精神の核心を把握し、ルソーの一般精神（エスプリ・ジェネラル）の考へを發展せしめ、而も之を發展せしむるに當つてリボー、ヴントの心理學を參酌し、最もエスピナスの社會學を採り入れたるエミール・デュルケム David Emile Durkheim (1858-1917) 其人に外ならなかつた。而して氏はその社會學を、當時の代表的なる心理學的社會學の大立物タルドの學説に反對なる立場に於て之を提出したのである。

デュルケムが社會學を説くに當つて最も特色とする所は、社會學を他の基礎科學より判然と區別し、獨立的一科學として之を樹立せること、及び社會學の根本的態度として客觀的研究を極度に尊重せることである。最初の點について云へば、デュルケムの主張する所は、社會現象が生物現象や個人心理現象等とは全然異なる特殊の性質を有すること、従つて此現象を攻究する社會學が獨特の科學であり、之を生物學や心理學に還元し得ぬといふことである。社會學を一個の獨立科學とする爲めにその對象と方法を決定した努力は、デュルケムの業績中最重の地位をば占める。而して氏はその社會學研究の基礎論を「社會學的方法の規準」(6)に於て詳細に論述するのである。

デュルケムの説く所によれば、一つの全體は屢々それを構成する諸部分が有する屬性とは非常に異つた屬性を具有する。例へば細胞を形成しつゝあるものが礦物的諸要素に過ぎないとしても、此等の要素は或種の仕方によつて結合する結果、彼等が此結合前には持たなかつた、そして生命の特質をなす所の榮養生殖等の現象を呈出する。それ故此等の要素は彼等の綜合といふ事實によつて、生活實體となり生物學の對象を作る所の全く新しい一種の全體を形成するのである。之と同様に、多くの個人的意識は一の確乎たる仕方によつて結合することで、彼等の間に取交はされる諸關係から、個々に分離して居る時に彼等が舞臺となる生命とは非常に異つた一つの新しい生命をば呈出す

る。これ社會生活であつて、宗教上の制度信仰、政治的 法律的 道德的 經濟的 諸制度一言にして云へば、文明を構成する一切のものは、若し社會なしとせば存在し得ないのである。社會現象は儼然として實在する。若し個人が兄弟 夫婦 市民としての義務を果し、取交せる契約を履行する時、それは個人と個人の行爲の外部に法律風習の内に存在する一定の義務を果せるものである。よし此義務が個人的感情と一致し、個人は心中にその實在を感じせぬとしても、彼等は矢張り客觀的存在物なのである。何となれば之を作爲せるは個人に非ず、個人は之を教育によつて授かるが故である。社會的事物は集合的作物であり恒存的作物であり、個人は教育によつて之を認識し、且尊敬することを教へらるゝ結果之を受入れ採用するのである。社會現象の大多數のものは皆此仕方にて現はれる。社會現象が部分的に個人の直接的協力によつて成る場合と雖も事は同じである。多數人の集會に於て發揚される集合感情の如きも、個人的感情に共通なるものが發表されるのでは無く、それは何物か全く別種のものたるのである。集合感情は共同生活の結果的事物、個人的意識の間に取交さるゝ作用反作用の産物たるものである。かくて社會には行爲 思考 感情等に關する一定の仕方が存在し、彼等は個人意識に對して外在するといふ特徴を持つのである。

かくて社會事實は一定の行爲の仕方 *des manières de faire* であるが、それは社會事實の流動

的種類である。然るに今一つの種類として此流動的事實が結晶せる結果、集合的存在の仕方、*Mant-
dren Väter*がある。それは行爲の仕方固定せるものに外ならない。すなはち社會事實として行
爲 思考 感情等に關する一定の仕方が存在する外に、その凝結せる産物として政治的構造 住宅
様式 交通機關等總て社會制度と稱せらるゝものが存在するのである。而して此等の社會的事物は
皆個人的表象の融合の結果成り立つものであるといふ意味にて、これを集合表象 *Les représenta-
tions collectives* と呼び、又それが多くの社會制度を包括する點から、之を一般に *Les institution*
とも呼ぶ。

既に生物學が社會事實を説明するに不充分なることは、一般に認められし所である。然るに之と
同様に、社會現象は之を個人的感情 個人的慾望 個人の反省的思慮 發明等の單純なる延長とは
見るべからざるものである。コントが夙に潜在的に抱いて居つた通り、社會事實には此等のものゝ
延長以上の何等か全く新しい別個の性質が存する。 *anima generata* 固有のものが在るのである。云ふ
迄もなく、社會事實の要素或は運載者は個人心以外のものではない。併し乍ら此個人的意識を一つ
一つ切り離して考へる時、社會現象の充分なる説明原理を發見し得ぬのである。すなはち社會現象
は個人心の現象の單純なる總和的事實ではなくて、一種の化成的事實として現はれるからである。

こゝに於て個人意識を基礎として之を論ずることを得ず、社會現象は個人の接近、其相互關係より
成り立つ所の獨特の綜合現象として成立つと云はなくてはならない。デュルケムは卒直にかゝる
化成的事實或は綜合現象としての社會事實を新しき科學たる社會學の依つて立つべき正當なる研究
對象と認める。

社會學の對象たる社會事實はその要素からは説明し得ず、唯之を直接に觀察することによつての
み科學的説明に到達し得るものであるから、社會學は此事實を堅く把握することによつて、明に獨
立の一科學たり得るとデュルケムは考へる。氏の此考へは社會學に於て全體的思考 *Tataltätige-
danke* が必要であるといふ獨逸社會學者スパン、フィアカント等の見方 (5) に通ずる點があるであ
らう。

一般に近世の科學的精神を具體化する根本的態度は、分析主義と客觀主義であると見做すを得る。
デュルケムにあつては次に指摘するやうに、社會事實を事物として取扱ふことによつて、其客觀主
義が徹底されたのであるが、分析主義に至つて氏は反つて之を限定する點に特色がある。すなはち
社會學の對象たる集合表象を、如何なる遁辭の下に於ても之を分解するを許さるのである。是れ
氏の根本的原則であつて、こゝに「社會を説明するに社會を以てする」といふデュルケム主義があ

らはれる。氏は勇敢に次の如く主張するのである。「心理學と社會學との間には、生物學と物理化學的科學との間に於けるやうに、連續の斷絶が存在するのである。従つて社會現象が心的現象から直接に説明さるゝすべての場合、その説明が虚偽なることを信じて可なるものである」(55)。「かくて若し人が早急にアテネ文明の藝術的特質を、先天的審美性能に歸するならば、それは殆んど火を説明するに燃素を以てし、阿片の効果を説明するに眠力を以てする中世を眞似るに過ぎない」(56)。此等の言葉は夫々社會現象に對する心理的説明を反駁せる氏の説である。

デュルケムはかくの如く考へ、集合表象に實在性を附與し、之を對象として社會學は成るといふ。然し氏は集合表象なるものが、其存在と効果の基礎を全然個人意識の外に持つといふのでは無い。之を超自然的な神秘的存在物として、かの民族精神 *Volksgeist* 等と同視するものでは無い。社會學は或る意味にて社會心理學たるものであるが、唯心理學とは異なる對象を持つのである。又社會學は社會的實在現象を専ら客觀的方法にて攻究するが故に、社會學が心理學より區別さるゝ所の對象の特殊なる客觀的徵表を決定しておくことは、吾人の意識内部に於いて個人的表象より集合表象を區別し、之を把握するに必要なことである。デュルケムは此必要に基づいて、集合表象の徵表を正確に論定し得るとした。すなはち法律的规定や風俗慣習や宗教的儀式の如き集合表象は、皆之

が個人心によつて認識されるが故に存在するのであるから、此意味にて此等のものは各個人の意識内に存在する。併し乍ら個人は此等の事物をば常に外部的の存在物、獨立的の事物、個人に先だちて存在し、個人を役するもの、個人より優れたる實在物であると信じつゝあるのである。何故であるかと云ふに、かゝる集合表象が個人をば拘束し、之を義務づける故なのである。社會事實は實にか様なる拘束を個人に對して持つ。一つの社會事實は、それが個人の上に與ふる所の、或は與へ得べき外部的強制力によつて認められる。而して此力の存在に至つては、一定の制裁の存在乃至、之に反抗する傾向のある總ての個人的企圖に對して社會事實が提出する抵抗によつて認められる」(57)。と説く。説く所の制裁 抵抗は、或は極めて緩漫にして單に道德的なる場合もあり、或は事實嚴重なる刑罰を伴ふ場合もある。孰れにしてもその現象の本質的特色は、個人的意識の上に外部から一つの壓迫を加ふべき力に存するのであるから、集合表象の徵表は正に拘束其者に外ならないのである。

デュルケムの社會拘束説に於ける拘束 *contrainte* は或は強制 威壓 威服等とも譯出されてある。爰に注意すべきことは、氏は今拘束を以て社會的事實辨別の標準、いはゞ最初の定義とする迄なることである。それ故にデュルケムは又擴衍 *diffusion* 或は普及 *generative* と客觀的存在 *objectivité* 或は外部的

存在 *exteriorité* 等をも、同様の徴表たり得るとして居る。但し氏は此場合に於ても、結局は拘束がその基礎と目しうるとした (*Règles*, pp. 15—16, *Préface de la seconde édition*, p. XX)。

要するに社會學的分析は社會事實の要素に遡るを要しない。此事はデュルケム社會學の公理であつて、近世科學の根本的態度たる分析主義は、氏に於て限定されたものと見られよう。之に反して同じく近世科學精神を具體化する客觀主義は、デュルケムに於て殆んど無條件に肯定されて採用される。氏によれば、社會學的方法の基礎原理は社會的事實を事物 *choses* として取扱はれねばならぬといふのである。然し此言葉——事物として——に就ては多少の注意が必要である。氏の説く所を見るに、先づ事物とは觀念の對立物である。即ち叡智に非本然的なる認識對象の謂である。従つてそれは内省によつては理解し得ぬ。たゞ客觀的態度を以て觀察し、實驗する事により、その皮相なる外面より、深奥なる内部を明にし得るものである。故に社會的事實をかくの如き事物として取扱ふといふことは、それを物質的事物と同一視することでは無いが、客觀的態度を以て研究することである。然るに在來の社會研究は主として觀念的側面から之を試みたもの許りである。例へば法律の本質や財産の本質或は宗教の本質等に關して、人は觀念論的寫想を試みたに過ぎなかつた。何物よりも先に觀念や本質といふものを捉へんとしたのであつた。然るに必要なことは、むしろ何

物よりも先に事物を觀察するにあつたのである。今日以後は法律や宗教等の社會的事實に就て、其觀念を考察するに非ずして、此等の現象を其客觀的實在性について攻究し、其雜多なる形式と歴史的變化の跡を検討しなければならぬ。吾人は社會事實の研究に於て、總ての先入的偏見を罷脱し、ア・プリアオリの考察を一擲し、恰も物理化學的現象を取扱ふが如くに、之を客觀的態度に基づいて取扱はねばならぬのである。

さて、社會現象を眞に事物として取扱ふが爲めには、事實について或る客觀的特徴を捉へて觀察の完全なるを期し、且出來得べくんば之を計量し得るものとせねばならぬ。文藝復興期以來總べての科學の努力は質を量に還元することにあつた。直接には計量し得ぬ所の質的變化に平行する量的變化をば見出すにあつたのである。かくてデュルケムは此研究方法が社會學の場合に於ても行はれねばならぬと信じたのであるが、一般に此當時の佛蘭西社會學者が、量を以て質に置き換ふることに努力したことは注意すべきことである。例へばノスト Adolphe Coste (5) の如きは、デュルケムから獨立に客觀主義を力説し、社會學は客觀的科學なるが故に、その知識を民族の經驗即ちその歴史と現狀より求めなくてはならない。「吾人は社會をば之に所屬せざる者として、換言すれば此地球上の人間でなきかの如くに研究しなければならぬ」(6)。そして社會現象を數量的に研究せんとし、

社會測定學 *la sociométrie, ou mesure comparative de l'avancement social des nations* を企てたのであつた。タルドの如きも亦一切の社會現象を *croyance* と *désir* とに還元して見る際に、信と慾とが本來量的のものなるが故に、一切の社會現象も亦數量的に測定し計算し得らるゝものとしたのである(6)。タルドに於ては、信と慾とが直ちに計量し得る心的要素と見做されたが、デュルケムにあつては、集合的感情、信仰、表象等の機微なる變化は、それ等のものゝ外部的表徴によつてのみ計量し得るものとなした。換言すれば此等のものゝ効果が、統計的數字に表示し得る場合にのみそれを限つた。氏が「分業論」に於て社會連帶の程度や形態を研究する爲めに、法律の變化に頼つて之を測定し得るとした如き、又「自殺論」に於て、社會の幸福程度を自殺數によつて決定せんとしたるが如きは皆其例である。

デュルケムが社會事實に正常的のもの *normal* と異常的のもの *pathologique ou morbide* を分つ區別の標準も亦、此客觀主義の態度を徹底せるものである。すなはち氏は正常的社會事實を、それが廣く行はるゝといふ普及性によつて決定し、又之に反する異常的事實を除外例たる偶發的性質によつて決定せんとしたのである。デュルケムにあつては、事物の實際的直接効用は正常的事實たる標準となり得ない。社會に對して有害なる事實は社會上廣く行はれず、之が永續する筈もなく、

又數多くの他の社會に行はるゝ筈も無いのであつて、此點より云へば、實際的効用は正常性を決定する根本的標準たり得るかに考へ得らるゝのであるが、直接の効用無き所の或る風習の如きは、廣く行はれ且永續することがあつて、これを正常的事實と認めなければならぬ場合がある。實に彼等は廣く行はれ永續することによつて、社會的特質的のものとなると同時に、集合表象の要素、社會連帶の要素として、間接に社會に缺くべからざるものと迄なりつゝあるのである。従つて社會事實の正常病態如何を決定する標準は、その事實の普及性其者でなければならぬ。かくの如くデュルケムが正常、異常を社會現象に分つは、抑々氏が理想主義的目的論を排しつゝなほ科學的研究の内に行爲の規範を求めんと欲する故である。氏によればカント流に純粹理性と實踐理性とを峻別するは誤りであり、科學は實在の研究の内に規範的標準を求め得るものである。實在的研究によつて普及性を有する現象は即ち吾人の目的として意欲すべき現象其者であるとする。併し乍ら、かくの如き見方を採るならば、多くの社會的不正の現象もそれが普及性を有することによつて、望ましき現象と認められなくてはならない。犯罪の如きは確にその一例であらう。然るにデュルケムは犯罪について、その正常性を認めることから、之が社會的に効用ありとまで極言する。この極端にまで奔るならば、正常的事實とは終に單なる普及的事物其者に過ぎないのであるから、正常性の決定は最

早最初の企圖に副はざることゝなるであらう。此故に後期のデュルケムは、寧ろ社會事實の正常異常の問題には一般に關知せざる態度を採つて居る。

正常的社會事實を普及性によつて決定するといふことは、嚴密には或る一定の社會型を前提として始めて問題となることである。故に正常、異常を社會的事物に就て區別することは、すなはち社會的類型 *Les types sociaux* の決定を豫想する。デュルケムによれば、社會學當面の問題は實にかゝる社會的類型を決定することに存し、此仕方は曾て動物學が企てゝ成功せる仕方である。社會學は歴史について比較法を施すことによつて、此大事業を成就し得る望みがあるとす。比較法は嚴密なる歸納的科學の法則を樹立するに足りる有力なる方法であつて、社會學は歴史的比較法によつて、最初に最も簡單なる原始的社會型を把握し、然る後に其複雑なる形態の理解に進むべきである。例へば宗教に關して、その最も單純なる原始的形態について充分に其本質を究め、然る後それが漸次進歩的に構成さるゝ仕方を追求することによつて、現代宗教の理解に進むと同様である。歴史的比較法を適用することによつて、デュルケムは基礎的社會型を決定し得るとし、即ち群ホムドをそれと認めて居る。群なるものは社會として最も單純此上なきものであり、彼等には全然特殊化といふことが行はれぬと見做し、此基礎的社會型を出發點として順次に他の社會型を理解し得べしとした。此

原型的社會に次で現はれる他の進歩せる形態は、單にその複雑せるものにすぎず、基礎的社會型の分化せるものに外ならないものと見たのである。

斯様な歴史的比較法の歸結は又、デュルケムに於て、所謂「基礎的社會型」を以て進歩せる爾餘の社會形態と社會的事實とを理解せんとする態度を生むに至つた。それは「社會を以て社會を説明する」といふ氏の立場を、別の方面から最もよく明にせる所のものである。氏によれば此態度方法によつて、社會學は一個の科學としての面目を完成する譯であり、基礎的社會型に於ける社會的事實が社會的拘束を最も純粹に呈出することは、總ての社會的事實の本質が此特質を有するものなるを悟るに足りるとする。

(53) Durkheim, *Les règles de la méthode sociologique*, Paris 1895, 2.éd. augmentée d'une préface, 1901, 7.éd. 1919.

(54) O. Spann, *Gesellschaftslehre*, 2.Aufl. Leipzig 1923, S. 41. ff.; A. Vierkandt, *Geellschaftslehre*, Stuttgart 1923, S. 53 ff.

(55) *Règles*, 7.éd. p. 123.

(56) *ibid.* p. 133—4

(57) *Règles*, p.15.

(58) Coste. Les principes d'une sociologie objective, Paris 1899; L'expérience des peuples et la prévision qu'elle autorise, (2^{me} partie de la sociologie objective) 1900.

(59) Coste, Les principes, p. 106.

(60) Tarde, Essais et mélanges sociologique, Paris 1895. Chap. La croyance et le d'air, II.

四

デュルケムの社會學原理は、社會現象を何等の先入的偏見を持たずして、實證的科學的に闡明するにある。而して氏は社會學がかかる研究を満足に實行するが爲めには、社會現象を概括的に問題とすることを止めて、之を分科的に攻究することを必要なりとした。此必要から社會學一般は、社會形態學 社會生理學 綜合社會學の三大部門に分割される。社會形態學は外部的形態に於て社會を研究するものである。こゝに外部的形態といふのは、空間的意義を有して居る。すなはち社會の外部的物質的形態を意味するものであつて、恰も吾人の精神が其地盤たる個人の頭腦の解剖學的組成に依りて決定される様に、社會現象も亦その地盤たる物質的形態によつて決定される。デュルケムは、社會の物質的形態を土地 廣狹 地形 人口の配置等に認め、社會生活の此等重要諸因子を社會の基體、le substrat social と呼んだ。社會形態學は此社會の基體を單に記述するのみならず社

會現象を説明する任務を有するとして居る。社會形態學的企圖は明に獨逸の人類地理學者ラッツェル或はさきに指摘せるドゥモラン等の地理學的社會學の研究に類縁を有するものである。

然し社會生活の基體の外に、なほ社會生活其者が存在して居る。それは生物に於ける機能に當るのであるから、生物學に於ける生理學と同様な役目を社會に關して果す所の社會生理學が社會形態學に次で問題となるのである。然しデュルケムの社會生理學は單一では無い。その對象の複雑性よりして幾多の部門に分たれる。第一に宗教の研究、第二に道德の研究、第三に法律の研究、第四に經濟の研究、第五に言語の研究、第六に藝術の研究がある。尙此外法律道德に關聯して犯罪の研究が存するであらう。かくてデュルケムは宗教社會學 道德社會學 法律社會學 經濟社會學 言語社會學 藝術社會學等の諸部門をその社會生理學中に區分するのであるが、その部門は之を以て盡きた譯では無く、これ以外犯罪社會學 家族社會學 政治社會學 認識社會學等をも數へられるに至つた。而して社會形態學社會生理學等の研究の進歩を前提として、更に第三に此等の研究を綜合する所の綜合社會學が成立つのである。それは社會事實を抽象的に特色づける所のもの、特殊的研究によつて確立された種々の法則がその特殊的形式に過ぎないやうな一般的法則の樹立を目的とするもので、社會學の哲學的部分を成すものに外ならぬ。

デュルケムは以上の科學的規模に於て社會學の攻究を企てたのであるが、その企圖は下に述べるが如くに多數の門下生や共鳴者を得ることによつて着々と實行に移されたのである。併し乍ら、今は先づデュルケム自身の業績に就て説かなくてはならないのである。

デュルケムの最初の名著は「分業論」⁽⁶¹⁾である。此研究は社會連帯に關する社會學的研究であり社會連帯が道德的事實である以上、此分業論は氏の所謂道德社會學の研究に屬するものに外ならない。氏は分業或は分化といふことに於て社會連帯の本質を捉へんとするのである。社會連帯は元來無形のものであるから、これをば直ちに客觀性を尊重する科學的攻究の對象として採ることを得ない。之を表示する所の具體的な法律的規定に就て代用的對象を求めねばならぬと考へる。一般に法律的規定は社會連帯を正しく反射するものであるが、これに二種を分つことを得るのである。禁止的規定と報償的規定がそれである。然るに禁止法の代表する社會連帯の紐帯は、之を破る時犯罪を構成する所のものである。それ故に犯罪が如何なるものであるかを知る時は、人はすなはち此種の社會連帯の紐帯の本質を明にし得らるゝ譯である。デュルケムによれば犯罪は集合意識の力強い確状態を毀損するものと考へられ、禁止法即ち刑法の規定は集合意識コレクティブ・コンシャス・イン即ち共通感情コンマニオンに基づく點に於いて、最も本質的な社會的類似を表示しつゝあるのである。換言すれば、刑法の規定は個人的

類似によりて成る社會連帯に照應するものでなければならぬ。

禁止法の規定に對して、報償法の規定は何を意味するかと云ふに、此規定は集合意識の異常な状態、いはゞ非本質的な状態を表示し、又かゝる規定の決定する關係は單に間接に個人を社會に結びつけるものに過ぎぬ。なほ此規定が決定する關係には、消極的のものと積極的のものと區別が見られるのである。物權法は消極的な例であつて、事物を人格に關係せしむるに止り、人格相互間の關係を決定せぬ點でそれは消極的なものである。この消極的關係は人間相互間の問題たらぬのであるから、社會連帯を代表し得ない。これに照應する社會連帯は存在せぬのである。之に反して積極的關係といふのは分業に由來する協働的關係であつて、商法契約法等の法律的規定から成り立つ確定的體系によつて支配されて居るのである。

デュルケムによれば、結局積極的社會連帯に二種のもものが認められる。第一はさきに指摘した類似者から現はれる連帯であり、第二は差異者の分業から現はれる連帯である。而して氏によつて、兩者は機械的連帯と有機的(互助的)連帯の區別として認められるのである。前者は個人の特殊的人格が發達すればする程存在が困難となり、之に反して後者は特殊的人格が發達すると共に其基礎を堅ふるのである。未開社會の連帯は人々の類似による機械的連帯であり、文明社會の連帯は人々

の差異による分業的な有機的連帯なることが歴史的に證明されるのである。一般に此兩種の連帯は社會の構造上の區別を得しめるものである。すなはち環節的社會 *la société segmentaire* は機械的連帯に所應するものであり、組織的社會 *la société organisée* は有機的連帯に應ずる所のものである。そして此兩種の社會型は對抗的である。第二のものは第一のものが退化すると共に勃興し得る性質を備へて居る。

かくの如くデュルケムは類似者の成す環節的社會より差異者の分業による組織的社會に進むと見る點から、スペンサーの「軍事的社會より産業的社會へ」といふ進化的見解の誤謬を指摘しつつある。併し乍ら社會進化に於ける類型を決定する點に於て、デュルケムの見解はスペンサーの軍事的社會産業的社會の分類のみならず、獨逸に於けるテンニイスの有名なる共同體對會社體 *Gemeinschaft, Gesellschaft* の區別に類似の企と見做し得るであらう(23)。

デュルケムは進んで分業の眞因を探索する。曰く、經濟學者は分業に就て原因をあぐるのであるが、それは眞の原因たり得ないもの許りである。分業の眞因は寧ろ經濟學理論の以外に求められなければならぬ。すなはち分業の進歩は原因として次の二つの事情を數へる。第一は環節的社會の消失で、これは社會の精神的密度の増大といふことに歸着する。氏は此精神的密度をば或は動學的密

度と呼んで居るが、それは人々の社會的接觸度である。人々の社會的接觸度の増大が第一因として分業を決定するといふにある。第二は社會の容量の増加であつて、密度の増大を伴ふ社會容量の増加は生存競争を激甚とし、その結果として分業を進歩せしむるのである。以上兩因とも分業の主因なりとして擧げられるのであるが、此二つともデュルケム社會學に於ける社會形態學の見地より把握されしことは注意すべき點である。氏は此説明の成功よりして、總ての社會現象の説明は社會の基體特にその量質の組立より可能なりといふ見解を採るに至つたのである。

デュルケムの大著中「自殺論」(24)は最初の「分業論」第三の「宗教生活の基礎形態」に比較して、比較的引用されること少き著述であるが、之は氏の社會形態學の説明の効力を證明したる研究として、「分業論」と共に尊敬さるべき著述である。而して此自殺研究は、分業論と共に矢張りデュルケムの道德社會學的研究に所屬すべきものである。歐洲社會に於ける自殺の頻發はデュルケムをして社會事實としての自殺の攻究を思ひ立たしめたのであるが、氏は此自殺現象を一個の社會事實として見、先づその心理學の説明、人種、遺傳よりの説明、或は又氣候、氣温等の自然的因子からの説明が皆不十分なることを發見した。タルドは社會事實をば模倣の原理から説明せんと企つるのであるが、此模倣からしても遂にこれを解明し能はぬのである。模倣はその原始的因子に非ず、其他の

因子を援助する所のものたるに過ぎぬことを知るのである。自殺はこれを社會的原因によつて説明せねばならぬ。かくの如き見解の下に、デュルケムは自殺の型として利己的のものと、愛他的のものと、變則的のものとを區別し、第一のものが社會的集團の統整の程度に逆比例して増加すること、然るに第二のものにあつては反つて社會的集團の統整が過度なる時に増加すること、而して第三の種類は經濟的危機、婚姻上に於ける變則(獨身 離婚)によつて招來されることを知つたのである。云ふまでもなく此等の原因は總て社會的であり、社會が自殺數を決定するものに外ならない。自殺が科學的に攻究されし結果として、自殺に對する社會的對策が問題となる。デュルケムは分業の變則的形態を取扱ひ、その對策を提議せるのであるが、自殺に對する對策も亦之と同様に實證的研究の結果から誘導されるのである。曰く、個人と國家との中間的集團たる職業團體の復興が社會集團の健全なる統整を恢復する意味に於て病的の自殺數を減少せしむるであらう。殊にそれは利己的自殺の種類に極めて有効なるのみならず、變則的自殺に對しても道德的環境を再興する意味に於て、その對策たり得るのである。而して何故にかゝる對策が企てられるかは、現代の自殺現象が氏の方法論に於ける正常的事實に非ずして異常的事實なるが故に、之を正常の状態に復歸せしむる意味に於てである。

デュルケムの道德社會學的研究は、或る意味に於て、氏の中心的問題であり、氏は終始其研究を心掛けた。

以上「分業論」「自殺論」は其重大なる業績であるが、此外、氏の作物として此方面に顧慮さるゝものは、

La prohibition de l'inceste et ses origines, Année Sociologique, t. I. La morale, Revue Philosophique, 1920, t. 89; Sociologie et philosophie, Paris 1924, Chap. II. Détermination du fait moral 等である。

デュルケムの「分業論」「自殺論」等が、結合事實の實證的研究として、此等の事實を社會的に説明したるが如くに、氏の第三の、而して又最も反響を引起したる大著「宗教生活の基礎形態」(64)も同様に宗教生活を社會事實とし、之を社會學的に攻究せるものである。既に氏は社會事實を以て個人を拘束する特性を備へるとした。又氏は社會學は歴史的比較法によりて、最初に最も簡單なる原始的社會型を把握し、次で其複雑なる形態の理解に進むべきであるとしたのである。然るにこの兩種の見解は此宗教研究に於て未曾有の努力を以て適用されたのであつた。

氏によれば、宗教と雖も道德事實と齊しく根本的に社會的なるものである。宗教が社會的なりといふことを主張するに當りて、デュルケムは先づ在來の宗教研究の蒙を啓く。在來の宗教研究は何よりも先に宗教なる事實をば教義或は信仰觀念の組織として見た。知的表示としての宗教を取扱へるものに過ぎないのであつた。而して此點に於ては、スペンサーの分析的議論たるマックス・ミュ

ラーの自然論たると何等の擇ぶ所は無いのである。デュルケムはかくの如き前提の下に、宗教を研究することを排し、之を一つの社會事實として之を見るべきことを教へる。すなはち宗教が觀念の體系たる姿を取得せるは後世のことであつて、その本質は實に力の體系に外ならない。宗教生活を營む者は、彼自身を支配し同時に彼を支持し、彼以上のものに向せしむる或る力に参加することを感ずるのである。之は否定し得ざる事實であつて、是れ宗教的經驗其者である。併し乍ら宗教の科學的定義は之を外部的特性の擧示によつてなされなければならない。凡ゆる宗教は信仰と儀式とを伴ふのであるが、信仰の特質は事實を聖なるもの、*sacré*と俗なるもの、*profane*とに分つ兩分性である。聖なる事物とは禁制が保護し隔離するものである。俗なる事物とは此禁制が適用され、聖なる事物から引離されて存在する所のものである。宗教とは聖的事物に關係ある信仰儀式の連帶的一體であるといふことが出来る。詳しく云へば、聖的事物に關係ある、即ち隔離し、禁制の事物に關係ある信仰實踐の連帶的の體系であつて、此信仰、實踐は之に歸依する總ての人々を、教會と呼ばれる同一の精神的社會に結合するもの、是れ宗教である。

宗教は凡ゆる時代と總ての社會に於て存在するとしても、今其本質を科學的に明瞭ならしめんが爲めには、其最も原始的な單純な形態を取扱はねばならぬのである。デュルケムはかくの見解の下

に、原始的宗教を探索して、當時宗教學界の興味を刺戟した濠洲トーテミズムを以て、其最も原初的の形態なりとした。従つて氏の宗教社會學的研究は、此濠洲トーテミズムを社會事實として攻究することであり、氏は非常なる努力と精密なる検討の結果之を次の如くに説明したのである。

トーテミズムは宗教の定義に基づいて確に一個の宗教であり、而も之よりもなほ原始的なる宗教形態とては無いのである。トーテミズムは實に氏族を基礎とする最古の社會組織と密接不可離の關係にあり、氏族はトーテミズム無しに相互に區別し得ざるものである。夫故にトーテミズムの始源を發見し得る場合、吾人は同時に人類の宗教的感情を發揚する所の眞因を突止め得べきである。今トーテムに就て集團的トーテムと個人的トーテムとを分つことを得る。此兩者のいづれが他の者に先行するかを問題とする時、個人的トーテムは集團的トーテムを發生せしむるといふ見解は誤りであつて、前者は寧ろ後者を前提として成立つことを發見する。従つて吾人は氏族のトーテミズムを説明するの必要を認むるのである。

氏族のトーテミズムと呼ばれる所の總ての信仰を説明するに足る共通なる一原理を發見することは可能であらうか。トーテミズムは聖的事物の最たるものとして、トーテム的徽章をあげ、次に氏族がそれを名稱とする所の動植物をあげ、最後に此氏族の成員をあげるのであるが、此等の總ての

事物或は生物に共通なる何者かゞ存在しなければならぬであらう。換言すれば此等のものに先だちて存在し、此等のものゝ亡びたる後も残存する所の何等かの力、そしてその現はれる時到来する處宗教感情を鼓吹する所の隠れたる非人格的の力が存在しなければならぬのである。メラネシアに於て此力はマナの名稱を以て呼ばれる。トーテムの徽章は事實上二種類の事物を意味するのである。一方に於てそれはトーテムの外形的感性的形態であるが、他方に於て彼等は氏族と稱する一定の社會の徴表たるのである。例へば旗印は神すなはちトーテムの原理のシムボルたると同時に社會のシムボルたるのである。此關係は結局、神と社會との一なることを示すものに外ならないであらう。氏族の神即ちトーテムの原理は民族的社會其者以外のものであり得ないのである。まことに社會は人々の精神に神聖的感覺を誘發する總ての要素を具備するのである。何となれば社會はその成員に對して、神が信徒に對する關係と同一の關係にあるが故である。事實上神とは人が之に頼り、人が一定の仕方にて行爲することを義務づける存在物である。然るに社會は同様に、吾人に對して恒久的依存感を抱かしむるものであり、且社會は吾人を總ての種類の束縛 不如意 犠牲にまで拘束するものであつて、かゝる束縛 不如意 犠牲ありて始めて社會生活は可能となるのである。神は又吾人が、吾人より力強き者とし之に偉大なる精神的權威を附與する結果、尊敬する所のものであるが

社會的意見も亦同一の理由よりして、吾人に同様の尊敬心を命ずる所の威力を有するが如くに見える。神は個人力の源泉であるが、社會も亦個人が社會より享くる總てに關して、個人の力を増加し、彼を個人以上のものと爲すのである。社會が個人に對する此作用は常性的である。個人は同類より愛撫され、同情され、尊敬されることを欲求しつゝある。個人は文明の總ての成果を社會より享受するのである。個人は社會の成員たる一事によつて、彼を支配し彼を維持する所の力に關する觀念、即ち宗教的力の觀念を有するに至るのである。

デュルケムによれば、宗教の基礎形態としての濠洲トーテム主義より出發して幾多の高等なる宗教形態があり得るのである。濠洲土人の宗教は精神の觀念、或は靈的存在物たる靈魂、神等の信仰に基づくのであるが、トーテム主義は又此等高等の信仰の原因でなければならぬのである。祖先は肉體に宿る精神たると同時に、自然物から遊離する靈的存在物である。此神秘的祖先は既に神の觀念と程度上の差異を有するに過ぎず、かくてトーテム主義は複雑高等なる宗教形態と連続し行くのであるとする。

之を要するにデュルケムは宗教の本質を社會的なるものとし、之を宗教の原型たるトーテム主義に於て論證したるものである。併し乍らこれ故に宗教其者がその價値を低下せるとは信じない。否

氏はむしろ宗教の社會學的理論が宗教に關して永く議論の種となれるその實在性を認め、宗教の價値を新に是認せしものと信ずる。蓋し宗教は社會的機能を果すものであつて、決して人爲的創造物や、純然たる虚偽の體系に非ざるが故である。

デュルケム宗教社會學的業績は右大著の外、主なるものとして *Sur le totémisme*, *Année Soc.* t. V; *De quelques formes primitives de classification, Contribution à l'étude de représentations collectives* (en collaboration avec M. Mauss), *Année Soc.* t. VI; *Sur l'organisation matrimoniale des sociétés australiennes*, *Année Soc.* t. VIII; *La sociologie religieuse et théorie de la connaissance*, *Revue Métaphysique*, XVII, 7309 等の論文を數へられる。

デュルケムは分業論、自殺論等に於て最もよく社會事實を社會形態學より説明し、宗教論に於て社會事實が社會的機能として存在することを實證した。いづれの場合に於ても氏の根本的立場は社會事實を純理論の題材とし、其社會的理由を提出せるのである。社會は固有の生活を營み、その結果として社會事實あり、個人意識は此社會的生活の爲めに、常に或る種の規定を甘受しつゝあるといふのである。此最後の點は宗教に關して特に明瞭となつて居る。既に社會事實の暫定的定義はその個人に對する拘束によつて下されたのであるが、それは社會其者が其生活の必要より個人に對し

て與ふる精神的規定として考へられねばならず、かくて一轉して社會事實の本質其者が又拘束にありと推定されなければならぬこととなる。此點に於けるデュルケムの社會學理論は社會現象の本質を社會拘束にありとし、之を基礎的社會型に於て基礎付け、延て原始的社會事實のみならず、文明的社會現象に對して根本的説明を與へんとするものと云ひ得るであらう。而して此意味に於て、社會學は社會現象に對する普遍的説明の最も有力なる原理となり得ると信じた。氏は此事柄を、社會學は狭き特殊の科學乍ら事物の全體に對して中央の地位を占め統一的思索、從つて哲學的思索の根柢を提供し得ると考へる。古くより宗教が吾人の知的内容を提出したこと、哲學も科學も皆宗教より派生せるものなることは注意せられた事實である。併し乍ら宗教は人の知的内容を豊富にせるのみならず、人の叡智それ自體を形成するに貢献せるものである。換言すれば人知の大部分は宗教に負ふのみならず、人知の範疇即ち思考形式も亦宗教に基づく所のものである。然るに既に宗教は社會的なる存在物なのであるから、吾人の知的内容のみならず其運用の形式は社會的なるものでなければならぬ。氏は宗教研究の歸結として、宗教より派生する總ての文化のみならず吾人の論理活動までが、社會的拘束の事實から説明さるべきものであると考へたのである。總ての道德も法律もまた吾人の認識も、皆社會的拘束性より説明さるべき側面を持つ。社會現象は擧げて社會的拘束を

本質として成立し、それが故に社會的拘束を中心題目とする社會學によつてのみ、適切に説明し得られると見做すのである。

デュルケムは初め氏の爲めに作られたポルドー大學社會學及び教育學の講義を擔當し（一八八七—一九〇二年）、後巴里大學に轉じ、一九〇六年同文學部教育學正教授に就任、終始社會學的研究に努力せるのであるが、前記の重要な主著を發表せる外、一八九六年以來、社會學年報 *L'Année Sociologique*（此社會學年報舊卷 *ancienne série* は一八九八年より一九一三年に至るまで十二卷公刊された）を主宰して同志門下生の社會學的研究を採録し、同時にデュルケム社會學諸部門に關係ある各國の著述について紹介批評を試みたのである。而して、一九〇八年より別に社會學年報叢書 *Travaux de l'Année Sociologique* を主宰して、氏自身及び氏の學派の重要な研究を獨立せる著述の形にて公刊したのであつた。

氏自身主著の外、幾多の雜誌 紀要 其他の公刊物中に、社會學的研究、學說の説明、反對說の駁論等を企て、居る。其内主要なる分け氏の歿後、*Education et sociologie*, 1922; *Sociologie et philosophie*, 1921（山田吉彦譯「社會學と哲學」）の二書に編纂された。其他の論文及び遺稿は門下生の手によつて整理が進捗

しつつあり。遺稿の内、*L'Éducation morale*, 1925 が既に刊行された。デュルケムの社會學說に關する簡單なる紹介は門下生マンマンの解説（*Revue Philosophique*, 1918 Mai et Juin）及びビノーの摘要（*Revue Pédagogique*, 1918 Janvier）に見られる。之等はついでマンマン歿去直後の論述である。主要なる紹介は D. Parodi, *La philosophie contemporaine en France*, 3. éd. 1925. Chap. V; Roger Lacombe, *La méthode sociologique de Durkheim*, 1926; A. P. La Fontaine, *La philosophie d' E. Durkheim*, I. *Sociologie générale*, Paris 1926 等に在る。

米國に於けるゲールケの紹介があるが（*Gh. E. Gehrke, E. Durkheim's contribution's to sociological theory*, New York 1915）、之は前提ラコンフのそれと齊しく氏の研究方法を主として居る。ラコンフの著述は又批判的であるが、デュルケム生存中に反對の立場よりその學說を検討せるものに Simon Deploige *La conflit de la morale et de la sociologie*, 3. éd. 1923 がある。なほデュルケムのテキスト引用によつてその學說を丁寧に解明したるものとして Georges Davy, Emile Durkheim, Paris Michaud, を擧げる、ことが出来る。

デュルケムはコントの實證主義を徹底しつつ、社會學に對して一個の基礎科學としての形態を與へ、且つ自ら數種の有力なる具體的研究を發表して社會學の基礎を確立せるのであつた。氏の社會學說はなほ基礎附けを必要とし、若干の點に於て缺陷をも包含するであらうが、氏の確實なる方法

論、統一ある學理、優秀なる業績と儼然たる態度は、當時の佛蘭西精神學界を風靡し社會學界を懼伏するに足りるものがあつた。

デュルケムの偉大なる影響の下に、社會學は佛蘭西諸大學の文學部に正科として課せられ、今や尋常師範諸學校に於ける哲學教科目中にまで編入されつゝある勢である。氏は又其獨特の學的立場と良好なる學壇的地位より門下生の指導に鋭意したのであるから、氏の身邊に有力なる學派が形成さるゝに至つたことは怪しむに足りぬことである。

此一派の學統、所謂デュルケム學派或は佛蘭西社會學派と呼ばれる主要人物として、今日レギール、ブリュール、モース、ブーグレ、フォーコンネ、アルプワックス、シミアン、タギー等を數へる事が出来る。レギール、ブリュール、モース、ブーグレ、フォーコンネ、シミアン等は皆巴里大學に在りアルプワックスはストラスブール大學に、タギーはドイツン大學にあり、佛蘭西學壇はデュルケム派によつて獨占さるゝ趣が見える。佛蘭西社會學派はそのデュルケムの社會學的精神すなはち所謂社會學主義とその研究方法とを其儘に承認し、その祖師の尊重せる社會學諸部門に於ける分析的研究に努力し、一九二五年以降社會學年報をモースの指導の下に復活したので、その主要なる研究について叙述することは、主要なる佛蘭西社會學の現狀を明にするに缺くべからざる事である。

而して今之をデュルケムの社會學部門に配して述べることにした。

(61) Durkheim, De la division du travail social, Étude sur l'organisation des sociétés supérieures, Paris 1893; 2^e éd. avec une préface: Quelques remarques sur les groupements professionnels, 1902; 5^e éd. 1923.

(62) G. Richard (r Téninies の社會型の區別を Communauté, Société の區別とし、社會學に於ける最重要なる範疇として居る。Richard, La sociologie générale et les lois sociologiques, Paris 1912. 高田保馬, 社會と國家, 第三章, 第二節。

(63) Durkheim, Suicide, Étude de sociologie, Paris 1897; 2. éd. 1911.

(64) Durkheim, Les formes élémentaires de la vie religieuse: Le système totémique en Australie, Paris 1912, 2. éd. revue, 1925. 英譯 The elementary forms of the religious life, trans. by J. W. Swain, London Allen. 略説して紹介せるものに M. Halbwachs, Les origines du sentiment religieux, Paris 1925 がある。

五

デュルケムは社會形態學の研究を以て、社會の地盤をなす物質的形態すなはち土地 廣狹 地形 人口の配置等に注目すべしとし、氏の分業論自殺論の研究等に於ては特に社會の量質の組立より社

會的事實の説明に徹底したのであるが、此見解より氏は又未開人の分類の範疇がその住む所の社會構成の形態を直接反映することを説いて、社會形態學的に認識の説明を試みた(65)。

この研究は氏と高弟にしてその甥に當るモース Marcel Mauss (1872—)との協力に成るが、モースも亦別に、エスキモー社會が冬季には密集生活を送り、之に反して夏季には散在生活を營み、此の社會生活の交替よりして、道德宗教法律が變化することを頗る實證的に論究したのである(66)。然るにかゝる觀點を一般化し、而も此點に於て社會學の獨特の領域を設定せんと試みたる者はブーグレ J. O. Bourgié (1870—)である。氏は「平等思想」の攻究(67)に於て平等思想は社會の容量の増加 密度の増進 社會的移動性の増大に正比例して行はれ、成員間の大なる等質性が深き異質性を伴ひて存在する時も亦平等思想が旺盛となる。而して又諸社會の交錯とその統一は平等思想に有利なるものなることを西洋社會の實例について立證した。かくて此研究は社會形態より社會事實を説明せるものであるが、ブーグレは此種の研究こそ嚴密なる意味に於て社會學であると稱し、社會學は諸社會の形態、その原因と結果の學であるとした(68)。

此ブーグレの意圖は更に「社會學とは何ぞや」(69)の短篇に論ぜられて居る。而して氏のカスト制度の研究(70)は此意圖を貫いてカストの根原を尋ね、カストの世襲と孤立とを氏族制度より説きカ

ストの重疊シユメルボジヨンを人種と宗教より解した。カストの實體を闡明すると共に、その効果を人種 法律 消費 生産 文藝等に関して問題としたのである。要するにブーグレは社會形態を題材とし社會形態の原因、結果を社會學の問題とする點に於て、デュルケムの社會形態學の一部を採り更にジムメルの形式社會學的企圖に出でたるものであるが、ジムメルが基礎的には個人間の心的相互作用の諸形式を主題とするに反して、ブーグレはかゝる要素的形式は之を措き寧ろ社會團體の形式的方面を問題化せるものであるといふことが出来る。

デュルケムに於て、宗教は一大人間事實であつて、宗教無しに人は現在在るが如き人たり得ぬのである。又宗教は總ての文化の源泉でもある。唯宗教は社會故に生れ根本に於て社會的特質を備ふると思惟した。併し乍ら氏の宗教觀に對しては、別に指摘するやうに、それが實際は歸納的研究に非ずして演繹的形而上學的なること、トーマシズムは氏の考ふるが如くに宗教の基礎的形態たらざること、及び其進化的見方と集團的解釋に關して非難が加へられつゝある。たゞ氏が宗教の眞に科學的攻究を企圖し宗教の社會性を力説したることは、遂にその忘るべからざる功績であらう。前記モースはコーベル H. Hubert (1872—1927)と共に、主として宗教社會學の攻究に當り、犠牲の本質と機能、魔術の力の淵源、魔術と宗教とに於ける時間表象等の實證的諸研究を發表した(71)。英國人

チャタートンヒル Georges Chatterton-Hill の如きはデュルケムの宗教本質觀を其儘に採用しつゝ之を英米獨等各國の學界に紹介せるのである(72)。

最近に於けるデュルケム派の宗教社會學的研究としてチャルノヴスキー Stephan Czarnowski (69) の「英雄崇拜と其社會的條件」(71)の著述がある。氏はユール、モース兩氏の教授する高等研究院の出身であり、此著はかの愛蘭の宗教的傳説に於て民族的英雄たる聖パトリックに關する社會學的研究である。英雄なるものが如何に集團的同意によりて支持さるゝものなるかに就て、之を愛蘭の特殊なる英雄聖パトリックの一例を採りて、傳説や神話の一人格と社會團體との關係を實證的に考察せるものであるが、チャルノヴスキーは結局英雄を一つの集合表象として見、之を社會的に説明せるのである。なほユールの此著に掲げた序文は、チャルノヴスキーの著述の意義を明にすると共に、一面に於て神話研究上忘るべからざる好論文であると推賞されて居る。

デュルケム派の道德社會學の一般的規模は、デュルケムの同僚にして其共鳴者たるレギエーブル Lucien Lévy-Bruhl(1857—)の「道德學及び習俗の科學」(76)に知ることが出来る。此レギエーブルの著述は、デュルケム自身が道德的研究に關して指摘せる點を敷衍して組織的に論述せるものと見做し得るが故である。レギエーブルによれば、社會學はその主題の一つとして習俗

道德の哲學的價值又はその實際的効用を姑く度外視し、道德的規定と道德的觀念の沿革、及び之に附帶する事實の科學的説明を試むべきものである。換言すれば社會學は道德現象について、その發生と發展とを取扱ふべきものであるとする。道德的觀念や道德的規定は社會の集合表象として社會的實在であり、個人は之を任意に變形し生成し得るものではない。習俗道德は常に一定の社會組織に關聯せるものであり、此特定社會に關聯するに非ざれば何等の意義を持たざるものである。道德律は決して理想的觀念が之を作爲せるものではないのであるから、一社會に與へられた道德習俗は理想に照して之を見るならば、良くもあり又悪くもある。「人は要求者に彼等が既に所有する以外の道德を與ふるを得ぬ。人敢て此以外の道德を提出するならば彼等は之を受入れぬであらう。活社會は自由に道德を採用するのでは無い。社會の道德は此社會を組成する連帶的諸現象の一全體を完成する部分たるのである」(76)。従つて哲學者が道德を作爲せんと妄想するは誤である。

かくしてレギエーブルの道德社會學は傳統的道德論に對して痛烈に反對し、古き道德論は科學的に成立せずと斷定する。道德の研究は道德現象を比較歴史的に即ち社會學的に取扱ふ外にあり得ない。道德的規定を固有 *ans Genetis* の事實として分類し分析し、其母體たる社會形態や歴史的条件より説明することが、科學的道德研究たるのである。道德現象を科學的に攻究することから、

道徳社會學には次の如き特殊な態度が附帯する。それは既成道徳を辯護し之を當爲的事物として吾人の行爲に實踐せんとせぬことである。道徳社會學の基礎的理論によれば、道徳の一々の形態には、何等本質的必然性は存在せぬのであつて、彼等は單に社會的條件に依存して變化するものであり、環境の複雑なる事情に左右されて常に理論的統一性や徹底性を缺くのである。

此點より云へば、道徳社會學は道徳からその理想的性質を剝奪するかに見えるのである。それにも拘はらず、道徳は集合表象として個人から獨立し、個人的觀念とは異り反つて之を拘束するものである。人は道徳的規定によつて支配され、誘導せらるゝ機微なる社會的機制の裡に生活するのである。夫故にデュルクム及びレギープリュールの道徳論は表面上在來の理想主義の道徳論に反對するが如くで、實際上は反つてカント流の絶對命令としての道徳の見方に新しき説明を附與するものとも認められる。道徳的規定はそれが規定なるが故に服従されるといふことに於ては、カントとデュルクム派の一致する所であると見做される(分)。

デュルクムとレギープリュールとの間に道徳研究上に重要な相異點がある。それはデュルクムが正常的道徳を決定し、これを道徳的行爲の標準とせんとするに反し、レギープリュールは根本に於てカント的存在と當爲となつことである。然しレギープリュールは道徳現象の事實的法則を明にすることによつて

吾人は道徳改造に直進しうる。何となれば、究局的當爲は價值哲學の問題であらうとも、實踐上の當爲の標準は容易に各人が認知しうる所のものであるから、と考へ、矢張り道徳社會學の實踐的效果を重視して居る(78)。

ペイエ Albert Bayet (79) は右のレギープリュールの立場を守り、道徳事實の科學をエトロチー Ethologie と名づける(80)。デュルクム自身既に着手せる責任の研究を完成せる者にデュルクムの後任としてソルボンヌに社會學を講ずるフォーコンネ Paul Fauconnet がある(81)。責任と云へば罪ある者に對する呵責と聞ゆるも、フォーコンネは決して然らずといふ。罰すること Punition は根本に於て犯人によつて危殆ならしめられた團體的統一を恢復することに外ならない。未開人の觀念によれば處罰はマナの懲罰である。社會は脅威せられた場合脅威の原因たる個人に對して憤怒し之に恐怖を與ふるのであつて、かくて責任者は決定さるゝのである。社會は違反者を呵責し、呵責する爲めに罪名を附與するのである。社會はいはゞ必要に應じて責任者 犯人を製造する。それは從來社會に存在した所の結合を恢復する目的に出づるのであつて、其手段を擇ばない。かくの如く見來れば犯罪の原因は社會に存し、社會の必要より犯罪は決定さるゝことが明かとなるのである。又此見地からすれば犯罪の證據をあぐるが如きは、寧ろ第二義的のことであつて、犯罪の本質は

社會連帯の確立の要望を満足するにあり、責任者 犯人は其手段として現はれるのであると。

法律社會學はデュルケム派に於て道德社會學 宗教社會學と密接に關係し、又その一部は犯罪社會學の分枝を形成する。デュルケム自身「分業論」に於て、犯罪を定義して社會の集合的（共通的）感情が傷けることによつて犯罪成るとし、刑罰は此集合感情が此犯行者に對して確定的且深刻に反作用することに在るとし、畢竟それは社會連帯維持の手段たることを論じてゐる。そしてかゝる見方に於ける犯罪の研究は、更に氏の高弟フォークンネによつて上述の「責任論」の形で論究されて居るのである。

デイジョン大學教授タギー George Davy の「誓信論」⁽⁸²⁾は矢張りデュルケム派の法律研究の一例である。氏は既にオリリウ、デュギー氏等の法律的主權論を詳細に批判し、デュルケムの精神を繼承して國家論は法律的或は道德的人格論と關聯することをいひ、個人は人格を獨占せず集團も亦人格を所有し得ることを「法律、理想主義と經驗」⁽⁸³⁾の著述に力説するのであるが、氏の見解によれば集合表象は理想であり同時に現實的なるものである。此事が契約についても亦云ひ得られる。契約は先づ客觀的狀態に於て存在するものであるから、氏族對氏族の強制的給與にその淵源を求むべきである。外婚の如きは實に此種の強制的給與の特殊の例である。契約の如き法律關係は始め宗

教的事物と混同さるゝのであるが、これが交換の最高制度として現はるゝは、未開社會に於けるポトラッチ（饗宴 宗教的儀式 財産分配の結合せる制度）を通して營まるゝのであると。

デュルケム派の經濟社會學の企圖は一度モーニエ René Maunier によつて論述されたのであるが⁽⁸⁴⁾シミアン Francois Simiand（國民技藝學校教授）によつて、最も明瞭に代表される。氏は「經濟學に於ける實證的方法」⁽⁸⁵⁾の著述に於て、經濟學の研究に對してデュルケムの社會學が齎し得る所の改革について論ずるのであるが、曰く在來の經濟學研究に於ては、目的論が介在すること屢々であつて、事實を事實として攻究する客觀科學的精神が缺如したのである。其結果經濟學に於ては政策論が戰はされるのであるが、經濟學は政策的たることから、實證科學たらねばならぬのである。すなはち經濟學は眞の科學として、原因と法則とを探索せねばならぬのである。特に個人心理的事實より出發することを止めて、社會現象たることに留意して經濟現象を攻究することが必要なることである。

「欲望遞減の法則」の如き、若し個人を其社會的環境に關係せしめて考ふる時は全く意味なき法則である。此法則は假に有効なるものとしても直接手近なる消費關係に置かれた事物に對してのみ妥當し、集團の見地よりは少しも妥當ならず、又殆んど意味なきものである。事物が人に對して恒久

的價値を有して存在する時より、特に事物が他の事物と交換さるゝ時より、總ての事物は直接的消費の充足價値量以上の價値量を個人に對して有するのである。蓋し此事物は個人に對して無限の他の種類の満足を値打するからである。

凡そ個人的評價は既往に實現され且承認されし價格より引出される。此證據は新規の事物の場合に於て、或は交換者に確定價格が認知されぬ場合、交換者の評價が全然決定されず任意的であり量的に確定した概念として存在し得ぬことである。多くの經濟學理論の誤謬は社會的性質の現象を個人的現象より説明せんと欲するにあり、個人的現象はむしろ社會現象夫れ自體より抽出され、社會現象に依るに非ずんば存在し能はぬのであると。シミアンは、價値の概念は假令心理的なるものにせよそれは本質的に量的概念なることを主張する。然るにもと個人心理の現象は質的なるものである。之に反して量的に計量することは社會現象の特性であり、此社會的特性が轉じて個人的現象に量的計量の觀念を與ふると見なければならぬ。經濟的價値はかくて社會的淵源を有するのであるとする。

デュルケム派の經濟研究は結局經濟現象の社會的説明といふことに歸着する。經濟社會學は經濟現象をその社會的關聯に於て見るのであるが、此事より社會形態 道德 法律 宗教等を經濟と關

係せしめて考察する仕方も生れる。デュルケム派の未開社會の研究には、此種の考察が多分に包含されるのである。而してかゝる立場に基づき經濟社會學は在來の統計的研究を非難しつゝある。例へばアルブワックス Maurice Halbwachs (58) はケトレイの平均人の理論について、ケトレイが統計數字にあらはれし經濟的決定性を自然律或は個人的類似に歸して説明したことを批難し、ケトレイはなほタルド等と同じく此決定性の社會的原因を遺忘したと考へる (59)。之と同様に、社會的意見すなはち集會的價値判斷が生活標準なども決定する。アルブワックスは、生活標準なるものが少しも賃金によつて決定を受けぬことを「勞働階級と生活標準」(60)の研究に於て明かにし、モースは社會學年報新卷第一卷に於て、交換の最も原始的形態たる贈與に關する新研究を發表した (61)。而してジード、リスト等の經濟學者達は、今日此等のデュルケム派の研究を大に尊重しつゝあるのである。

言語社會學。メイエ A. Meillet (62) は社會學年報誌上に於て (63) 言語が變化する條件が社會的環境であり、言語の目的は社會的關係を可能ならしむるにあり、言語が維持し保存さるゝは偏に社會的關係による、又言語の限界が社會的集團の限界と一致する以上、言語的事實が依存する諸原因が社會的なることは明瞭である。従つて社會事實の考察のみが在來の不備なる言語研究を建直し得る

ものとなることを説いた。メイエはこの主張を支持するに足る幾多の實例を引用し、次の如き結論を下して居る。曰く、言語の意味の變化に關する根本的原因は言語の行はるゝ環境裡に於ける社會的諸集團の存在による。換言すれば社會的構造の裡にあるのである。此原理は言語に關する實驗的事實の大部分を説明するに充分なる殆んど唯一の原理なのである。此メイエの考察はデュルケムの言語社會學の一般的立場を表示するものと見做すを得るであらう。

言語社會學の外藝術社會學に於て、デュルケム派は比較的今日手薄なることを否み得ぬやうである。之に反して同派はデュルケム存生の當時より教育社會學 家族社會學 政治社會學等に手を染め、又デュルケムの宗教研究に示唆を受けつゝ、認識社會學を問題とするのであるから、今此等の方面をも併せて問題とし又最後に綜合社會學的研究を窺ふことゝしたいと思ふ。

教育を社會事實として實證的に研究することは、社會學と教育學の講座を擔任せるデュルケムが既に着手せる所である。氏の之に關する著述は生前には公にされなかつたのであるが、其歿後「教育と社會學」(2)と「道德教育」(3)の遺著の公刊によつてその研究を知り得るのである。デュルケムは教育の研究についても、恰も宗教道德の場合に於ける如くに、舊來の教育學(4)に對して新に「教育の科學」Science de l'éducationを主張するのである。すなはち教育も亦一つの社會事實である

とし、教育現象の客觀的研究を社會學の特殊部門として擧げるのである。此立場より教育を見れば、「教育とは未だ社會生活に馴れざる世代に對して、成熟せる世代が行ふ作用である。教育の目的は子供の裡に、子供自身と、全體としての政治的社會と、子供の置かれてある特殊的环境とが要求する所の肉體的、知的、及び道德的諸狀態を發現させ發達させるにある」。而して「此定義よりして教育は若き世代を秩序的に社會化することである」(5)。

教育の科學即ち教育社會學が問題とする所の二種類の問題がある。その一つは教育組織の發成に關するものであり、他の一つは教育組織の運用に關するものである。此等一切の研究に於て問題となるのは現在若くは過去の諸事物を記述すること、此等の事物の諸原因を探求すること、又此等の事物の結果を決定すること等である。デュルケムはかくの如き一般的理論を道德教育の問題に適用するのであるが、この研究に於ては道德性の諸要素(訓練の精神、社會的集團への歸屬、意志の自律性等)を分析し、次に此等の道德的諸要素を如何にして子供の本性に受入れしむるかを説くのみであつて、未だ道德教育に關する全般的研究が完成せられしものでは無く、それは一種の未定稿として提出されしに止るのである。

家族社會學はデュルケム派に於て政治社會學と關聯して問題とされるやうに見える。デュルケム

は現に家族の最古形態が最も分化せざる政治的集團たる氏族と一致することを明にした。政治的社會は家族的社會の繼續的發展たるのである。然るに家族社會學がデュルケム⁽⁹⁶⁾以後此派の人々によつて閉却されたるに比較して、政治社會學は主としてタギーによつて開拓されつゝある⁽⁹⁷⁾。氏は「指導的勢力、主權が表現さるゝ人間集團の研究」を政治社會學の任務と見做し「政治社會學は本質上民族と國家、及び此等のものと個人との關係を取扱ふのである。政治社會學は此團體或は其代表者が個人に對して彼等の主權を行使する仕方、及び反對に個人が個人を圍繞する各種集團に對抗して其固有なる自由を主張する仕方、權利を取扱ふのである」⁽⁹⁸⁾。結局タギーは國家の研究に於てその物質的側面 精神的側面をこめて問題とせんとする。且氏によれば、政治社會學は國家の研究のみならず、國民性 愛國心 統治形態 民族間の關係 政治的權力と經濟との關係等の各種の問題が含まれ得るのである。タギーは今日その一般的問題に觸れたのみであるが、此等の諸問題はブーグレ⁽⁹⁹⁾「カスト制の研究」、「平等觀念」の研究、「科學の面前に於けるデモクラシー」⁽⁹⁸⁾及びタギー、モレー⁽⁹⁹⁾等によつて少しづつ問題とされ來つて居る。

認識社會學の部門はデュルケム自身によりて指示されて居るのであるが、これは幾多の重大なる關聯事項を有することゝて、學界の係争問題の最大なるものである。デュルケムはモースと協力し

て夙に未開人の分類概念が社會的に決定さるゝことを説いた⁽¹⁰⁰⁾。次でユーベルの如きも時間觀念が同じく社會的條件によつて決定さるゝことを明にした⁽¹⁰¹⁾。デュルケムは更に此見方を展開して、その宗教研究の内に次の如くに説く。曰く、「日 週 月 年等の區分は儀式 祭祀 公の儀禮等の定期性に應ずるものである。曆は集團的活動の規律を保障する機能を有するのみならず、その律動を表示するのである」⁽¹⁰²⁾。時間 空間等の概念に止らず、種類 力 人格 能率等の諸概念も皆社會的事物たるのである。「思惟の範疇は宗教の裡に宗教から生れる」⁽¹⁰³⁾。デュルケムは言葉を續けて、「而して彼等が宗教的淵源のものなる以上、彼等は總ての宗教的事實の共通性を分有しなければならぬ。すなはち彼等も亦社會的事物たるべきである。集團的思惟の産物たるべきである」⁽¹⁰⁴⁾、といふ。彼によれば社會は人間精神の内容を充實するのみならず、人間精神運用の範疇をも決定するものである。

レギューブリユールの未開人精神の研究は、此デュルケムの見解を愈々實證的に基礎附くるに足りる。氏の研究によれば⁽¹⁰⁵⁾未開人の有する論理は現在吾人が有する所の論理とは全く別種の論理であり、適當に論理と稱するを得ず、此精神作用は論理前の精神作用、*la mentalité prélogique* と名づくべきであるといふ。其特色は總ての事象が相互に混同され、交錯されるにある。未開人には物質

と生物との區別が無い。凡ゆる存在物は一面に於て動物と見られ又神とも見做される。事物は相互に關係し感應するものと考へられる。かくしてレギープリュールによつて未開人の精神作用について感應説 *Théorie de participation* なるものが立てられるのである。

未開人の精神作用の形式即ち論理活動は極端に吾人文明人の論理的思惟 科學的思惟に反對するものであるが、レギープリュールは同時にかゝる未開人の論理前の精神作用をば未開時代の社會形態に因由するものと見做す。個人の精神作用、その論理が社會的決定を受くることをいひて、認識の社會學的研究を確立するのである。氏は又未開人精神に於ける因果律の見解⁽¹⁰⁶⁾及び彼等の精神の形式的方面のみならず、進んで思惟の内容特に人格 精靈等の觀念に關する社會學的研究⁽¹⁰⁷⁾を取纏めて居る。認識内容が社會的條件によつて決定されることについて、別にアルプワックスは記憶についての研究を公にした⁽¹⁰⁸⁾。

デュルケム派の宗教社會學が英米學界に反響を與へつゝあると比較して、此派の認識社會學の企圖が獨逸學界の注意を惹けることは興味ある對照である。すなはち塊太利の哲學者イエルザレム Wilhelm Jerusalem (1854—1928) はデュルケム派の論理觀に多大の暗示を受け、一般に吾人の認識を人種學的生物學的に説明せんとする氏の素志が認識の社會學的説明によつて完成し得る可能性

のあることを其「哲學入門」第五・六版に於て主張し、認識の社會學 *die Soziologie des Erkennens* を社會學の一部門として承認して居る⁽¹⁰⁹⁾。かゝる認識の社會的關係の問題は、イエルザレム以後獨逸に於てはマックス・シェラー Max Scheler (1875—) によつて形而上學を交へて廣汎に取扱はれつつある⁽¹¹⁰⁾。但しそれは既に客觀的科學の問題としての以上の哲學的心理學的意味に於ける文化の社會學的考察の一部としてであつて、「知の社會學」*Soziologie des Wissens* の名稱が之に與へられたのである。

最後にデュルケム派の綜合社會學であるが、一般にデュルケムは分科的諸研究を重んじ、此等の分析的研究が略々完成せられたる後に始めて綜合社會學ありとし、此綜合社會學の部門をば當面の問題と考へなかつた。従つてデュルケムは綜合社會學を否定する時まで誤解さるゝのであるが、氏は如何なる場合にもその將來の成立を否定するものではない。實に氏自身の研究に於ても、社會實在説、社會拘束の理論等は學的前提として最初の定義であるよりも、寧ろ次第に綜合社會學的學理にまで發展せられたことを認め得る。デュルケム派に於いてかゝる綜合社會學に特に興味を有するはブーグレであるが、ブーグレは必ずしも社會學的分科的研究の準備を俟たずして綜合社會學的研究の可能なることを信じつゝあるやうである⁽¹¹¹⁾。此點に於てブーグレは、デュルケムの分析研究

から離れて多くの綜合社會學者と一致し得る立場にある。ブーグレがデュルケムとタルドとを調和せんとする者であると評せられるのは(註)、主として氏がデュルケムの説きし集合表象の絶對性を懷疑し個人心理的要素をも顧慮することに由ることではあるが、一面に於ては氏の此特殊的立場にもよるものでなければならぬ。

ブーグレは恐らくはかゝる綜合社會學の意圖を包蔵して一度社會學を既述の如く社會形態、その原因結果の學として見たのであらう。併し乍ら氏の眞の綜合社會學的業績は「社會學的價値の進化に關する社會學講義」であらう。ブーグレの此著述は社會的諸文化の進化的相關の研究である。氏によれば經濟 宗教 道德 科學 藝術等の諸文化價値は皆社會意識即ち集合表象によつて運載されるものであつて、此事より社會的價値なるものは個人的價値や局限的價値に非ざる客觀性と優越性を取得する。然し幾多の社會的價値は歴史的に分化し、且本來の目的を轉換する。かゝる社會的價値の變化の迹を跡づけるのは綜合社會學の重大なる任務であるとする。そして氏は此等社會的諸文化の關係を歴史的過程に於て問題とせるのである。この社會價値論は結局デュルケムに於ける集合表象としての重要な文化財の相互的關係の取扱であるが、氏が集合表象と個人的表象との間にデュルケムの指摘せるが如き對立關係を認めざること、殊に社會の進歩すると共に個人的作用が有

力なる社會的動因となる事實を力説し民本主義を是認せんとする努力が顯はに看取されること等の點に於て、デュルケム派に於て異色ある研究たるを免れないのである。

デュルケム學派の研究を、全體に亘りて紹介せるものに、デブ「社會學」M. Déat Sociologie, Paris 1925 がある。前掲パロナの「佛蘭西現代哲學」第五章「エミール・デュルケムと社會學派」及びその第三版附録「一九一八年より一九二五年に至る佛蘭西哲學」の一部も亦それである。近時公にせられる佛蘭西師範學校教科書用の社會學概論は、多くはデュルケム派の特殊研究を中心として論述されて居る。A. Hesse et A. Gleyze, Notions de sociologie appliquée à l'éducation, préface de P. Fauconnet, Paris 1922; C. Bouglé et J. Raffault, Éléments de sociologie, textes choisis et ordonnés, Paris 1926 等は其例である。デュルケム派の文獻を中心として、佛蘭西社會學の文獻を表示するものは Bouglé et Déat, Le guide d'étudiant en sociologie, 2, éd, Paris 1925 である。

- (65) Durkheim et Mauss, De quelques formes de classifications, Contribution à l'étude des représentations collectives, Année Sociologique t. VI.
- (66) Mauss, Essai sur les variations saisonnières des sociétés, eskimos, Essai de morphologie sociale, Année Sociologique, t. IX.
- (67) Bouglé, Les idées égalitaires. Étude sociologique, Paris 1899.

- (68) *ibid.* Introduction.
- (69) 著書 *Qu'est-ce que la sociologie?* Paris 1907 に収録されて居る。
- (70) *Essais sur le régime des castes*, Paris 1908.
- (71) Hubert et Mauss, *Mélanges d'histoire des religions*. Paris 1909.
- (72) *The sociological value of christianity*, London 1912; *Individuum und Staat*, Tübingen, 1913, Kap. IV.
- (73) Czarnowski (波蘭人)にしてブルジョワ - Conservatoire の教授である。
- (74) *Le culte des héros et ses conditions sociales*. Paris 1919.
- (75) Lévy-Bruhl, *La morale et la science des moeurs*, Paris 1903, 3.éd. Augmentée d'une préface, 1907.
- (76) *ibid.*, 7.éd. revue, p. 271.
- (77) Parodi, *La philosophie contemporaine*, 2 éd. p. 134. マルクス自身も亦 *Détermination du fait moral* (Sociologie et philosophie, Cahp II) の論文中に於て之を承認しつつある。
- (78) ヌレギエリユール(上記著述に於て「習俗の科学」すなはち道德社會學の一般的意圖を述べただけであつて、具體的研究に入つて居ない)。此點に於てはマルクスの自殺論及び近親婚禁制の研究 (*La prohibition de linceste et ses origines*, *Année Soc. t. I*) 等が道德社會學の代表的研究である。
- (79) 現に高等研究院の教授である。

- (80) Bayet, *La science des faits moraux*, Paris 1925; *La morale scientifique*, *Essai sur les applications morales des sciences sociologiques*, Paris 1905.
- (81) Fauconnet, *La responsabilité*, *Étude de sociologie*, Paris 1920.
- (82) Davy, *La foi jurée*, *Étude sociologique du problème du contrat*, *La formation du lien contractuel*, Paris 1922.
- (83) Davy *Le droit, l'idéalisme et l'expérience*, Paris 1922.
- (84) Maunier, *L'économie politique et la sociologie*, Paris 1910. これに基づき *L'origine et la fonction économique des villes*, *Étude de morphologie sociale* 1910 の著述がある。Maunier (Algier 大學教授である)。
- (85) Simiand, *La méthode positive en science économique*, Paris 1912.
- (86) Halbwachs (現にストラスブール大學教授である)。
- (87) Halbwachs, *La théorie de l'homme moyen*, *Essai sur Quetelet et la statistique morale*, Paris 1913.
- (88) Halbwachs *La classe ouvrière et les niveaux de vie* *Recherches sur la hiérarchie des besoins dans les sociétés industrielles contemporaines*, Paris 1913.
- (89) Mauss, *Essai sur le don*, forme archaïque de l'échange, *L'Année Soc. nouvelle série*. t. I.
- (90) Meillet (佛蘭西學院教授である)。

- (91) Meillet, Comment les mots changent de sens, *Année Sociologique*, t. IX.
- (92) Durkheim, Education et sociologie, Paris 1922.
- (93) Durkheim, L'éducation morale, Paris 1925.
- (94) Durkheim, Education et sociologie, p. 49.
- (95) Durkheim の^ニ民族^ニ關する研究として Sur le totémisme (*Année Sociol.* t. V); L'organisation matrimoniale australienne, *Année Soc. t. VIII* 等が問題となる。
- (96) Davy, Éléments de sociologie, I. sociologie politique, Paris 1924.
- (97) *ibid.* p. 13.
- (98) C. Bouglé, La démocratie devant la science, Études critiques sur l'hérédité, la concurrence et la différentiation, Paris 1904; 3. éd. aug. d'une préface, 1923.
- (99) Davy et A. Moret, Des clans aux empires, Paris 1923.
- (100) Durkheim et Mauss, De quelques formes primitives de classification, Contribution à l'étude des représentations collectives, *Année Soc. t. V* (1903).
- (101) H. Hubert, Études sommaire de la représentation du temps; dans la religion et dans la magie. Paris 1905. 此論述は Hubert et Mauss, *Mélanges d'histoire des religions* に收録されてある。
- (102) Les formes élémentaires de la vie religieuse 2. édit. 1925, p. 15.

- (103) *ibid.* p. 13.
- (104) *ibid.* pp 13—14.
- (105) Lévy-Bruhl, Les fonctions mentales dans les sociétés inférieures, Paris 1910.
- (106) Lévy-Bruhl, La mentalité primitive, Paris 1922.
- (107) Lévy-Bruhl, L'âme primitive, Paris 1927.
- (108) Halbwachs, Les cadres sociaux de la mémoire, Paris 1925.
- (109) Jerusalem, Einleitung in die Philosophie, 5. u. 6. Aufl. Wien 1913. オエルザレムは更に此考を Einführung in die Soziologie, Wien 1926 に繰返す。たは氏はレヴィブローユの認識社会学の最初の著述を Das Denken der Naturvölker として之を獨譯して居る (Wien 1921)。
- (110) Scheler, Die Wissensformen und die Gesellschaft, Berlin 1926.
- (111) C. Bouglé, Leçon de sociologie sur l'évolution des valeurs, Paris 1922, Préface.
- (112) D. Parodi, La philosophie contemporaine pp. 146—7.

六

佛蘭西に於ける社会学的發展の経過を辿ひ來る時、佛蘭西社会学に於てコント以外斷然頭角を顯
 傾向——現代の佛蘭西社会学

はずものはタルド及デュルケムなることを明に意識しなければならぬ。特に後者に至りては現在唯一の社會學派なりと自任する程しかく有力なる學派的勢力を培養せるのであつた。中央社會學講壇は殆んどデュルケム派の占有に委せられ、此派以外の者の學界に於ける地位は比較的に重きをなさぬ、併し乍ら有力なるデュルケム派の社會學に對しても若干の批難の聲を聞くのである。その批難は一方に於いて此派の研究に慍らざる社會學者によつて發せられるものであるが、他の一方に於て社會學者以外の方面、例へば宗教界或は道學者方面から、此派の研究に對して下さるゝものである(113)。キルヘルム・シミットを首領と仰ぐ舊教派の宗教學者は宗教社會學の研究を極力排撃する。シミット等の反對は濠洲トーテミズムが宗教の基礎形態に非ずといふこと、デュルケムの態度が實證的たるを標榜するにも拘はらず依然演繹的且形而上學的なりといふ點である。又デュルケムが宗教的事實についてその個人的要素を閉却せることを非難する者が少くない。哲學者ブートルの如きはデュルケムの宗教社會學が單に宗教を外面的に取扱へるに過ぎず、信仰の精神的內容に就て何等觸るゝものでないこと、又宗教社會學的研究が徒に未開社會の宗教的事實のみに拘泥して、文明的社會現象としての宗教の本質を毫も捉へてないことを難じて居る(114)。

デュルケム派の道德社會學に對して加特力教の側より之を批難し、道德の科學と道德、規範哲學

との限界と協和を論じたるものはドプロアチである(115)。氏はデュルケム、レゾーブリユールが道德社會學を以て在來の道德學に代り得るものであるとなす見解に根本的異議を唱へ、所謂在來の道德學は眞の道德學に非ず、トマス・アキナスの道德論は一面に於て道德の客觀的條件を考慮に加ふる點に於て、其研究が畢竟道德哲學を豊富にする役目を果たすことを認めたのである。習俗の科學と道德哲學とは夫々異なる研究である。此兩者が協力の必要こそあれ一方が他方を排斥する何等の理由なしと考へる。ドプロアチが舊教の側よりデュルケム派の道德社會學、特にデュルケムの社會的規範を常態的事實に求むる企てに反對するに對して、新教の側より之を非難するものにアーベルがある(116)。アーベル曰く、個人はデュルケムの云ふが如くに無力なるものでは無い。個人は近代に至つてむしろ積極的に社會を改造しつゝあるのである。道德はデュルケム派の考ふるが如くに有用物に非ずして、むしろ好ましき理想、義務的理想である。道德は時代によつて異なる形態にて現はるゝのではあるが、それは常に一定の方向を指せるものである。道德生活は我が佛蘭西の傳統となつて居る。社會學的道德論は英國流の自然主義道德論に比較すれば格段の進歩であるが未だ實證主義の舊套を脱し得ぬ點に缺陷を藏するものであると。

デュルケム及び其學派の諸研究に對する、社會學以外の方面からの部分的非難は姑く措いて、次にデュルケム派社會學其者に對する他の佛蘭西社會學者の不滿と、此等の學者の業績について記述したのである。然るに此事を記述することは、直ちにデュルケム派以外の現在の佛蘭西社會學を叙述することに齊しいのである。

デュルケム社會學の基礎はコントの科學的實證主義の精神で社會現象を攻究するにある。その研究方法は客觀的であり、而も社會現象に極度の分析を施すこと無く之を社會的原因によつて説明するにある。然るに科學的實證主義の態度はデカルト以來の佛蘭西科學の精神であるから、此根本的態度に關して如何なる社會學者もデュルケムを非難し得ないのである。否、デュルケムが此科學精神を果敢に代表せることは反對派と雖も氏に對して尊敬を拂ふ點であつて、反對派はデュルケム及びその學派が歸納的に歴史の統計的方法によることを非難しない。たゞ社會現象説明原理として社會的條件或は原因を過重視する餘り、而して之が爲めに社會を極端に神秘化し神聖視するを以て反つて實證主義的精神に背くものと認め、かゝる謬見を訂正する爲めに具體的實在たる個人と其心理を顧慮し社會學的説明の發足點をこゝに求めんとするのである。

思ふにデュルケム社會學の重要な學的貢獻は科學的實證主義の精神を大に發揚せること、社

會現象の説明に於ける社會的因子を顯現せることであらう。たゞ後者の立場に於てデュルケム及び其一派は社會實在觀レゾナル、シヤルを採るのであるが、社會實在觀は具體的實在たる個人の心理より之を基礎附くることによつて始めて確實なる出發點となり、同時にその限界をも明にするもので無ければならぬ。デュルケムが之を怠れりといふのでは無いが、只その基礎附けがなほ不備なりしこと、従つて社會實在觀の適當なる限度以上の適用が試みられしことを否み得ないのである。之が故に反對派によつて「社會を説明するに社會を以てする」といふデュルケムの公理が眞先に問題とされ、その缺陷を補ふ意味に於て、心理學的説明が復活さるゝことゝなつた。それは或意味に於てタルドへの復歸の傾向であるが、併し乍ら決して單純なる復歸ではあり得ない。タルドの心理學主義を以てデュルケムの社會學主義を補足する意味の企圖である。又タルドはデュルケムと共に、社會學研究に於ける客觀主義を極説せるのであるが、新しき心理尊重は反つて客觀主義に背き、個人的主觀の諸要素を採り入れんとするものである。

デュルケム派の社會學に反對する有力なる一派が、反つて此派の内より現はれたことは、この關係をよく明かならしむるものであらう。曾てはデュルケム派に所屬し、今はそれを棄てたる人々として、リシアルを筆頭に、パロチ、デュプラ、モーニエ氏等を數へることが出来る。リシアル Gaston

Richard(1861—)は嘗てデュルケム派中最も有力なる學者であり、デュルケムの後を承けてポルドー大學に社會學を擔任せる人である。リシアルは前後十ヶ年間社會學年報にデュルケムと協力し、結局社會學は社會形態の比較發成的研究なることを信じたのであるが(11)、遂にデュルケム社會學の科學的出發點がその形而上學的歸結と矛盾するを指摘して(12)決然舊友デュルケムと袂を分つたのである。

リシアルの指摘する所によれば、デュルケム社會學には異なる二種の觀念と研究とが併せ包含される。一つは嚴密なる意味に於ける科學である、即ち現象と關係の研究である。今一つは形而上學的思索であつて、これは形成の過渡期にある社會學に頼りて道德、宗教、哲學、認識論等の諸問題を解決せんと試みるものである。此等二種の企圖は嘗に異なる性質のものたるのみならず、實に矛盾せるものなのである。思ふに宗教信徒は宗教感性の表現に附帶する心理的、社會的條件を攻究することに關しては之を其儘に承認するに吝ならぬであらう。併し乍ら神なるものが究局の分析の結果、社會人の間に神聖の情緒を授くることによつて萬人の信仰に君臨する社會なることを聞くに至つて、彼等が擊斃するは無理からぬことである。宗教を集團的連帶の紐帶維持の手段であると見るは社會組織の最高形式として宗教を反つて消滅せしむるものである。

デュルケムの認識社會學にも重大なる缺陷が含まれて居る。デュルケムに於て社會は主體として他の總ての主體に對して、其思考の主要形式を採用せんことを迫るのである。社會は社會の範疇及び理性を、各個人に對して強制するのである。而も社會は氏に於ては同時に客體たる事物なのである。こゝに矛盾が存在する。殊に一個の個別科學たる社會學が科學全般の理論を取扱ふといふが如きは奇怪なることである。綜合哲學的コントの社會學は失敗の前轍である。デュルケムの企圖も亦畢竟新なる社會學的獨斷に陥る許りであらうと。

道德社會學の研究家にして、社會學年報同人たり、現になほ新しき社會學年報の同人なることを止めないパロヂ D. Parodi も或る意味に於て、デュルケム派の異分子である。すなはち氏はデュルケム社會學が一面に於て實證的科學精神を貫徹するやうに見えながら、他の一面に於てそれは社會的神秘主義の一種である。現象の社會的決定性を極端に力説する結果、他の條件要素を閑却せることは著しきその缺陷である。「社會學主義は總ての重要な人事現象は社會的原因を持つといひ、之が社會の形態其者と共に變化しそれ自身何等の價值なきが如くに説いて居る。而して此見方は宗教に關して述べらるゝのみならず實に道德や論理に就ても適用さるゝのである。此點から社會學主義なるものは理性其者に對して吾人が有せる所の信頼を動搖せしめる。……若し總ての吾人の觀念が、

その内容其者に對する外部的條件即ち有機的條件或は社會的條件に關係的なるものとすれば、實證的認識も亦齊しく此相對性に均霑するものであり、科學に此相對主義的結論を措定することによつて科學自身から總ての權威を剝奪するものである(19)と論じて居る。

かくの如くリシアル、パロチ氏等の反對が、主として社會學に對する宗教、道德及び認識論の混同に關するのであるが、デュブラ G. L. Duprat の批難は、むしろ之と反對に、デュルケム派が社會現象に於ける社會的因子を重視するの餘りに、その個人的因子を閑却することを重大なる缺陷として指摘するのである。デュブラも亦曾てはデュルケムの薰陶を受けた一人であるが、氏は其師の社會學講義を以てスピノザ的靈感乃至汎神論的神秘主義に接する思ひがあつたと告白する(20)。デュルケムに於いては社會なるものが此世の最高の實在であり、殆んど唯一の實在たるものであつた。デュルケムは終に社會を以て唯一の神であることさへ見做した。曾てコントに於て「偉大なる生物たる人類」なりし社會は、デュルケムに於て宇宙的本質の發現として祖述されたのである。

デュブラによれば、デュルケムの思想の要點は「社會」なるものは之を説明する必要無しといふにある。「社會」は基礎的事實、又基礎的必要の存在であつて、此「社會」から凡ゆる人間思想や人間道德、總ての法律、宗教及び個人的生活は湧き出づるのである。社會の個人に對する拘束の事實も亦

之を是非するの要がない。總ての義務は此社會的拘束から誘導される。社會的拘束は人間に内在する「理性」それ自身の現れである。此理性が假に社會的拘束といふ姿をとる。思ふにデュルケムは社會的事象が本質上個人的要素に還元し得ざることを確定的に論斷せる第一人者であつた。唯問題は氏が自己の主張に忠なる餘り行き過たる嫌なきかの點である。卒直に云へば氏が社會以外の因子の作業を否定し、個人固有の心的活動を排斥せるは重大なる過誤であると。

デュブラが心理學に顧慮を拂へる結果はデュルケム以外、社會學的研究に於いてタルドを尊重し社會心理學的研究に興味を見出すこととなつて居る。氏は實に佛蘭西社會學が一度忘れられたるタルドを想起せんことを最も熱心に唱道する一人である(21)。結局デュブラに於ては、デュルケムの社會學主義が新しき謙遜なる社會心理學的企圖に取つて代らるべきものとする。「個人心意と社會心意との間に基礎的差別なし」と見る態度に於て、デュブラの社會心理學はデュルケムの社會學說の核を成す所の社會的拘束の事實を心理學的に基礎附くるにある。然るに社會事實を廣く心理的作用に還元して問題とすることは、佛蘭西社會學史上に於てタルドが最も之を徹底して行つたものなるが故に、デュブラの社會心理學的企圖は明かにデュルケムに對してタルドを再生せしむる努力であると認められる。

心理學より出發して、社會的拘束の事實を解明せんとする試みとして、最近に於ける獨逸社會學者フイアカントの「社會學」(124)特に其客觀的構成物 *Objektivegebilde* の研究を指摘し得る。タルドを以てデュルケムを基礎附くる企圖は現代社會學の有力なる傾向である。デュルケム派に對立する一團の現代佛蘭西社會學者は、社會心理學的傾向に於て一致すると云ひうるのであるが、デュルケム派にあつても同じく斯様な企に出づる者があるのである。それはすなはちブーグレである。

ブーグレは社會があらゆる努力を傾倒して客觀的たるに努めることは至當であるが、併し乍ら客觀的態度尊重の遁辭の下に、之なしには充分の説明を與ふるを得ぬ所の諸事實特に心理的現象を除外するは無謀であると考へる(125)。實にブーグレは社會形態の原因の探求に於て、常に個人的要素を尊重しつゝあるのである(124)。氏に於ては如何なる個人的要素が社會形態に影響するか、個人心理作用は如何なる社會的效果を現はすものなるかを顧慮し、デュルケムの集合表象が個人的表象とは異れりとの説をむしろ獨斷と解し、個人的表象との間に聯絡を辿らんと欲するものである(125)。

モーニエも亦ブーグレの如くデュルケム派に所屬しつゝ、同時に之に嫌らざる一人である。氏の見解はデュルケムの分析研究とラルムスの如き綜合的研究とを調和せんとするにあるが如くに見える(126)。氏は早くよりラルムスと協力してその「國際社會學評論」を支持し、今やラルムス亡き後此

雜誌がリシアルの主宰となれる後も、デュブラと共にリシアルを援助しつゝあるのである。

既説の如く、デュルケム派はデュルケム逝ける後モースを首領として分科的研究に銳意し、一九二五年以降氏の指導の下に「社會學年報」Revue de Sociologie 新巻を刊行し同志の論文、各國社會學的文獻の批評等を組織的に行ひ、傍ら續々と社會學年報叢書の新刊を實現しつゝある。之に反して反デュルケム派は永くデュルケムの偏頗の見方に反對し、哲學的綜合社會學を企圖すると同時に佛蘭西のみならず各國の雑多なる社會學的傾向に對して折衷調和的態度を採り社會學の國際的進歩の爲めに盡力したるルネ・ラルムス主宰の「國際社會學評論」をその主なる機關誌とする。最近ラルムスが逝いてより此傾向は一層促進され、新にリシアルが之を主宰しデュブラが極力之を支持するに至りてより、デュルケム派の社會學主義に對して此派は心理學特に社會心理學的色彩を明瞭にして對立することゝなつた。リシアル、デュブラ兩氏はデュルケム派以外佛蘭西に於て最も有力なる人々であるから、次に氏等の業績について説くことゝしたい。

リシアルは高等師範學校に於てデュルケムより僅に一年の下級生であつたが、學位を獲得せるはデュルケムよりも一年早く一八九二年であつた。既述せるが如く、氏はデュルケムの希望に基づき

一八九七年以降一九〇七年まで十ヶ年の間社會學年報を援助したのであるが、最初より決してデュルケムの社會實在觀を其儘に承認せるものではなかつた。氏の興味は道德的社會事實の研究にあり、心理學の見方を根柢として之を企つるにあつた。従つて、當時の心理學の泰斗リボアの信任を得、一時「哲學評論」の編輯に携れることもあつたのである。此當時の主要なる著述として「法律觀念の源泉」、「社會主義と社會學」、「自然と歴史に於ける進化觀念」等がある(127)。

氏の初期の社會學の見解は、之を小冊子「社會學の基礎觀念」(128)に窺ふことを得る。氏によれば社會現象に關して先づ記述的及び理論的認識の二種がある。記述的認識は文明史と民俗學及び考古學等に分れる。次に社會生活の各方面を分割して抽象的に之を攻究する所の抽象的社會諸科學がある。例へば言語學 經濟學 人口學 道德統計學等が是である。最後は比較・發成的社會學であつて、社會諸形態、その構成とその關聯の研究たるものである。かゝる意味に於ける社會學は記述的諸科學と抽象的諸科學の中間に位し、社會的集團の諸形態を比較研究して分類し之を發成的關係に於て考察しなければならぬのである。然るに社會形態なるものは、畢竟社會的關係の永續的確定の形態に外ならないものであるから、その存在の條件は常に心理學的法則の裡に之を求めなければならぬ。

リシアルの此見方に於て、社會學は比較社會學或は比較・發成的社會學の名稱を與へられる。然し此意味の社會學は、社會現象に遍在する社會形態を問題とする點に於て一種の綜合的研究と認め得られる。夫故にリシアルは後の著述(129)に於て、最早比較社會學等の文字を使用せず卒直に綜合社會學の文字を選んで居る。リシアルによれば社會哲學は綜合社會學と同一意義である(130)。社會的諸科學すなはち經濟學 政治學 法律學等の研究を基礎として、綜合的事實を問題とし得る可能性が與へられる。個々の社會科學は獨立研究の分野を分つのではあるが、其間に密接なる相互依存の關係が認められ、相互に他學の研究領域に踏み入るのである。これは總て個々の科學が分析より綜合へと進む必然の進路であり、社會現象研究に於ける綜合社會學の存在の理由を證明するものである。

リシアルはデュルケムが綜合社會學を排斥することを非難する(デュルケム自身總ての綜合社會學を否定するものではない。デュルケムはリシアルの著述を社會學年報(131)に紹介する際に、リシアルは誤解して居ると云つて居る)。綜合社會學は獨立せる一科學であり、必ずしも他學の研究に基づかずして独自の境地を有するものであるとする。リシアルの綜合社會學は「會社體」sociétéと「共同體」communautéの二つの基礎觀念を決定することを意圖する。「會社體」とは人々の交換商業を

基礎とする所の集團、從つて分業と協働に基づく所の社會團體である。「共同體」は、人々が相互に吾等と觀念し且一體的に活動する團體を指す。會社體に於て個人が主であり、共同體に於ては團體が主である。此二種の社會形態の對立を考慮する時、社會學の最も一般的なる對象は「會社體と共同體の相關 協働 精神的相互關係の現象に對する共同的現象の相關」である。二種の社會型の區別は本質的であるが、その相關は決して抽象的なるものでは無く、寧ろ現實的なるものである。吾人の歴史的經驗は、人々の間の商業的關係が常に延長と加速度の法則に従ふものなることを明かにするからであると。

之を要するにリシアルは、獨逸に於けるテンニイスの「共同體と會社體」(13)といふ純粹社會學的概念を基礎として社會現象の一般的説明を企つるにある。然し氏は終始綜合社會學に停止するのであるから、デュルケムの社會學の如くに個々の社會科學の領域を侵犯せず、此意味に於て他の社會科學と協調し得られ、又規範的科學の研究者たる法律學者 倫理學者 宗教學者等に對しても満足を與へ得るのである。唯物史觀に陥ることなくして而も適當に經濟現象の重要性を認め、又個人の生理心理的現象と社會現象との關係をも正當に顧慮することを怠らない。此等の特色はリシアルの綜合社會學が主として歸納的であり、現實的研究から遠かることを敢てせぬが故であると稱せられる。

る。

リシアルの名著としては *La question sociale et le mouvement philosophique au XIX^e siècle*, Paris 1914; *L'évolution des moeurs*, Paris 1925 等を挙げえられる。前者は第十九世紀の社會哲學史にして、後者は道德社會學の著述である。此道德社會學の著述に於て、リシアルは極力デュルケム派の道德の科學の見方を排斥し、道德史を社會形態に關係せしめて比較的に解釋することによつて、道德進歩の一般的過程を明にしうる。科學は征服的でなければならぬのであるから、道德の社會的條件を明にすることによつて道德的向上の途が與へられるのであると説いて居る。此説あるはデュルケム派の道德研究を以て消極的、懷疑的なるものとし、こゝにその缺陷を認むる故である。リシアルはなほデュルケムの宗教社會學に對しても同様の見地から之を攻撃して居る (*L'athéisme dogmatique en sociologie religieuse*, Paris 1923)。リシアル社會學の簡單なる紹介はデュノワ、ウイ氏等が試みる所である。(Duprat, *Orientation actuelle de la sociologie en France*, *Revue Int. de Sociologie*, Juillet-Août 1923; Achille Ouy, *Un sociologique indépendant* Gaston Richard, *Revue Int. de Soc.*, Mai-Juin 1926.)

瑞西デュネーヴ大學教授デュブラの社會學は、既に氏のデュルケム批評より親はるゝが如く、デュルケムの社會學主義に對して社會心理學を主張するにある。氏によれば、社會事實や社會進化をば之を不偏不黨に觀察する時、個人の存在や個人的思想 個人的信仰 個人的希望等は決して第二義

的のものではない。是は個々の社會科學が皆確實に立證せる所であり、デュルケム等の形而上學的反對理論は決して眞面目に考慮せらるべくも無いのである。従つて佛蘭西に於ても又世界の何處に於いても所謂社會學主義は駁撃され失脚するものと信じて疑は無いのであると(133)。但しデュブラはデュルケムの功績を全然否定するものでは無い。否、むしろデュルケムの研究によつて確實に立證されし點とデュルケム以外の傾向 研究とを巧に調和せんと欲するものである。

氏は社會學上の種々なる異説の暫定的調和は、曾てヲルムスが指摘する如くに(134) 社會學を社會諸科學の哲學と見る點に存し得るとして居る。すなはち社會學は社會的諸科學の哲學として、諸科學に夫々獨特の對象を與へ固有の方法を授け此等諸科學の結論を受取つて純哲學的見地にて人間社會を総合的に取扱ふといふ見解に同意して居る。ヲルムスが社會事實の決定に關してタルドの模倣説をすて、デュルケムの拘束説を斥け、「複數觀念や複數活動の協働 *concoining*」こそ最も普遍的なる現象であるとしたこと(135)に賛同の意を表し、デュルケムの社會拘束説は單に未開社會の事實に對して有効たるに止る。現代に於ける定形なき同質的集團の研究は、デュルケムの意味に於ける社會學的研究よりも、むしろ社會心理學的研究に委せらるべしと見做す。

デュブラは個人心理と社會心意との間に根本的相違を認めざるブーグレの見解を正當とする。然

し此場合に於てもなほ社會と個人との對立問題に直面せざるを得ぬことを是認する。たゞ社會心理學の見地に立つならば此問題の解決は大に容易となる。それはタルドの個人心理學即ち頭腦内の心理學と社會心理學即ち頭腦間の心理學の關係に於て、之が問題とされるからであると云つて居る。畢竟デュブラに於て社會學は心理・社會學 *Psycho-sociologie* 或は社會心理學たるものである。かゝる見地に於て氏は「社會心理學」を著して居るが、又その特殊研究として「社會學と民主政治」「心理・社會學的道德論」「社會連帶論」等多數の著述がある(136)。

かくの如くリシアル、デュブラは一般にデュルケムの社會學主義の極端を棄て、心理學的解釋をも併用しつゝ、綜合社會學乃至社會心理學を主張するものである。此點に於て氏等はタルドへの尊敬を再びするものと見做し得ることは、既に繰り返して説ける所である。然るに此等の大家とその軌を齊しうして、社會心理學的考察より出發し乍らデュルケムの考察を採用することによつて、社會現象解釋の最も妥當なる見地に到達し得ると考ふるものは他にも少くない(137)。一例をあぐるならば教科書的形式を以て著されたるコーレー P. Caulliet の社會學である。又かゝる見地より經濟社會學を試みたるものとして別にボシアル A. Bochar をあげることが出来る(138)。コーレーにしてもボシアルにしても、彼等は共にタルドとデュルケムとを調和せんとする點に一致せるもの

であつた。それは人々の社會化の過程に於てデュルケムのあるが如き受身的拘束の事實を認めると共に、同時に個人の社會に對する積極的な役割をも承認することにある。従つて心理學者ポーラ・Fr. Paulhan が個人的感情が社會生活によつて變化する事實を傳へたることと一致し(139)、心理學と社會學とは密接に提携し得らるゝ素地を準備することともなる。

多くの學説が然るやうに、デュルケム派が社會現象に關して積極的に主張せる部分、すなはち社會を中心として社會現象を説明することによつて多くの事實を明にし得らるゝといふ主張は、正當なること疑ひ得ざる所であるが、心理學的説明其他を斷然拒否するその消極的部分は不當のことであらう。換言すれば、社會現象の認識手段として社會が大なる役割を演じ得ることは承認されるが、之を以て唯一の認識手段とは考ふべからざることであらう。何よりも先に社會それ自身が實證的に説明さるゝことを要する。而して其説明は心理學、特に社會心理學的研究に俟つことも亦少くないであらう。

人事現象が社會的觀察によつてのみその重要な説明の見地を準備さるゝことは、歴史的社會的現實態のみならず、又心理學の研究に對しても逆に云ひ得ることである。之が故に心理學的研究に於ても社會學の見地が重きをなさねばならぬ。かゝる意味に於て、最近に於て完成されたるデュロー

マの「心理學概論」に於て、デュルケムの社會學の見解が包含さるゝに至つたことは(140)今や心理學と社會學とが佛蘭西に於て、密接なる提携の準備成れることを物語るものであらう。

最後に佛蘭西社會學に於て、最近現はれたる特殊の社會學的企圖をあげて見たい。其は遙にルブロー派に屬するビュロー Paul Bureau (1928)の社會學概論である。ビュロー教授(パリ大學)は元來ルブロー派に屬し、従前諾威農民の興味ある研究を發表したのであるが(141)新に一九二三年「習俗の科學、社會學的方法序論」(142)を發表した。此著述は社會學の方法、社會の本質等の根本問題を取扱へるものであるが、方法論に於て氏はルブロー派の傳統的精神を受けて、總てのア・プリオリ的原理を排斥し觀察法こそ複雑なる社會現象攻究の唯一の途なりとして居る。而も氏は單に物質的環境と社會との關係にのみ専心するルブロー的觀察法の不備を痛感する。すなはち社會は工技の發明によりても又精神生活宗教生活からも著しき變化を受くるのである。但しデュルケムの如くに個人的創意を無視することは誤謬であると。ビュローはこの意味に於て個人の自由を認めし社會學を主張せんとする。故に氏はデュルケムが社會事實を拘束に認めたと反して、その本質を「個人が其屬する集團との關係を整頓する爲に採用する總ての活動形式、總ての行爲、總ての企圖、總ての様式である」と述べる。

結局ビュローの如きも亦デュルケムの社會學主義とタルドの心理學主義を調和し、而もルブレーの傳統に於て社會現象の實地的調査を企てんとする者である。尙ビ・ローが「豫知せんが爲めに識る」といふコントの箴言を其儘に、合理的社會改造の政策を問題とし、現代社會の道德的改造に關して社會學の必要を力説するは、傳統的佛蘭西社會學の一面の精神をよく發揮せるものと評すべからざるべし。

- (113) 歴史研究者の立場より Durkheimの社會學主義の精神を尊重しつつ、而も歴史に於ける偶發性を力説して、歴史現象の社會學的解釋を限定せんとする者に Henri Berr, *La synthèse en histoire*, Paris 1911 がある。Berr は歴史の偶發的原因として個人を重視するのであるから、後述のシブネル、ブヌアラの反對説と共通の點がある。
- (114) E. Boutroux, *Science et religion dans la philosophie contemporaine*, Paris 1908, Chap. IV.
- (115) Simon Deplaigne, *La conflit de la morale et de la sociologie*, Paris 1911, 3. éd. 1923.
- (116) O. Habert, *L'école sociologique et les origines de la morale*, Paris 1923.
- (117) Richard, *Notions élémentaires de sociologie*, Paris 1903. 7. éd 1922.
- (118) Richard, *Sociologie et métaphysique*, dans la revue protestante *Foi et Vie de Paris*, Nos. des 1^{re} et 16 Juin, 1^{re} et 16 Juillet 1911.

- (119) Parodi, *La philosophie contemporaine en France*, 2. éd. p. 153. *ブノアラの道德社會學に關する批難* (1913) *Le problème moral et la pensée contemporaine*, 2. éd. Paris 1921, pp. 35 ff. に見るをうる。
- (120) Duprat, *L'orientation actuelle de la sociologie en France*, *Revue Internationale de Sociologie*, Juillet-Août 1922.
- (121) *Revue Internationale de Sociologie*, Sept-Oct. 1922, pp. 471 ff. ("Influence de Tarde").
- (122) A. Vierkandt, *Gesellschaftslehre, Hauptprobleme der philosophischen Soziologie*, Stuttgart 1923.
- (123) *Année Soc.* t. III, p. 152.
- (124) Bouglé, *Idées égalitaires*, pp. 125, 188, 235, 237 etc. *Régime des castes*, p. 211.
- (125) Bouglé, *Évolution des valeurs*, pp. 17 ff.
- (126) R. Maunier, *Die Soziologie in Frankreich seit 1900*, *Monatschrift für Soziologie*, I. Jahrg. (Februar 1909) S. 100 ff.
- (127) Richard, *L'origine de l'idée de droit*, Paris 1892; *Le socialisme et la science sociale*, 1897; *L'idées d'évolution dans la nature et dans l'histoire*, 1902.
- (128) Richard, *Notions élémentaires de sociologie*, 1. éd. Paris 1903, 10. éd. 1926.
- (129) Richard, *La sociologie générale et les lois sociologiques*, Paris 1912.
- (130) *ibid.* p. 31.

- (131) *L'Année Sociologique*, t. XII, pp. 1 ff.
- (132) Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft*. Grundbegriffe der reinen Soziologie, Leipzig 1887, 4. u. 5. Aufl. 1922.
- (133) Duprat. *L'orientation etc.* *Revue Int. de Soc.* Juillet-Août 1922, pp. 251 ff.
- (134) R. Worms. *Philosophie des sciences sociales*, 2. éd. pp. 208 ff.
- (135) *ibid.* p. 84.
- (136) Duprat, *La psychologie sociale, sa nature et ses principales lois*, Paris 1920; *Science sociale et démocratie, essai de philosophie sociale*, 1900; *La morale, Théorie psycho-sociologique d'une conduite rationnelle* 1901, 2. éd., 1921; *La solidarité sociale, causes, son évolution, ses conséquences*, 1907.
- (137) Cautlet. *Éléments de sociologie*, Paris 1913.
- (138) Pochard. *Les lois de la sociologie économique*, Paris 1913.
- (139) Paulhan, *Les transformations des sentiments*, Paris 1920.
- (140) G. Dumas, *Traité de psychologie*, II. Tome, Paris 1924, Livre II, Chap IV. *La sociologie* の項に G. Davy の條に於る。
- (141) Bureau. *Le paysan des fjords de Norvège*, Paris 1906.
- (142) Bureau. *La science des moeurs, introduction à la méthode sociologique*, Paris 1923.

ギディングス社會學の新原理

—その一側面—

タルドがギディングスの「社會學原理」を始めて讀んだのは、その佛蘭西譯が巴里に於て刊行されたる年の千八百九十七年、即ち英語原書第一版刊行の翌年に當る。ギディングスの社會學說を社會心理學派の中堅とするならば、タルドはまさに其祖師たるのである。タルドが、ギディングスの新著「社會學原理」の中に、彼自身の固有の傾向が異なる仕方でも祖述され、又ギディングスが彼をその先行者と仰ぐ事實を發見したことは、本國佛蘭西學壇に於て未だ充分の承認を贏ち得ざりし當時のタルドにとつて、まことに衷心の歡喜であつたに相違ない。彼は「ギディングス氏の社會學」⁽¹⁾といふ小論の劈頭にこの喜悅を物語るのである。然るに此小論は表面上ギディングスの社會學說の批評の如くして實はその一半の目的が佛蘭西に於けるタルド反對論者に對する間接的攻撃にあるのである。例へば同書三〇二頁註の如き、タルドはギディングスの言葉を借りてデュルケムを非難して居る。かゝる場合ギディングスがタルドの味方たるべき、極めて親密なる學說上の關係が存在する

のである。タルドはギディングスの「社會學原理」を批評するに當つて、彼自身とギディングスとの間に存する學說上の重要な類似を略ぼ次の三點にあるとした。第一、共に心理觀に立脚すること第二、社會有機體説の排斥。第三、社會學に於ける靜學動學の二分制を棄てたること、是である。併し乍らタルド、ギディングス兩者の學說の間には之等の類似點が嚴存するにも拘はらず、其反面に於て顯著なる差異が存在するのは否定し得ざることである。「模倣」を社會現象の核心的事實と見るタルドと、「同類意識」を其原理とするギディングスとの間に、根本的に次の如き異なる見解が存在したのである。それは先づタルドが飽まで社會的關係 (Le lien social) なるものに注目するに反し、ギディングスは寧ろ社會的結合 (Association) に關心することである。私は今此點に於ける兩者の見解の差異を明にする爲めに、ギディングスより左の簡單なる引用文を掲げる。

二人の者が相戦ふ時、各自は相手の打撃を衝動的に眞似るのである。此場合もし一人の者が手を換へたとしたら、それは偶然のこと或は理性の干渉からである。兩軍が交戦する時、双方の軍隊は敵方の多くの策動を反覆するのである。……模倣は、かくて、總ての意識的抗争の一部をなすものである。……模倣はよしすべての社會的活動の要素であるとしても、模倣を以て社會の特有現象なりと見做しえぬ理由は今や明である(2)。

右の引用文に於て最後の圈點を附せる「社會」の文字は社會的結合或は社會的團結の意義に解すべきであり、所謂「社會的活動」は之をタルド流の「社會的關係」と解釋してその意味が明かとなる。すなはちギディングスの考ふる所によれば、抗争的關係は社會的關係ではあらうが、社會的結合の状態に非ざるが故に社會と見做すを得ないのである。然るに此抗争的關係にあつても、模倣は當事者相互の間に行はれる。従つて模倣を以て特に「社會」即ち社會的結合の原理となしえぬといふにあるであらう。これに反してタルドの見解は抗争も戦争も社會的關係の現象にすぎず、ギディングスのいふ「社會的活動」がむしろ「社會」其者であると考へる。現にタルドは上掲の「ギディングス氏の社會學」の論文中に矢張り右の個所をギディングスより引用しつゝ、「模倣はよしすべての社會的活動の要素であるとしても」の一句をわざ／＼イタリック體に書き改めて、注意を促して居る。そして彼はその引用文の後にほ次の如く附言するのである。

ギディングス氏は抗争をば、(殊にその極端なる) 戦争の場合まで、社會的結合の最も有力なる手段の一つと考へるのであるから、予は此反對には愈々驚き入るのである(3)。

タルド、ギディングス兩者の間に存する相異として、第二に次の點を指摘することが出来る。それは社會學的研究に於て主觀的事實を重んずるか或は客觀的事實をとるかとの差異である。そして之は

極めて明瞭に兩者の學說の特色を表示するものである。引續いてタルドにきけば、

吾人をして特に留意せしむるのは中核的、基礎的、特質的、社會事實の觀念である。卑見によればそれは心と心との間の關係であつて、此關係は人が之を客觀の相に於て、或は之を主觀の相に於て見ることからして、模倣となり或は天性の同情、被暗示性、社交性として現はるのである。……所謂「同類意識」なるものは、予がむしろ社會的同情と呼ばんとする所のものであり、換言すれば社會群の範圍に即せる精密なる感情是である。(4)。

タルドはなほ進んで社會を其客觀的形相に於て觀察することが、取扱上より便利且混雜の虞なきことを力説するのであるが、之は今問題ではない。ギディングスは此等のタルドの批評を聞く以前に「社會學原理」第三版に於て、他の方面よりの非難に答ふるに當つて、結局タルドの斷案に服せるが如くに見える。すなはちギディングスはそこにその所謂「同類意識」が同胞感情 (Fellow-feeling) を中心とせる社會的結合の要素たることを容認して居るのである。(5)。

今正確にギディングスの「同類意識」を解するならば、それは同胞感情プラス社會結合要素プラス社會組織の要素となる。此最後の段階に於てギディングスが「社會的拘束」を説くデュルケムに接近し來る事實も見られるのであるが、少くとも其出發點たる「社會的關係」に於てタルドはギディングス

の結合説よりも深刻なる基礎の上に立つことを察せられる。而してタルドは他の點についても、ギディングスの原理をよく了解しつゝあるものと見られ、ギディングスの學說に對する彼の非難は多くは的中して居るのである。私は今タルドのギディングスの社會學的原理に對する非難の要點を簡單に左の三項に約めることが出来ると思ふ。

- 一、ギディングスは個人が唯一つしか同類意識を持たぬと豫想するやうであるが、個人の持つ諸性質の類似的組合せ、種類に應じて、同類意識も亦當然複數でなければならぬ。(6)。
- 二、同類は結合すると限らぬ。而して異類も亦結合しうる。所謂同類意識は客觀的同類の不正確なる主觀的反映である(7)。同類意識の基礎たる「同類」は、實は、常に不純なる類似、不完全なる類同にすぎぬ。そこに必ず多少の差異の混入を免れない。民族といひ、國家といひ、階級といひ、其實相は皆虹に現はるゝ七彩の如く、本來區劃の判明せぬ連續に外ならぬのである(8)。
- 三、ギディングスは模倣が闘争に於ても行はるゝ理由から、模倣を以て基礎的社會事實と見做しえぬと主張するのであるが、闘争も社會的活動の一つであることと見ることから、ギディングスの所謂第一次的抗争(社會的結合前のもの)と第二次的抗争(社會團結内のもの)との密接なる關係を始めて正當に理解しうる以上、毫も模倣が基礎的社會事實たることを否定しえぬのである(9)。

私は決してかゝる小論文に於て、ギディングスの學說を完全に検討しうるとは信じない。既に氏

に最も親炙せる學者の一人ノースcottの如きは、氏の學說が極めて捕捉するに困難なる旨を述べて居るのである(10)。私はたゞ此ノースcottの研究發表の後二年、同一の米國社會學雜誌々上(一九二〇年一月及三月號)に掲載されしギディングスの論文に於て、ギディングスが過去の社會學原理たる「同類意識」を棄て、新に「複數行動」を以て社會學の原理と認めたる場合、新しき「複數行動」の理論はタルドの昔日の非難に對して果して幾何の反省を経たるものなるかを窺はんと欲するにあるのである。

併し乍らこゝに顧慮すべきは、ギディングスの新しい複數行動說に關して、米國社會學史家バーンズの與へたる注意である。バーンズは、ギディングスの社會學原理に三段の發展を認むるのであつて、氏は之に關して次の如く述べる。

氏(ギディングス)の初期の著述に於て其社會心理學の核心的事實は「同類意識」であつた。氏は「社會學原理」に於て、「社會に於ける特有の基礎的事實は同類意識である。此術語によつて私は、生物が其生活の段階の高下を論ぜず、他の一意體を自己と類似の種類なりと認むる意識状態を意味する。……此同類意識は種々なる仕方によりて行爲に働きかける。そして我々が適當に社會的と呼びうる總ての行爲は之によりて決定される」(「社會學原理」二七一—二八頁)といつた。氏の原理の刊行の年即ち一八九六年と氏の「歴史

的及記述的社會學」(11)の世に出た一九〇六年との間に、ギディングス教授は社會心理學を開くべき彼の鍵を同類意識から「刺激に對する分化的反應」(“Differential response to stimulation”)に迄擴張したのである。先の同類意識は此新しき解釋の内に從屬的なる、然し重要な要素として織り込まれたのである。氏は此社會分析を最もよく約言して次の如くに述べて居る。「此點に關する吾人の解明を約めて、次の如く云ふことが出来る。吾人は社會なるものを感覺動物の複數で、共同の刺激、分化的刺激及び相互刺激に對して多少とも繼續的に曝露され、之に對して差異或は競争的活動に出づると共に類似の行動、協同的活動或は協同作業に出で、反應し、かくして叡知の進歩と共に彼等が主調的な同類意識を通じて粘着し來り、而も常に個體的自由の幾分を保障するに足るだけの差異意識を有するものと見做すのである」(「記述的及歴史的社會學」八一—九頁)。氏が社會過程を最近、「複數行動」と名づくるのは主として解釋の本質的變化といふよりも寧ろ術語上の變化と見做せやう。氏は説く、「複數行動は別に社會學と呼べる、社會の心理學の題目であつて、此科學は方法上統計的であり、第一に複數行動を要素に分解し、第二にその發生、統整、分化、機能を説明するのであるが、此際之等を變數たる刺激(一)と反應機制體相互の(多き或は少き)類似(二)の關係によつて説明せんとするのである」(米國社會學雜誌、一九二〇年一月號、三八八—九頁)(12)。

さて以上の引用文によれば、バーンズはギディングスの社會學原理に三段の發展を物語るが如くにして、實は單に二段の開展を述べるにすぎないのである。すなはち「原理」と「記述的及歴史的社會

「學」の間に、重要な原理上の發展があらはれ、最近の原理たる「複數行動」は、此後の著述中に既に論ぜられし「刺戟に對する分化的反應」なるものに新しい術語を代用せるに過ぎずと見做すのである。而してこれは理由のあることであつてギディングスは其「記述的及歴史的社會學」の卷頭に於て、實に次の如く述べて居るのである。

第四說(ギディングス説)は社會的交渉の最も基礎的形式は心的現象の原初に於て見出されると見る。……吾等は同一の所與刺戟に對する類似の反應に於て、總ての一致的活動の端緒(換言すれば)その絶對的淵源を有するのである。すなはち協力のありとあらゆる形式の發端がこゝに存在する。之に反して差異の反應や差別の反應に個性化 分化 競争等のすべての過程の端緒を有し、之等の過程は、結合協力に對する際限なく異なる諸關係によつて、組織された社會生活の無限の複雑さを齎すものである(13)。

而してギディングスは「複數行動」の論文中に於ては、右の反應を以て簡單に行動と解し、かゝる反應は協力に終り或は分化に終るとしても、複數個體を假定する所からして之を複數行動とせる迄であるといつて居る。従つて新原理の名稱は新しきも、原理其者は既に從來氏の採用せる所のものである。但しパーンズの所謂「刺戟に對する分化的反應」なる文字は、私の知れる限りに於て、ギディングス自身の使用せざる所のものである。これ故にバルト、プリストル等の社會學史家はギディン

グスの改説に左まで注意して居ない。又見様によりてはギディングス社會學説の重心が當時依然として同類意識にあつたやうにも解せられるが、今日は稍これと趣を異にする。すなはち前記「複數行動」の論文を収録しつゝ氏は新著「人間社會理論の研究」を公にし、基礎的社會事實としての複數行動を力説すると同時に、氏の社會學體系が完全に「複數行動」を根幹として成立つ所以を論述するのである(14)。

此新著に於けるギディングスの立場は初期の同類意識説を深めたものとも認められ、又中途の刺戟説を徹底せしめたものとも解せられる。それはパーンズが巧に評するが如く「進歩的、去り乍ら矛盾せざる開展」(15)である。私は今その大體の體系と稱せられるものをあげて見たいと思ふ。ギディングスは次の如く述べる。

若し予にして社會學の體系を有するものといひうべくんば、それは凡そ次の如きものである。

一、一境過或は刺戟物は一個以上の個體によつて反應される。そこで單數的行動あると共に複數的行動が存する。複數行動は敵對 競争 衝突に至り、又同じく協調 協約 團體的企業にも進む。これが故に社會現象は二つの變數、即ち境過と複數行動の成果である。

二、複數行動に参加する諸個體にして行動的諸種類又は諸類型に分化せる場合、同類意識の結果、すなは

ち或る種類を好み或は忌み、容認し或は否認する結果、集合體を意識的差別的團結とし、群の慣習の行動を社會とするのである。而して社會は、時として意識的なるも恐らくは屢々無意識的なる社會的壓迫によりて、否認される性質と行爲の諸種類の存在を比較的困難ならしめるのである。

三、行動の根本的諸類似とその認識にして、廣く行はれ社會的粘着を維持するに足りる時、社會は團體的努力、功業の爲めに自己を組織し、此際部分的なる事項に關する行動の差異とその認識とは分業を發生せしむるに足るのである。

四、結局組織的社會はその容認と否認、その壓迫と功業により、比較的知能あり、寛大、助力的にして創意を示し、責任分擔を引受け集合的企業に於て有効にその役割を演ずる所の精神、性格の類型を選択し且永續せしむるものである、組織的社會は適者を選択し永續せしめる(16)。

この論述は、社會の基礎的事實として複數行動を認める氏の精神が「記述的及歴史的社會學」に於けると變化なきことを明にして居る。

ギディングスによれば團體的に分離せる個體を接近せしめるものは行動である。従つて肉體的に分離せる個體の成生する團體生活は單に行動的なるのみである(17)。さて蜂の群、獸の群、家畜の集團或は人間社會を構成する行動は皆複數個體の行動である。此意味でかゝる行動は複數行動と稱しうる。複數個體の行動は、それが類似個體の場合には相互關係を生じ且相互に相接近し來るもので

ある。尤も同一の餌を争ふ動物の群の如くに競争を生ずることもあり得るのであるが、同時に彼等に共同の敵を攻撃する一致行動が存しうるのであつて、かゝる行動が繰返さるゝ時、結合動作は慣習的の集團動作なりうるのである(18)。此種の複數行動は單數行動とは異なる他の條件、形式及び法則を持つのであつて、此研究こそ社會學の題目たるのである(19)。

ギディングスは、人間生活を複數的生活と見做して、右の説をなすのであるが、次に進んで複數行動を決定する地域的影響を述べる(20)。曰く、自然的環境が複數的生活を維持し之を刺戟するに適應するのは、それが總ての社會現象の一要素たる所以である。自然的環境は社會人口の密度と組成とを決定するものであり、團體的勞作を促し又之を制限するのである。環境は社會組織と團體的效果の可能の限度を定め、社會的安寧と個性化の可能の限界を作るのである。然るに自然的環境は靜的のもの、基礎的のものである。此自然的環境が如何なる媒介によつて影響するか、此點の考察に至つて境遇的壓迫の刺戟の研究が入用である。「何となれば行動を刺戟し之を維持する刺戟物中には、種々なる苦惱と困難と災害とがあつて、孤立生活を營み或は隣保の同胞に助けられぬ諸個體に對して重き壓迫を加へ、各種動物の大多數と人類の大多數を強制して群居せしむるからである」(21)。群居して生活する諸個體は、やがて刺戟に對する類似の反應の結果として、類似の肉體を有する。又

その結果遂に類似の精神を發達せしむるに至るのである(24)。

然るに以上はいはゞ單純なる複數行動の考察に過ぎないのである。この「單純なる複數行動は相互刺戟と反應によつて複雑となり、又發達する。群團或は集團の各個體は、その同胞に對して刺戟物の合成體となり、各自は此同胞刺戟に對して反應するのである」(25)。此相互刺戟はギディングスが特に「記述的及歴史的社會學」以來、熱心に主張する所のものであるが、近著に於て氏は固有の同類結合の原理をこゝに説くのである(26)。氏によれば、同類の有機體は相互に刺戟し合つて、決して反撥的でないのである。これは第一、彼等が刺戟物の類似合成體であり、第二、彼等が反應の類似合成體である許りでなく、第三に、aなる刺戟主體が同類a'に對しある行動によつて刺戟を加へし場合、a'はその行動の一つとして、aの最初の刺戟行動に極めて類似せる行動を起す、そしてかゝる行動は殆んどa自身の自己模倣の行動と齊しいもので、此間に行はるゝ相互刺戟は僅少なる程度に於て敵對的で、強烈なる度合の結合性を有するが故である。ギディングスは此相互刺戟を述べし後、直ちに同類意識論に入り、かくて曩日の「社會學原理」當時の學說に連續するのである。

要するにギディングスは、「記述的及歴史的社會學」以後に於て、同類意識成立以前の社會現象に觀察眼を向けたのである。そして捉へ得た基礎的社會事實は「複數行動」なるのである。私は今そ

の學說の大體を概観したのであるが、次に進んでギディングスに對するタルドの舊批評は、その新原理に對して、果してなほ有効なりや否やを検討したのであるが、その前にギディングスがタルドの非難に對して、過去に於て反駁せりと思惟される點を顧慮しなければならぬ。

それはギディングスが「同類意識」の底を割り、新に同一刺戟に對する類似反應及び差異反應を以て「社會關係の最も基礎的形式」に數へた當初、「記述的及歴史的社會學」中に記載する所のものである。今これを左に引用する。

此社會概念は相互性と齊しく個性を顧慮するのみならず、連帶性に關する吾人の説明をば威壓説或は模倣説よりも遙に深刻ならしめることは、改めて主張する必要がないのである。蓋し威壓説或は模倣説は共に——究局の心理學的解剖に於て——應酬的即ち相互的刺戟と反應の現象として説明さるべき筈であるからである。實にタルドがその説明中に用ゐる言葉はこの事を暗黙の間に承認するのである。(タルドのいふ)模倣は刺戟物であつて、模倣的行爲は刺戟物に對する反應なのである(27)。

これを以て見れば、ギディングスは氏の新しき複數行動の原理によつてタルドよりも遙に深奥なるをえたと自負するやうである。それにも拘はらず、この反駁に對するタルド側の回答は全く易々たるものでありうる。タルドは何れの場合にも、社會を以て人間的關係とすることは先に指摘せる通

りであるが、それと同時に彼は他の總ての物的要素から脱却した所の純心理的關係、すなはちタルドの言葉を藉りていへば基礎的社會事實 (Le fait social élémentaire) の研究を以て所謂頭腦間の心理學たる社會學の職責とした⁽²⁶⁾。タルドによれば、社會學の研究を此範圍に限定せざる時、斯學は萬有の學問となり科學としての獨立性が失はれるのである。⁽²⁷⁾ 換言すれば個人相互間の關係こそ社會生活の唯一、且缺くべからざる要素であり、此個人間の關係の純心理的考察こそ社會學の研究であるといふにある。故にタルドより見ればギディングスの所謂「地域的影響」や「境遇的壓迫」の如きは全く地理學又は生理心理學の取扱に入るものであつて、社會學の問題ではないのである。タルドが眞に社會と見做すは人々相互間の心的關係であり、ギディングスの所謂「相互的刺戟と反應」其者である。而して此相互的刺戟と反應は、タルドに於て、模倣現象其者に還元さるゝ譯である。これについてタルドは次の如くに述べる。

……つまり其一人が他の一人に精神的に働きかけるやうな二人であれば充分である。予は此二人の關係こそ、社會生活の唯一にして缺くべからざる要素であり、そしてそれが常に基礎的には、一人を他の一人が模倣することによつて成立つて居ると主張するのである⁽²⁸⁾。

タルドは既に「ギディングス氏の社會學」の論文中に於て、ギディングスが心理學的に社會學を樹立

するに努力しつゝ、人種と氣候の影響を重視するを怪しんで居る⁽²⁹⁾。従つてタルドにして若しギディングスの「複數行動」の新原理を聞知するを得たりしならば、寧ろ之を以て、ギディングスの逆轉と解したかも知れないのである。

私は最後に先に掲げたタルドの他の非難がギディングスの新原理に對して果してなほ有効であるか、否かを簡単に確めたいのである。

一、個人の有する同類意識は唯一つに限らぬとの點。この非難に對して、新原理は充分なる解答を與へべきであると思ふ。すなはち複數行動による結合の多様性を考ふる時、その一々の結合に就て「同類意識」が存し得べきが故である。従つて個人は多くの社會的結合をなすと共に、原則としてその回数と同数の同類意識を持つべきである。

但しこの場合、同類結合の事實と同類意識の存在とその活動が假定されてある。之を假定すれば解答は右の如く容易であるにも拘はらず、ギディングスは新著に於て依然舊説を改めぬことを發見するのである⁽³⁰⁾。そしてそれは氏の社會渾一觀の禍せる結果である。かくて氏の社會渾一觀は、その社會學的原理の變化より、何等の影響を受くることなく存続し、タルドの非難に對する反省なきを知るのみである。

二、同類は結合すると限らぬ。所謂同類意識は客觀的同類の不正確なる主觀的反映に過ぎぬとの點。前半の反對はタルド等の外、高田教授の指摘する所である(註)。之に對し新著に於てキティンクスは、相互刺戟の條下に自説の立證に努力しつつある(註)。併し乍ら、それはなほ幾多の點にて不満足たるを免れぬやうである。後半の異論に對しても、氏はなほ舊説を固執するが如くである(註)。

三、抗争も亦社會關係たるに非ずや。此問題に關してキティンクスは、今や複數行動には協力の場合あると共に、抗争の場合のあることを一般的に承認しつつあるを以て(註)、氏の「原理」時代に於て説ける所謂第一次的抗争は第二次的抗争と密接なる關聯に置かれて取扱はれ、結局タルドに服したものと見られる。(註)

- (1) G. Tarde, *La sociologie de M. Giddings, Études de psychologie sociale*, Paris 1898, pp. 287—308.
- (2) H. F. Giddings, *Principles of sociology*, New York 1896, p. 103.
- (3) Tarde, *op. cit.* p. 298.
- (4) *ibid.* p. 291.
- (5) Giddings, *Principles*, 3rd. ed. 1896, Preface pp. ix ff
- (6) Tarde, *op. cit.* pp. 294—5.

- (7) *ibid.* pp. 291 ff.
- (8) *ibid.* p. 295.
- (9) *ibid.* pp. 298—299.
- (10) C. H. Northcott, *The sociological theories of Franklin H. Giddings*, *American Journal of Sociology*, July 1918, p. 1.
- (11) 注意 マーソクスは粗漏にも實名を誤つて居る。實は「記述的及歴史的社會學」である。
- (12) H. E. Barnes, *Some contributions of american psychological sociology to social and political theory*, IV. F. H. Giddings, *The Sociological Review*, Vol. XV. (1923) No. 1. p.35—36.
- (13) Giddings, *Descriptive and historical sociology*, New York 1906, pp. 6—7.
- (14) Giddings, *Studies in the theory of human society*, New York 1922, Preface, pp. 291 ff
- (15) Barnes. *op. cit.* p. 35.
- (16) *ibid.* pp. 291—2.
- (17) *ibid.* p. 251.
- (18) *ibid.* pp. 251—252.
- (19) *ibid.* p. 252.
- (20) *ibid.* pp. 253 ff

- (21) *ibid.* p. 254.
 (22) *ibid.* pp. 255 ff.
 (23) *ibid.* p. 257.
 (24) *ibid.* pp. 257—8.
 (25) Giddings, *Descriptive and historical sociology*, p. 7.
 (26) Tarde, *Les lois sociales*, Paris 1893, p. 28.
 (27) *ibid.* pp. 12—13.
 (28) *ibid.* pp. 35—36.
 (29) Tarde, *Études de psychologie sociale*, p. 290.
 (30) Giddings, *Studies etc.* pp. 259—260.
 (31) 高田保馬「社會學原理」二八四頁 以下
 (32) 本書 三〇四—三〇五頁
 (33) Giddings, *Studies*, pp. 259 ff.
 (34) Giddings, *Studies*, pp. 251 ff.; *Descriptive and historical sociology*, pp. 7—9, 128 ff.

トロッター集團本能の研究

一

人類の群棲本能又は群居本能は、既に人類學者や動物學者が認め得たることである。これを社會學の研究に移して、原始社會の發生を人の有する群居本能に歸したことは無理からぬ理である。アリストテレスの言葉を引用する迄もなく、人が社會的動物たることはまことに明かである。隱者の生活は人間生活の例外であつて、ロビンソン・クルソーは、萬里の孤島に漂流して萬止むを得ざる時、始めて孤獨、絶離の生活を送つたのである。義として周の粟を食まざる伯夷叔齊は、深く人間性に根ざした群棲本能を否定することによつてのみ、地上の罪禍から遠ざかり得たと信じたであらう。

社會は如何にして成立つか。この問に對する最も有力なる答の一つは、群居の利益を指摘する説明であつた。それは群居説と名づけられて居る。此群居説はいづれの場合にも、ダーキン及びベンサーの進化論の影響の下に立つものであるが、その説明は次の如くである。動物の多數は群居し

少數のものゝみが孤立的生活を営むのであるが、此理由は全然ダーキンの唱道せる自然界の法則に基づくものに外ならない。すなはち動物は與へられた境遇に於て、其生存上の利益如何によつて或は群居し或は孤立するものである。或る動物が孤立的生活を送ることによつて群居生活以上によりよく繁殖し得るとすれば、結局彼等は孤立的生活を送る。之に反して社會的群居がよりよき利便を提供するとすればこゝに彼等は群居する。獅子が群居を嫌ふのは獅子の敏捷と腕力とが優に單獨で獲物を捕へしめるに足るが故である。又草食獸が群居を好むのは、共存して始めて、敵の襲撃に對抗しうる利益を發見する爲めである。

かくの如く動物界に於て生存競争は動物的群居現象を發達せしめたものであるが、人間社會も亦此延長的事實に外ならぬ。群居の慣習が意識内部に反射せられて社會的原動力として現はれしものは群居本能其者であると。私は群居説をこれ以上詳論することなく、單に其旗手たる獨逸の學者オットー・アモンの名を指摘するに止めておく(1)。

(1) O. Ammon, Die Gesellschaftsordnung und ihre natürlichen Grundlagen, 3. Aufl. Jena 1900.

二

群居本能其者のみで社會の成立を説明する危険は明かである。例へばニイチニはかゝる説明に對してそれが理由なきことを指摘して居る(2)。然し、今は之をも問題としない。兎に角、群居本能が人間の重要な本能の一つであることは、社會學上之を否定し得ぬのである。而もこれ迄此群居本能は他の社會的原動力に比較して常に第二次的のものと見做され來つたのである。既に一般動物について、自己保存慾 食慾 性慾等は之を第一次的本能と認むるも、群居の欲望に至つては之を一つの「本能」と見做すこと、換言すれば生物遺傳の内容として微妙なる作用を司る重大なる性質とは承認されなかつたのである。その理由とする所は、生物の外形に於て此欲望は何等顯著なる特殊的变化を伴はぬといふことにある。肉食動物は其爪と牙とが發達し、雪國の雷鳥はその羽毛が白色と變る。此等は皆自己保存の爲め、或は又食慾の爲めの外形上の變化であるが、群居其者の爲めには直接特に著しい身體上の變化は現はれぬのである。

群居或は群居本能は寧ろ主として精神的、心理的の變化を効果するものである。而してかゝる精神的、心理的影響として注目すべき事實の存在することが近時、キルフレッド・トロッターといふ英國の學者の研究によつて明にせられつゝある。私が今紹介せんとするのがその大要である。群居本能が社會成立の一因子として考慮されたことは既に周知の事柄であるが、トロッターの研究は之

を社會的現實現象の説明にまで適用せんとする企である。氏の注意せる點は人間の有する群居的傾向である。氏は之を呼ぶに集團本能 (Instincts of Herd) の名稱を以てした。

トロッターが始めて彼の論文を英國社會學評論誌上に發表せるは、今より十數年前であつた(3)。氏は更に一九〇九年、第二回目の論文(4)を同一誌上に發表したのであるが、此等の著述は共に多く學界の顧る所でなかつたのである。然るに歐洲大戰の社會的變動を経験して氏の例證は愈々豊富となつたので、氏は意を決して大戰勃發の翌年(一九一五年)既往の論文を纏めて、「平時及び戦時に於ける集團本能」なる著書を公にした。此著書の形に於て發表せられし氏年來の所論はこゝに始めて學界の注目を惹き、一九一九年には再版を出すに至つたのである。再版に際し氏はその學説が塊太利心理學者フロイドに負ふ所至大なることを告白するに至つたのであるが、今は之も問題の外に置いて、私は左にトロッターの集團本能説の興味ある點を略説し、なほ其意義を明にしたいと思ふ。

(2) F. Nietzsche, A genealogy of morals, New York (Hausmann) 1897, p. 7.

(3) W. Trotter, Herd instinct and its bearing upon the psychology of civilized man, The Sociological Review, I (1908), pp. 227—48.

(4) Trotter, Sociological application of the psychology of herd instinct, The Sociological Review, II (1909) pp. 36—54.

(5) Trotter, Instincts of herd in peace and war, 7. ed. London 1922.

三

群棲本能を以て第二次的本能と見做すのは、社會現象の觀察に於て謬る所が尠くない。人間の群居的傾向を前提することによつて、他の本能の結果としては到底説明し得ぬ多數の事實を闡明し得るのである。自己保存の本能、飲食の本能、性的本能等が重要な人間本能なることは既に一般に認められた通りであるが、人事は此等諸本能のみを以て容易に説明し盡せぬのである。こゝに第四の本能を假定する必要が起るのであつて、それは實に群居本能其者である。

一般に群居生活が重大なる意義を有することは、多少注意して動物を觀察することから明に解される。其例を蜜蜂や蟻に求めれば、此等の生物は既に生理的に集團生活から離脱して生活し得ぬのである。又他の比較的低度の群居生活を営む生物にあつても、それは單に程度上の差異に止り彼等が群を離れて生活することが困難なることは、察知するに難からぬことである。今生物學的に觀察

する時、動物に於ける智力の發達は主として群棲の事實から説明されるのである。馬や犬や象の如き智力の發達せる動物は皆群居的であり、群棲本能を持つのである。この事は蜂や蟻を参考する時愈々明瞭であらう。人類に限つていへば、直接生存競争に役立たぬ變異的性質、標準的性質から大に乖離せる變異、又個體に不利益な變質が實在することは、全く此群居生活の効果と見なければならぬ。社會生活の爲めに此等の變異的性質は殘存する機會を持ち得る譯である。

集團生活の事實は、有用な能力が人間及び他の群棲動物に於て退化した現象を最もよく説明し得る。すなはち單に自己保存 食慾 性慾等の爲めのみならば、人類に於ても顎骨は發達し、腕力體力は猛獸に比敵せねばならぬ筈である。然るに事實はその反對であつて、一人一獸の鬪争に於て人は決して猛獸の敵ではないのであるのみならず、人間は他の穩和なる動物に比較しても自然生活に對して餘程不向に出來て居る。此等の事實は人類に群居其者を認めざる限り、到底不可解の事實と見做さねばならぬのである。

さて群棲の事實は群居生活が生物に與ふる利益から之を發見するものであるが、群居生活の利益たるや、實に群居する個體の等質といふことから始めて可能となる。蓋し共存の利益は全體が恰も一個體の如く動作し得らるゝ點に存するのであるが、之には内部の個體の性質上の類似が重要な

要素となるからである。此事情より、群居生活は又必然的に個體相互の間の等質を招來するやうに作用する。集團の内部には個體相互の間に活潑なる模倣關係が成立し、各個體は皆幾分づゝか他の者に對して指揮的であり、同時に他の者に追隨的である。指揮は模倣に根柢するものであつて、指導者は集團の標準的性質に類似する性質を持つといふ許りで他の者は之に追隨するのである。若し指導者が特殊な能力の持主であつて集團の標準人以上の者であるならば、彼は指導者として永く他の者から追隨されず、間もなく其指導的地位から失脚するのである。

集團の内部にあつて單獨の行動を採る者、即ち等質を要求する群居生活の命令に逆らふ者は自然淘汰によつて滅亡する。これは群狼に倣はぬ狼は間もなく餓死し、群羊と行動を共にせぬ羊が他の野獸の獲物となるやうな動物界の實例から了解し得ることである。かくして群居個體は集團の等質的要求に副ふ必要があるのであるが、群居生活に慣れた個體はやがて群團を共有する常の環境と見做すやうになる。換言すれば集團内部に生活し、常にこれと事を共にする衝動が最も強き本能と化成するのである。そして個體を其屬する集團から引離さんとする總ての事情に對して極力之を拒否するのである。

以上、集團生活の事實を外部から観察したのであるが、之を内部から考察する時すなはち主觀的に考察する時、問題となるものは實に「集團本能」其者である。本能を以て假に疑ふべからざる、それ自身自己の存在を立證する完全なるア・プリオリ的综合とすれば、集團感情からあらはれる衝動は正に此種類のものに外ならぬ。唯此集團本能に於て注意すべき點は、それが他の本能の如く特定の行爲に常に表示されぬことである。それは敵手から遁れる疾走の行爲に自己保存の本能を認め得るやうに、明確な特定の行爲に表示されるものでは無くて、寧ろ諸種の行爲に配合さるゝ微妙なる本能的信念、本能的行動を可能ならしめるものである。

今集團本能の實際的表示の例をあぐるならば、先づ最も簡單なる普通感情として人は同類に對して好感を持ち、之に反して異類に對して反撥的嫌惡の念を持つのである。孤獨は之を忌み或場合に於ては如何とも堪へ難い恐怖の念にさへ驅られる。此等は通常人の熟知する事柄であるが、此外人が溫暖を喜び寒冷を厭ふことなども集團本能のあらはれと見ることが出来る。といふのは、暖い感覺は集團的共棲の副産物であつて、此聯想から人は溫暖を好むに至るからである。又寒冷は集團か

らの分離を意味し、故なく底氣味の惡さを覺えしめるからである。

集團生活は個體の等質化によつて保障される。この事は個人が自己固有の心的性狀に背いて自己を集團に同化する傾向を生むのである。社會内部に於て階級が発生する事柄などは此傾向から説明がつく。すなはち各人はその抱く意見、爲す所の所爲から衣服 宗教 娛樂等の末に至るまで、自己に近き階級——大集團たる社會の内部の小集團——の同情と後援とを得なくてはならぬと感ずるのである。奇矯な言論を弄ぶ者の背後には常に此極端な議論を容認する一團の人々が存在するのであつて、彼の奇矯の言論の一部は矢張り集團本能の表示に外ならぬものと謂へる。一般的大勢に逆らひて舊々の立場を敢てする者の周圍にも必ずや貴重なる同志の一團が隠れて存在するのを發見するものである。

人間に對して、集團生活から隔絶することを餘儀なくする總てのものが、不快なるは多言を俟たぬ。この事より行爲に於て、言論に於て、新規の態度に出づることは、多くの場合躊躇と不快の感とを伴ふものである。従つて學界に於て新らしき學說の如き、常に在來の立場から批難を蒙る。而も一度之が一般に承認されし上は反つて一種の流行學說となるのである。此事も亦集團本能より説明されるのである。

個人の持つ羞恥の感情も同様に容易に説明することが出来る。自己が目立つことを忌むこと、人前の羞らひ、演壇上に口籠る等の事實は皆集團的標準型から外れ、集團から乖離するを惧れる軽い恐怖からである。然し集團生活によつて與へられる最も注目すべき心的特質は、人々が集團行動に關して神經過敏なることはである。二三の學者が、暗示に對する敏感を以て群居動物従つて人類の持つ特性として特筆するのは、まことに謂れがある。但し鋭敏なる暗示感受性は、その屬する集團からの暗示に對してのみ始めて作用するものであつて他の方面からの暗示は、必ずしも問題とならぬのである。同類の形成する集團からの暗示のみが、本能的の暗示感受作用を刺戟し得るものである。

五

曾て佛蘭西の社會學者デュルケムは、社會がその内部の個人に對して與ふる威壓(或は拘束)といふ現象を以て彼の學說の核心とした。同時代その同國人たるガブリエル・タルドは、之に反して模倣の行はるゝ所個人の心的相互關係があり、此相互關係が社會現象の本質であるから社會現象の客觀的基礎事實は模倣であるとした。タルドはデュルケムの社會學說を非難して社會は個人相互の心

的關係に基づくのであるから、個人以外に社會的實在は無い。デュルケムは社會の威壓を説くも、個人以外に之を超越した社會的實體はないのであるから、その持つといふ威壓力は科學上曖昧極まるものであると反復指摘したのである。此タルドの所論はまことに明快である。併し乍らタルドの否定にも拘はらず、社會的集團生活に一種の威壓或は拘束の存在することは、經驗上の事實であり多くの社會學者は一般に之を承認するのである。例へばギディングスは、曾てその原理とせし「同類意識」の社會形成力を藉りて之を説いたのであるし、氏が最近に於て此同類意識説を變更した後

に於ても、矢張り「社會の自己統制」なるものを力説しつゝあるのである。⁽⁶⁾
 トロッターの「集團本能」の學說は、批評家の指摘する通り⁽⁷⁾、今日未だ極めて不備の點があるであらう。併し乍ら此不備なる點を認めつゝも、タルドに立脚してデュルケムに到達する途は、此トロッター説に既に暗示されてあると思はれる。ギディングスに於ける「同類意識」の持つ社會形成力、乃至「社會の自己統制」の概念に確乎たる基礎を與ふるものも亦示唆されて居るやうに見える。人は多くの新らしき見解をトロッターの學說より學ぶことが出来るであらう。⁽⁸⁾

(6) F. H. Giddings Studies in the theory of human society, New York 1922, Chap. XII.

(7) M. Ginsberg, The psychology of society, London 1921, p. 20.

ホップハウスの社會學說

三三三

ホップハウス (Prof. Leonard Trelawney Hobhouse, 1864—) は、社會學者として今日まで決して知られなかつた人では無い。ホップハウスは東西の社會學者の中でも極く著述の多い人の方であり、就中其一つたる「道德の進化」Morals in Evolution, 1906 は社會學的名著として熟知されて居る。氏が現に倫敦大學に社會學教授たることは、現代學界に於ける氏の地位が重要なことを推知せしむるに既に充分であらう。英國に於ける唯一の社會學雜誌たる「社會學評論」The Sociological Review の如きも、氏の手によつて創刊された歴史を有するのである。

併し乍ら之迄ホップハウスが純粹な社會學者といふよりも、寧ろ一個の哲學者として數へられつゝあつたことも亦事實である。ロジアーズの「千八百年來の英米哲學」がホップハウスを實在論 Realism の哲學者として、ホジスン、サンタヤナと一緒にして叙述して居るなどはその例である。實際ホップハウスの初期の著述なる「知識の理論」The Theory of Knowledge, 1896 「心の進化」

Mind in Evolution, 1901 などは云ふ迄もなく、「自由主義」Liberalism, 1912 「發達と目的」Development and Purpose, 1913 等は皆哲學上の文獻である此方面に於ける氏の特色は、進化論を批判してそれが決して放任政策を必然的の結論とせぬといふ點、自由の本質を論攷して其種類の分類に成功せる點、及び經濟政治社會各方面に亘つて民本主義を擁護せんとする點などである。かゝる傾向について、氏を新自由主義 New Liberalism の學派に數へる者がある (ベーンズ⁽¹⁾) などはそれである。

ホップハウスを社會學者として認め來つた人々も、之迄多くは氏をエステルマルクの如き社會人類學者、或は社會史研究家として認め來つたに過ぎなかつた。一例をあぐるならばプリストル⁽²⁾の如き、氏を人類學的社會學者としてサムナー、ポアス等に伍せしめて居る。此方面に於ても、ホップハウスはさきに掲げた「道德の進化」以外に、「初等民族の物質文化と社會制度」The Material Culture and Social Institutions of the Simpler Peoples, 1915 (この著述はギンスバーク、ホイラー等氏の門下生との共著である) の著作がある。此研究に於てホップハウスは和蘭派社會人類學者 (スタインメッツ、ニボーア氏等) と同様に進化段階の考察を行ひ、未開社會の文物制度の研究を試みて居る。そしてホップハウスの此研究は、獨逸に於けるミュラーリヤーの文化發展の段階

的研究 Phæsiologie^(*) の社會學に接近せるものである。

三三四

然るにホップハウスの哲學と人類學の兩方面に於ける夫々異なる研究は、畢竟氏の畢生の目的たる人間社會生活の研究に對して、準備的研究に過ぎぬことが明にされ來つた。氏は哲學的心理學的研究によつて精神を支配する法則を明にし、一方人類學の歴史的研究によつて社會を支配する法則を捉へ、此等異なる二種の法則は其原理に於て全く同一のものなるを理解することから、こゝに人生及び社會に關する或る綜合的見解に到達したのであつた。

社會的事實の研究が、如何に他の自然的事實や心理的事實の研究と關係せしめられて、社會の綜合的觀念を築くに至つたのであらうか。ホップハウスにあつては、精神及び社會をば進化的に考察することによつてこれが成立つ。元來氏に於て社會の實在的研究は、社會の通有的要素の研究と社會を發達的に in its development (發達とは内在的諸要素の展開を意味する) 見ることによつて成るのである。然るに今社會を發達的に見ることによつて、社會の發達が倫理的原則に一致することを知り、精神の規範的發動に協合するものなることを明にするのである。かくして氏が人生社會の根本原理として提出するものは調和の原理であつて、氏によれば調和といふ原理は社會の理解上缺くべからざる原則となるのである。

ホップハウスの研究は社會學を標榜するとしても、著しく普遍哲學的色彩に富むことは蔽ふべくも無い。實に氏は調和の學理を以て單に人生社會を理解するに止らず、宇宙までをこの學理で説明し盡さんとする抱負を有する。此特色ある傾向についていふ時、氏の學説は遙にプラトリーの調和哲學の新らしい展開とも見らるゝであらう。いづれにしてもホップハウスの社會學は、英國に於てスペンサーの社會學以來の一大體系たるは疑なき事である。若し廣く社會學界に於ける氏の學史的地位について語るならば、コント、ミル、スペンサー、ゾード等からホップハウスへ至る連絡を辿る必要があるであらう。特に氏がゾードの影響を強く受けたことは左に引用する氏自身の告白から充分に之を窺ふことを得やう。

私の、心の進化に關する一般概念は、今から十四五年前、當時大に行はれたコント、ミル、スペンサー等に對する批判論に親炙するに至つて作られたものである。此概念は爾來新しい事實や、他の學者の進んだ心理的分析に會ふて始終變化はされながらも、私の心の裡に存続せしものである。私の概念に最も類似せる進化の概観は、千八百九十八年に公にされたレスター・チャード博士の「社會學概論」に見出し得ると思ふ(註)。

要するに氏の社會學はコント、スペンサー流の哲學的社會學の類型に屬するのであつて、それはホッ

フハウスが此兩先輩の如く社會進化を重視する點に於て顯はれ知ることを得るのである。

さて右に述べたる如き重要なホップハウスの社會學の全體系は、今や「社會學原理」Principles of Sociology として吾人の前に完成されて提出されて居る。それは、主に千九百十八年以後に發表された次の諸卷から成立つものである。

1. The Metaphysical Theory of the State, 1918.
2. The Rational Good, 1921.
3. The Elements of Social Justice, 1922.
4. The Social Development, 1924.

右の四卷の内第一の「國家の形而上學的學理」は個人と社會との關係の問題を取扱ひ、第二の「公理的善」は人間行爲の目的について論じ、第三の「社會的公正の諸要素」は公理的善の社會的適用を説き、第四の「社會的發達」は社會の實勢とその裡に目的行爲が如何に實現され行くかを述べる。此等の諸卷は集りて一つの體系を作るものではあるが、又各卷別々にしても理解し得らるゝやうに執筆されてある。但し充分の理解の爲めには、之を全部に亘つて熟讀する必要があることは云ふ迄もない事柄である。ホップハウスの此四卷から成る「社會學原理」は、頁數のみから云ふも歐洲大戰後歐

米諸國にて完成された社會學概論の内、パレトの「一般社會學概論」三卷(二千六百十二頁)に次げるものであり、社會學既住の文獻に溯つていふも第十位以下のものではないと思はれる。

然るに、右四卷の内最初の「國家の形而上學的學理」は必しもホップハウスの社會學體系の必須なる一要素では無ないのである。氏も亦屢々自己の「社會學原理」が、之を除いた三卷から成り立つことをいふのである。斯様な事情もあり、私は氏の社會學說の紹介の爲めに第二卷以下の三卷の内容について記し、第一卷を省くこととした。而して理論の順序からして、矢張り第二の著述に於て論ぜられる合理的善から述べるのを適當であると信する者である。

- (1) E. K. Rogers, English and american philosophy since 1800, A critical survey, New York 1922.
- (2) H. E. Barnes, Some typical contributions of English sociology to political theory, L. T. Hobhouse, American Journal of Sociology, January 1922.
- (3) L. M. Bristol, Social adaptation, Cambridge in U. S. A. 1915.
- (4) F. Müller-Lyer, Phasen der Kultur, München 1915; Die Familie, München 1911; etc.
- (5) Hobhouse, Mind in evolution, 2. ed. London 1919, Preface p. VI.
- (6) Vilfredo Pareto, Trattato di sociologia generale, 2. Ed. Firenze 1923.

合理的善 The Rational Good: A Study in the Logic of Practice, Chap. VIII + pp. 165,
London 1921.

ホップハウスが合理的善事といふ問題について述べる内容は、氏が以前その著述「道德の進化」の中に觸れたことのある倫理的原理を、更に發展させて成つたものである。本書の問題は吾人が善と見做し、或は正義とするのは如何なる事柄であるかと云ふことであつて、今氏は之を深く心理的に考察するのである。換言すれば善、the good の本質を、吾人の心理生活の経験中に求めやうとする企であつて、此企圖によつて氏は善(或は公正)の何物なるかを經驗的に明にすることから、吾人の行爲の標準を全然實證的基礎の上に築かんと試みるのである。

一般の見解に従へば、價值或は當爲の世界と實在或は眞理の世界とは、之を全然分離して考察すべきものであらう。併し乍らホップハウスの疑問は此處に存する。吾人は果して或る行爲の目的が現實に吾人を満足せしめ、之に反して他の目的が實在的に空虚な幻影なることを發見せぬであらうか。甲と乙が何物かについて衝突せる場合を假定せよ。此場合甲の行爲は甲自身の思惟するが如く

善なるものであらうか、或は又乙が之を非難するが如く悪しきものであらうか。此二人が夫々我を執つて下らずとせば、彼等之間に或る客觀的の善の標準からの裁きは絶望なるものであらうか。然るに實際について見るに、善には常にある現實性が存在する、合理性が附帶するのである。そして此實在性や合理性に照して空虚なる目的を棄て、相争ふ甲乙を共に屈服するに足る公正なる見解が成立ち得るのである。畢竟するに吾人の善惡の判断には眞偽を決定するに似た所の、實踐的理性が存在することを認めなくてはならない。

然るに人間を非合理的な感情の動物として説くことが、一派の社會心理學者が好んで採用する獨斷である。彼等の説く所によれば、人は或る理由乃至目的によつて行爲するのでは無く、單に衝動感情によつて支配され、個人の行爲といはず、社會の風習といはず、倫理的原理といはず皆衝動感情に基づくと見る。併し乍ら此見解は反つて事實を誤れるものである。此誤解は理性に關する根本的誤解に起因するのである。すなはち知識の側面に於て理性を経験から分離し、行爲の側面に於て之を感情から分離する誤謬に由來するのである。吾人は比較心理學の知識を藉り來ることによつて、思想と感情とが斯様に分離し得ることを知るのである。

抑々教智なるものは衝動界から淵源し、其最初の機能は衝動の方向を決定し、豫定の目的に對し

て適當なる形態を附與するものである。かうして衝動は一定の目的觀念を知らしめられ、こゝに企圖 Purpose となる。企圖なるものは、少くとも合理的行爲の初步なるものである。要するに、知識は衝動に何物をも附加せぬとしても、衝動の遂行に對して實質的效果を及ぼすのである。そしてこの効果は、究局に於て衝動其者をも變化し得ると信ずることが出来る(9)。

かくして意志の素材は衝動感情の混沌たる一團以外のものでは無い。然し此一團は個々の要素の力が夫々獨立に働らく一團としてではなく、結果を明に認知し人生を包括的に見ることと組織されたものである。其初め感情や衝動や欲望を生んだ意欲的組織から、新らしいより精密な行爲の機關が成り立てるものである。それ故に或る意味で、意志を意的要素の綜合なりと云ひ得るであらう。と同時に、意志を合理的のものとも名づけ得る筈である(10)。

然らば如何にして、實踐的理性の命ずる善を實證し、合理的善を捉へ得るであらうか。

抑々吾人は善と考ふる時、單に善事を銜ふ場合の外は、必らず之を求め且之を保全せんと念ずるものである。若しある目的が純粹に善であると認められた時には、吾人は少くとも此目的へのある感情を持つことが事實である。價值判断を行ふ心には、價值ありといふ断定と之に向つて行爲せんとする實踐的態度の二様の行爲を含むものである。「善である」といふ判断は本來一つの断定である

が、然し之は單純な断定以上のものである。それは同時に實踐的態度、或は實踐的傾向の表明たるべきものである(11)。

「善である」といふ判断に附隨する此實踐的態度、或は傾向は目的へのある感情である。然るに一般に吾人の心理生活に於て、不完全な衝動は常に快の經驗 Pleasurable Experience によつて確かにされ、よくその最初の状態を持続するのであるから、「これは善である」といふ判断に於ても、吾人の實踐的態度を可能ならしむるものは、實に快の感情なることを知るのである(12)。

然るに快の感情とは、果して如何なるものであらうか。その最も單純なる場合についていふと、努力と其結果とが調和せる時此調和に宿る感情は快の調子であつて、此快の調子は進んで満足といふ程度にまで進み得るものである。然らば調和とは果して如何なるものであらうか。これは最後の分析に於ては、相互的支持 Mutual Support の一形態であつて、一般的にいふならば一全體内の諸部分の關係で、全體に於いて諸部分が維持され相互に助成さるゝといふ状態に外ならないのである(13)。

かく述べ来れば、善とは感情上快感に基づくものと考へ得られやう。そしてこゝに快樂説への途が開かるゝであらう。が然し注意すべきは次の點である。吾人は一度或る事實に就て快を感じても

次の瞬間に於ては之に満足せず、より廣き經驗から此判断を訂正するのである。すなはち初めの判断と吾人の感情とはこゝに分離されてしまふ。それと同時に、より成熟した判断が、別に固有の感情を伴ふて現はれ來り、吾人の行爲をば變化せしむるのである。善とは此域に達せる行爲を支持する快感に基づくといふを至當とする。行爲と感情とはかくして單に一致するを原則とするのであるが、行爲と感情との此不可離の關係について、善とは感情と行爲との間の調和であると定義することが出来る。さて吾人は或る場合に快感を感じるを反つて不快とし、又反對に不快を感じるを快とすることがある。それ故、一般に善とは（感情を含む）經驗の一要素が感情と調和せるものといはなくてはならない。

善とは經驗と感情との調和であるとすれば、次に合理的善とは果して如何なるものであらうか。凡そ合理的といふことには、三つの要件が存在するのを考へねばならぬ。第一は自家撞着せぬこと、第二にそれが確乎たる根據を持つこと、第三に或る個人の主觀のみに頼らず、客觀的のものでなければならぬこと等である。

然るに、第一の自家撞着せぬことの爲めには、或る一部の主張と他の部分の主張とがよく脈絡を保たなくてはならぬ。諸部分が充分調和して居なくてはならないのである。第二にそれが確乎たる

根據があるが爲めには、此主張の外部に對する關聯に於ても、調和が成り立たなくてはならぬ。既に明にされた事實、誤謬なき事實に關聯せしめられねばならない。かく考ふる時、或事柄が合理的たるが爲めには、一般に關聯的調和なるものが如何に大切なるかを知り得るのである。まことに第三の客觀的たるべき要件の如きも、主觀をば他の主觀に關聯させることによつて、始めて意義があらうといふものである。それ故に眞實或は眞理の基礎なるものは、畢竟相關結合、Interconnectionに外ならないといへる。合理的善は相關結合を普遍的に適用することに存するのである。

かくて合理的善は、一般に合理的たるものゝ要件から、先づ消極的に自家撞着せぬことを要するであらう。次に積極的に或る根據を持たねばならず、而して此根據たるや普遍的の根據でなければならぬ。故に合理的善の要件たる普遍的根據も亦相關結合の外に出でないのである。たゞ此場合の相關結合は、判断の思维的眞理と共に企圖の實踐的運用をも包含することが其特徴である。合理的善は行爲に於ても、又理論的叙述に於ても、結合的全體を形成し、此全體の内に何れの部分も孤立せず、究局に於て何れの要素も他の要素を含蓄しなくてはならないのである。

然るに此要件は、（一）感情と感情との調和を前提する。合理的なるが爲めには善の判断に表明された總ての感情は、感情的一調和體の裡の要素として存在せねばならぬ。しかも前述の如く、善は

一般に経験と感情との調和である故に、又(二)此感情的一調和體と總ての経験との調和をば豫定するのである(18)。

次に合理的なることに必要な第三の要件、客觀的たるべきことに就ていへば、之は客觀的實在の事實を理解する妨となる主觀的特殊要素を除去することを要求するのであつて、之が爲めには、吾人の知識内部の誤謬分子を遠ざくる所の作業が行はなくてはならぬのである。そして合理的善は感覺的存在世界に對して、常に偏頗なく適用され、矛盾を深き統一を以て調和すべきものであり、其結果此世界を企圖的一體系に包括するにあるのである(19)。

右の一大體系はこゝに二重の調和を含むであらう。先づ心が夫れ自體と調和すること、次に心が世界と調和することはである。この孰れの方面に於ても、心は共に善に向つて進む筈である。かくして實踐的理性は心が夫れ自體と調和し、且心が自然との調和に向ふ努力であると云ひ得るであらう(20)。

多くの個人内心の衝動が並存し、彼等が互に讓歩し調和する時、こゝに人格の初歩なるものが生れる。衝動を鑄直し變形することにより、調和の原理は生命の多面的發達と充實とを致すのである。發達とは進歩的充實である。若し個人に行動的統一性あり、行爲と経験との常住的相互關係によつ

て、各人の行動生活に個性を與ふるものあらば、これ人格である。個人に於ける調和の發達は人格の發達に外ならない。而して是は實に個人内部に於ける合理的善の實現せられしものである。この人格より眺むる時、刻々の衝動と経験とは、此人格を基礎として調和され行くのを見出すであらう(21)。

見來れば生命の現象に於て、發達は單に手段であつて、調和こそ眞の目的である。社會に於ける合理的善も亦社會心ともいふべき、雜多なる多數の心の中に調和を求むることに歸着するであらう(22)。

ホップハウスの合理的善なるものは決して實在を超越した道德的命令では無い。道德上の善なるものが、多くは何等經驗に立脚せぬ純理想的示命なるに比して、ホップハウスの合理善なるものは、吾人の心的諸要素の現實の傾向を肯定し且之に立脚せるものである。合理的善は外部から與へられるものでは無くて、いはゞ吾人の心意から生み出さるゝものである。従つて根本に於て氏は自然主義に據るものと認めねばならぬ。

次にホップハウスは倫理學上の絶對説と快樂説とを巧に採長補短するに成功して居る。氏は最後の章(23)でミルの功利主義に對する自説の類似と差異とを述べ、同時にグリーンンの理想主義に對して

も自説の立場を明にして居る。今此等の點に立ち入らないが、一般的にいふならば、ミルは善の情感的方面に捉はれ、グリーンは善の經驗的方面にのみ躊躇するものと認めるにある。

最後にホッブハウスに於ける實踐理性の理想は總てを包含する調和であるが、吾人の經驗は無限であり、それは吾人の感覺的能力と共に常に流轉 Becoming の状態に在るであらう。して見れば求められる所の究局の調和は、事實上實現さるゝ日がないのである。理性の無限の作業あるのみである。此意味に於てホッブハウスの倫理的原理は、著しく動的であると評すべきであらう。

- (7) The rational good, pp. 16—17.
 (8) *ibid.* pp. 19—30.
 (9) *ibid.* pp. 30—34.
 (10) *ibid.* pp. 43—51.
 (11) *ibid.* pp. 65—67.
 (12) *ibid.* pp. 71—72.
 (13) *ibid.* p. 69.
 (14) *ibid.* pp. 72—75.
 (15) *ibid.* p. 56.

- (16) *ibid.* pp. 56—64.
 (17) *ibid.* pp. 73—79.
 (18) *ibid.* p. 79.
 (19) *ibid.* pp. 79—80.
 (20) *ibid.* pp. 80—81.
 (21) *ibid.* pp. 102—110.
 (22) *ibid.* pp. 110, 111 etc.
 (23) *ibid.* Chap. VIII. Implications.

三

社會的公正の諸要素 The Elements of Social Justice, chap. XI+pp. 208, London 1922.

「合理的善」といふホッブハウスの倫理的原則の社會的適用を説けるものは、此第二の著述である。合理的善に関する論述は此著述の第一章(倫理と社會哲學)⁽²⁴⁾に於て、その要點を再び繰り返されてある。而して「社會的公正」の問題は、全く合理的善の演繹的研究として取扱はれて居るのである。その説く所は権利と義務 自由 平等 公正 財産制 經濟組織 民主政治等の項目に分つて窺ふ

ことを適當であると信ずる。

權利と義務。自然法の主張は人を生來自由にして平等なるものといふ。然し權利なるものが如何なるものありとしても、それは一面に於て負擔 *Obligation* たるべきものである。といふのは權利は要求の或る一種であつて此意味に於て、之を要求するゝ受身の側から見る時は、一つの責任である。だからである。義務なるものを其主體の側から云ふ場合これと齊しい。而してこゝに注意すべき點は、權利も義務も共に社會的安寧に先だつ條件では無いといふことである。彼等は社會的安寧の要素であつて、社會的安寧といふことから其權威を取得するのである。さて社會的安寧とは何であらうか。吾人はこれを直ちに調和的生活と目する者であるから、權利も義務も、畢竟吾人の調和的生活の條件に外ならぬものと云ひ得るのである。一般的にいふ時眞の權利は有権者の眞の安寧——それは調和の原理にあつては、社會公共の安寧の要素的部分であるが——この要素或は條件たるものである。

個人に就て權利を認める外、社會制度に就て同様に權利を認めることを得やう。宗教も愛國心も教育も彼等が公共の善 *The Common Good* (これは個人的善の總計ではない。又個人的善と別種な善でもない。個人的善を要素として成る調和に外ならぬ) に貢獻する限り、彼等が當然營むべき

機能を持ち、社會に對して彼等の機能が最もよく完成される様な或る要求をなし得る筈である。かくの如く考ふるならば、權利義務は外部から公共の善を規定する所の條件では無く、生活の變化中に於て又錯綜せる人々の關係に於て、公共の善を構成して行くその條件たることを悟るのである。

自由。ルソーは人は生れつき自由であると云ふが、事實上人は到る處に束縛を被りつゝあるのである。普通に人が自由といふは、外部的拘束を破棄せる状態である。外部からの束縛のない時「自由である」と稱せられるであらう。従つて自由とは内在的要素によつて決定されるゝことであり、外部的強制の存在せぬ状態である。然りとすればこゝに内心の調和が存する程度に應じて、個人の自由があるといふを得る筈である。蓋し調和の状態にあつては、各の要素は連續的行爲に寄與して個人の利益に貢獻し、此貢獻の程度に應じて人は自發的に行爲し束縛をば受けぬからである。

抑壓は調和の反對である。抑壓と雖も一つの必要な機能ではあるが、眞の調和は基礎的衝動をば、その粗野なる表現に於ては假に之を抑壓するとしても、生活の持續的要求によく順應し、此内に満足を見出す微妙なる過程から招致されるのである。此状態に於て、自己の積極的統一體たる意志は決して逆らはるゝこと無く、むしろ此過程によつて其力を強うされ、活動範圍を廣くするのである。

そして此生活は内面的に見れば、自由に外ならぬのである(29)。

以上の個人内部の自由の觀念は、社會的自由といふことに對して、直ちに適用し得るであらう。其内部の個人が密接なる相互作用を行ひつゝある集合的全體としての共同生活體 Community に於て、若し其本質が絶對的に調和的なる場合には、之を絶對的に自由であると謂ひ得るのである。自由は總ての人に對して、其承認された權利を尊重せねばならぬ。而して通常の場合各の權利が自由である以上、此制限は決して自由の制限として自由によつて逆らはれるものではあり得ないのである(30)。

權利による自由制限について注意すべき事柄は、共同生活體も全體として權利あり、従つて個人の自由を制限し得るといふことである。斯様にして自由は個人の發達と社會の發達とに論なく、必要缺くべからざる要素たることを知るであらう(31)。

總ての精神的發達の基礎に自由は存する故に、人は合理的自決の基礎として自由を必要とするのである。社會にありて自由は自制による人格の増進と、精神的交通による社會的知慧の増進の二様の形式を採るのである。社會理想としての自由は此發達に對する活動範圍である。組織的の社會にて、自由は自由たると同時にその制限たる所の權利の一團を設定することによつて可能とされる。

各の權利は其仕ふる公共の安寧の或る要素から規定される(精神的發達の要求の如きは其必須なる一部分である)。さて權利がかくの如く規定される以上、或る權利に對して、それに強制的或は詐偽的侵害が無き限り、何等の束縛を附するを得ないのである。教導 Tutorage の如きも、自己發表や思想の交換等に關する基礎的權利が、甚だしく損はれぬことを條件としてのみ許される(32)。

平等 自由が天賦でないと同様に、天賦の平等は存在しない。吾人は先づ權利の平等を認めるのであるが、それも或る根本的權利に就て平等を主張する迄である。例へば或る特殊な關係を享受し之に参加する權利等に就てある(33)。次に吾人は各人の功過 Desert と各人の必要に對して平等の承認を與へなければならぬ。その表示は次の如くである(34)。

- 一、人々の要求と満足との間に平等を計る。而して
- 二、要求は必要又は功過に基づくものとし、
- 三、功過は努力又は仕事高によつて測定する。

以上は根本の原則であるが、人として特殊の關係に在る者が存在するのであるから更に、

四、(A) 當事者相互が平等の要求をなし得べきこと、

(B) 萬人に對して、かゝる特殊の關係に立ち入り得る機會の均等を計ること、

が必要である。

公正。アリストールは、公正 Justice は平等の一形式であると道破したのであつた。そこで今既述の平等を公正といふ見地から、左の如くに説明することが出来る。

法律上の公正。とは基礎的規定をば、普遍的に偏頗なく適用するにある。換言すれば公共の善に基礎を置いた所の法規を、少しも偏頗なく適用するにあるのである(35)。

分配上の公正。次に必要に基づく分配といふ原則を、平等の一原則として認める必要がある。但しそれは必要な機能が適當に持續され、運轉せらるゝことを條件とするのである。又他の方面の發達を妨害するやうな、部分的發達を刺戟するものでは不可である。調和的發達許りが承認さるべきである。従つて公正とは本質上公共の善に立脚して居るものである。故に平等の分配によつて第一禍は減少され、善が増進されなければならず、第二、生活必需品の缺乏した場合に當つては、贅澤品は淘汰を受けねばならない(36)。

應報の公正。Retributive Justice 個人的功過の取扱は畢竟責任論となるのであるが、責任が積極的生活に於て本質的機能を營みつゝあることは明である。従つて個人に償せるもの(例へば肉體的勢力の消耗)だけを個人に支拂ふ意味で、機能の維持に充分なるだけの報酬を與ふるの理も明で

あらう。一方懲罰について云へば、苦痛其他の禍を個人に課するのは倫理的必要ではないが、苦痛が犯人をして其の爲せる所を銘記せしむる程度のものなる場合は、倫理的秩序の回復に貢獻するものである(37)。

交換上の公正。若し價格が公正に決定されたとすれば、同類の市場價值間の交換は公正であるといはざるを得ぬ。然るに公正に價格が決定さるゝには、(一)一般經濟をば、緊急の程度に應じて吾人の必要を充足するやうに仕向け、(二)何等の職分なく富を獲得することを禁じ、(三)産業組織上に要求される總ての勞働に對して、勞働者の市民としての能率を維持するに適した條件で報ゆること、(四)總ての過剰の犠牲に對して、相應の報酬を増額することが必要となる(38)。

併し乍ら右の報酬に於て努力の外に、平均以上の仕事高を如何に取扱ふべきかは、最も困難なる一問題たるを免れないであらう。然るに此難問に對して一道の光明を投ずるものは、「生産者は生産の全額を取得する権利がある。従つて交換制度に於ても其全價值を取得する権利がある」といふ學說である。たゞ此說を採るに當つて、社會の如何なる方面の仕事も、同じ様に、有能者を惹きつくるやうにされなくてはなるまい。かゝる基礎の上に於てならば、經濟が自由交換制を採用することは恐らく公正なることであらう(39)。

財[○]産[○]制[○] 私有財産の弊害は必しも財産一般の特質と見る譯には行かない。財産は自由の基礎であり、又力の土臺である。それは一面に於て自由、他の一面に於て力となる。そこで財産の分布は個人に自由を與へ、共同生活體に力を保障するやうにありたきものである。吾人は共同生活體が大なる財産を取得することが當然であると考へる。その理由とする所は、第一、それが適當な機能を營む必要上から、第二、個人も他の團體も主張する権利なき種類の財産は、消極的に社會のみが所有する権利を有するからである(40)。

社會の存在するが爲に成り立つ富は、社會の有に歸すべきである。土地の自然的増價の如きはその例である。又天然(土地)や、祖先の働らきによつて成れる財産も、之を適當に要求し得る者は他に存在せざる關係上、社會の所有に移すべきである(但し富者の子弟の必要には、その生前に於ける贈與を許して)。而して個人の収益は、飽まで個人の私有財産として認め得るのである(41)。

個人的欲望を充足する爲めの生産は、人格の増進に役立ち、毫も他人に損失を及ぼさざることを條件として許容さるべく、生産品は單に富たるのみに止らず、社會の富 Social Wealth たるべきものである。富の取得が公共の利益をなさざるか、或は反社會的のものなる時は、之に重く課税するを至當とするのである(42)。

産[○]業[○]組[○]織[○] 新らしい産業組織は以上の公正の觀念を、法律及び行政權を以て實現するにある。社會的産業管理は産業の種類と經營の能率に應じて、消費者と生産者 自治團體 産業組合 或は私人の手に委ねらるべきである。ギルド社會主義の主張の如く、消費者の利益を思はざる純生産組合の團體に産業管理を一任するが如きは無謀の企であらう(43)。

民[○]主[○]政[○]治[○] 多數決政治は止むを得ざる惡であるかも知れない。併し乍ら之は同質の人々から成り立つ社會に於ては全く許さるべき事柄である。蓋し此社會では、何人も交互に多數派に参加し得るを以て、終始少數派に屬する者は存在しないからである。此事は直ちに民主政治が、自由平等の原理の外に、なほ別に綜合的原理として、吾人がコミュニテイ(共同生活體)と呼ぶ所のものを必要とすることを示して居る。換言すれば、民主政治に於ては、多數派は少數派の要求を満足させることを常に心から望んで居なくてはならぬ。多數派の目的は「勝利」に非ずして、「綜合」たるべきものであらう。然るに此間の消息は所謂主權論によつて、屢々誤解されて居るのである(44)。

今や眞の共同生活體は國家の領域を超越した人類がそれであり、眞の民主政治は、此廣い世界全般に亘つて行はなければならない。機能的社會說 The Functional Theory of Society は既に之を豫想して成ると見られるのである(45)。

- (24) The elements, pp.13—27.
- (25) *ibid.* pp. 31—41.
- (26) *ibid.* p. 41.
- (27) *ibid.* p. 43.
- (28) *ibid.* pp. 46—51.
- (29) *ibid.* p. 51.
- (30) *ibid.* pp. 58—62.
- (31) *ibid.* pp. 41, 62—70.
- (32) *ibid.* pp. 71—87.
- (33) *ibid.* pp. 94—97.
- (34) *ibid.* pp. 100—101.
- (35) *ibid.* pp. 104—105.
- (36) *ibid.* pp. 110—119.
- (37) *ibid.* pp. 121—127.
- (38) *ibid.* pp. 130—139.
- (39) *ibid.* pp. 139—149.

- (40) *ibid.* pp. 150—162.
- (41) *ibid.* pp. 162—166.
- (42) *ibid.* pp. 166—171.
- (43) *ibid.* pp. 176—184.
- (44) *ibid.* pp. 185—198.
- (45) *ibid.* pp. 198—206.

目

社會發展論 Social Development, its Nature and Conditions, chap. XIX + pp. 348, London
1924.

ホップハウスは此第三の著書で、始めて社會の實在的研究を試みる。而してそれは社會の通有的要素の研究と、社會の發達の研究から成り立つて居る。社會の通有的要素の研究は、コントの社會靜學に照應し、之に反して社會の發達の研究はその社會動學に照應すべきものである。そしてコントに於て既に然りしやうに、ホップハウスも亦主力をば社會の發達の研究に用ゐるのである。

ホップハウスによれば、社會の歷程は一見何等の秩序を有せぬやうであるが、この混沌たる過程に
學說——ホップハウスの社會學說

も大體上より、發達の段階を區別し得るのである。先づ社會の進化は一方に於いて知識の進歩を認め、他の方面に於て共同生活體の増大と、社會的能率の増加、及び個人の自由の増進を認められるであらう。たゞ此等の諸要素は夫々獨立しては、何等社會發達の標準とならず、共同生活體は(1)規模、(2)活力、(3)個人の自由、(4)相互的作業の進歩等の諸事實の協合によつて發達がある。換言すれば社會の發達は、(一)社會生活の規模の増大と、(二)能率の増進とを條件とする人間能力の調和的實現である。然るに勢力、組織、活力の調和は一般の「發達」其者の特性であることを見れば、社會の發達の如きも亦、宇宙生活體の發達の一例に過ぎぬものである(46)。

社會の發達を以上の如く考ふるならば、社會的發達は社會生活を拘束するやうな要素の上に築かるゝに非ずして、寧ろ人々相互の必要に應ずる協力的要素の上に存するものなることを明にする。かく觀する時はまた、社會的發達が嚮に述べし合理的善の具體的要求に全然合致するものであることを悟るのである。蓋し合理的善は吾人の衝動から出發し、しかも盲目的矛盾の衝動を棄て去り、協和し得べき全體を形成し得るやうな衝動の種類のみを採用するが故である。それ故社會の發達も倫理的發達も、究局に於ては一つであると云ひ得るのである(47)。

かくの如き社會的發達を規定する主なる四種類の條件がこゝに存する。此四種類とは、(一)環境的條件、(二)生物的條件、(三)心理的條件、(四)社會的條件等である(48)。ホップハウスの叙述に於ける特色のある部分だけを、左に觸れて見たいと思ふ。

環境的條件 これは政治的地理學乃至一般地理學の問題であるが、在來の研究に於ては、社會に對する地理的環境の影響が過大に見積られて居る。例へば天産物の豊富なることは、確かに産業を盛んにする可能性を有するであらう。併し乍ら之は飽まで可能性たるに止り、之を利用すると否とは、一に社會の能力如何に繋つて居る。外面的の豊饒などは反つて人々が積極的に自然を利用することを怠らしめ、新しき發明の發達を妨ぐるのである。殊に肥沃な地方は異民族の侵略を受け易い危険さへも具ふるのである(49)。

生物的條件 生存競争を以て社會の發達を説いたのは、生物進化論が旺盛を極めた當時のことである。生存競争説の難點は、生物界の原理からして生物現象とは異り、むしろそれ以上の事實たる社會現象を如何にして説明し得るやといふことである。又此説では適者殘存といふことを説くのであるが、此適者とは一定の環境に對する適者の意味に過ぎぬ。社會的環境は公正と人道の觀念を主調となせる故に、社會に於て生物的生存競争に於ける不適者は必しも死滅せず、彼等をも之を要素として社會の發達は成り立つのである。かくして、社會に對する生物的生存競争説は採るに足りな

い議論である(51)。

團體と團體との間に軋轢あり、こゝに團體的適者が残存するといふ説があるが、之も亦信じられない。歴史を繕くに、社會生活は共同生活體の増大によつて進歩せるものである。或る團體が他の團體を倒して發達せるのでは無い。此等の諸團體が合同併合して大をなせるものであり、進歩した社會では敵對團體の對立、或は軍國的統治は廢止され、其代りに有機的共同的社會の成立を見たのである(51)。

優生學的人種改良策について一言すれば、「人種を改良すれば社會は改良される」といふのが先づ誤りである。人種はいつの世にも略同一であるが、社會には興亡があるでは無いか。殊に未だ不完全なる遺傳の學理に基づいて、潜在的優良性を等閑に附しつゝ、人間性狀の淘汰を行ふのは自由の原則に反するであらう。産兒制限についても、之を悲しむよりはむしろ其根本原因をなす社會制度の改善を期すべきである(52)。

心理的條件 衝動感情は行爲の源泉であるが、此兩者に共通して存在する要素は、利害關係 Instinctive である。インテレストは其認識的側面、即ち目的物に對する注意と認知とを包含し、なほ衝動感情を指導するものである。内在的インテレストで無目的のものは之を本能と呼ぶ。今、社會的發

達に必要な數個の根本インテレストを數へることが出来る。社會的インテレスト 反社會的インテレスト 建設的インテレスト 認識的インテレスト等である(53)。

吾人は個人と社會との間に次の二つの線による聯絡を認める。第一、個人には同情心なるものがあり、これは愛着と友誼とを伴つて、各個相互に助成し相互に制限し合ふ。第二、個人的企圖はやがて集合的功業に朝宗する。この二つの線に沿ふて、個人は社會に連絡され、終には人類全體に結合さるゝに至るのである(54)。

純社會的條件(心の相互作用) 群集心理學者の或者の如くに、社會心を個人心に齊しき存在物であるとは見做すことは出来ない。但し一委員會を假定し、其委員が熟議の結果その多數の者に一致せる意見が成立つとすれば、之は其固定性に於て、又非合理的な點についても、個人の意志に類似せるものであると謂ひうる。たゞ此場合に於ても委員會の「意志」なるものは、各委員個人の意志以外のものではあり得ないのである。個々の委員の意志が相互に交渉し、變形し、結合せるものに過ぎぬ。マクドウガルは此種委員會の意志は、心的要素の組織たる點に於て、個人心と同様であり、之と變ることなき實在性を持つと云ふも、此考は誤りである。何となれば社會は個人のやうな統一體ではない、社會に於ては常に複數が要件たる故である(55)。

委員會の如き小團體より遂に大なる共同生活體に於ても、個人は意識せざる社會的協力を營み、共同生活體の諸部分は相互に關係し、調和的に運轉する一組織を形成するのである。而して其本質的要素が心なる以上、之を心的組織と呼ぶを得るであらう。かくして或る團體に於ては、或る種の思想が行はれ、又或る固有の流儀が採用され、或る心的特性が廣く行はれ、又或る判断形式が流行する譯である。此現象の總てに就て、集團的心性、Group Mentality; Social Mentality の名稱を與ふる(58)。

委員會の如き小社會の心性は、さきに云へる通り、社會心(集團心 Group Mind)と云ふやうな衆心の組織であるが、大社會の心性は之を組織といはんよりも、寧ろ衆心の網 A network of minds といふべきである。而して意志とは目的の熟慮的、自覺的、組織的追求であるから、大社會に於ける衆心の網たる社會心性を、意志と見ることが得ないやうである(59)。

それにも拘はらず、共同生活體等の場合に於ても、(一)人々の活動の組織化(間接的、無意識的、遍在的社會統制)と、慣習法律の直接的統制、(二)個人心の裡に社會的要素(協同性)あること、(三)共通的性格が個人に存在する事實ある故に、程度の差こそあれ、マクドウガルの所謂集團心といふ現象は現はれるのである。そして其結果、或る機會に於て、例へば戰捷の折などに、集合意志の發

露を見ることがあり、又進んで眞に恒存的な集合意志の成立も期待さるゝのである。假にその部分的なものであつても、公共生活の恒存的安寧に關係を有する種類は、之を公共的意志 Public Will と名づけて特に重視しなくてはならない(60)。

ホップハウスは次に進んで知識の發達(第十章)(61) 制度の發達(第十一章)(62) を述べて居る。此等の叙述に於て、氏は其概括的推移の跡を辿るに過ぎない。氏は初等民族に關して、人類學者の分類により低度 高度狩獵民、低度 高度牧畜民、低度 中位 高度農耕民の段階の順序に従つて知識の發達を説き、文化民族に關しては泰西歴史の展開の順序について記述して居る。この邊の叙述を評するならば、氏はコントの歴史哲學の影響を多分に受けると指摘しうるであらう。

社會制度の發達については、政治制度たる慣習 法律 社會分化の外、經濟制度や國際主義等について述べて居る。ホップハウスは原始時代に於て征服の基礎の上に社會の能率と規模の發達を見次の時代に於ては初期の形式の發達は引續いて繼續されるも、征服的事實は新に宗教的階級の興隆と、より、廣き同胞觀念によつて緩和され、又部分的制限の下にある自由の發生から緩和されると考へ、最近の時代即ち現代に於ては、世界的規模の上に自由且能率的な要素が蓄へられるに至つたと

謂ふのである。

ホップハウスによれば、制度と心性の發達との間には一般的相關關係が存するのである。それは制度の運用は一に心性に基づくが故である。しかも社會の進化は決して單純では無い。幾多の複線的進化の可能性を含むのである。又或る一方への過度の發達は他の部分の發達を妨げる。然し多くの部分的發達が互に調和して進む所の進歩の途があり得るのである。發達といふことは、潜在的に衝突する諸要素を、常により、高いレベルに於て綜合することである。社會の發達は究局の分析に於て、外部的に環境の條件に支配されつゝ、衆個人の關係の裡に於て、精神が表現されることであるといはねばならぬ。

かくの如く見來れば合理的善の示命、及び其社會的適用たる所の社會的公正の諸要素は、疑もなく社會の發達の裡に實現される可能性がある。此可能性は吾人をして社會の發達に貢獻する信念を一層鞏固なものとするであらう。吾人は人類共通の公共の善の觀念を作ることを得、此善に對して眞に有効なる協力の意志を各人に見出し、又かゝる意志は此大目的の達成に必要な條件を支配し得ることを知るのである。心の解剖も社會的關係の解明も、又認識的發達 倫理宗教的發達 社會的發達の相關關係の解釋も皆この可能なることを裏書せるのである。要するに示命と事實とがよく

協合する事實を教ゆるのであると(8)。

以上を以てホップハウスの社會の發達に関する論文は略ぼ盡きる。然しなほこれ以外、氏の研究に於いて社會の共通要素と稱せらるゝものゝ重要な部分に言及する必要があるのである。それは氏の第三の著述の第二章をなす所の「社會と共同生活體」の論述である。此方面で氏はマッキーヅァーの影響を多分に受け、或る個所などは全然マッキーヅァーに學ぶものであるが、これは必しもホップハウスの缺點と稱するを得ない。氏が心理學方面の研究に於てマクドウガル、グラハム・ローラス兩氏に聽き、又社會の段階的發達の研究(ホップハウスは社會形態學と稱して居る)に關しては人類學上の研究を應用し、更に一般哲學觀についてはコント、スペンサー、ヲード等を宗とせるを見れば、氏の包容力の偉大なるをこそ稱揚すべきであらう。

ホップハウスの社會と共同生活體に關する論述中の二三の點を看過することが出来ない。それは次の諸點である。

第一。氏は社會を本質に於て心的相互作用であると觀しつゝある。氏は之を社會的關係 *Social Relations* と名づける。次に此無形態の織維ともいふべき社會的關係の裡に於て、永續的且判明な

る關係を有する複數人即ち集團ある場合、これを社會 Society と名づくるのである(83)。之に関する二つの注意がある。

(a) 社會は本質に於て心の相互關係を要素とするを以て、結合の場合許りで無く、反對の場合をも包含する筈である。併し乍ら永續的社會に於ては、友誼的、少くとも協力的關係が主調をなし反對的要素は常に後退して居るといふこと(84)。

(b) 社會的關係許りを以て、充分なる社會の概念は成立せず、相互作用を行ひつゝある人々を包含して、始めてこれは完成される。社會的とは人と人との關係であり、人を此關係から引離し、又は關係を人から引離して抽象すべきでは無い。若し斯様にする時は、社會の適當なる意味を見出すを得ない。例へば社會の發達は相關裡に於ける人の發達であつて、決して個人の發達でも無く、又關係其者の發達でもあり得ない、といふこと(85)。

第二。共同生活體 Community とは共同規範 Common Rule の下に在る團體である。こゝに規範といふのは極めて廣い意味である。従つて必しも統治 Government のみを意味しない。共同生活體に必要なものは、或る一定の地方住民が服従する所の共同の規律である。コミュニティは一般に共同感情と共同の利害の上に基礎を有するのである。發達した共同生活體には二つの重要な機

能が存する。それは共同防衛と、かの共同規範の維持これである。共同規範の種類は慣習や法律である(86)。

大なる共同生活體の内部には、より小さき共同生活體の存在を妨げない。

第三。共同生活體全體或は其一部分の用に供せらるゝ所の、一般に認められたる要具の全體、又は其部分を制度と名づける。法律及び慣習は又この内に數へられる。然るに更に精しく云へば制度は、(一)人間の或る關係を支配する認定的慣用、(二)かゝる慣用の複合的全體と、之を支配する原理、(三)この複合體を支配する團體等を意味する。要するに制度とは、人間的關係の表示たると共に、或る特殊機能を營む爲めに結合せる複數人を意味する。此人間的方面を他の言葉で表現すれば、それは結社 Association である(87)。

第四。結社を或る特殊なる企圖の爲めに存在する團體とするだけでは充分でない。それは共同生活體の生活の一部たるものである。然るに一制度は同時に幾つもの結社を有しうる。若し或る制度が唯一つの結社を有するのみである場合、すなはち此制度が一結社の活動に過ぎざる場合には、此二つの言葉は同一體を表示せるものに過ぎないのである。制度は其抽象的側面を、之に反して結社は人間的側面をいひ表はせるものである。さて文明的共同生活體は共同規範を維持する爲めの規

律的なる諸機關を有するのであるが、其全體は國家と稱するものである。故に國家は共同生活體にあらず、國家は單に諸制度の體系なりと云ふべく、従つてその人間的側面に於て一つの結社とも見られる(8)。

故に反面から、國家をば或る目的の爲めに組織された共同生活體であるとも云へる。唯國家制度は吾人の共同生活の一部に過ぎないのである。それ故に二つのもの、範圍は正確には一致せぬ。例へば未だ民主政治に進まざる邦家に於て、國家は組織された共同生活體と一致せず其一部分である。屢々共同生活體を背景とせざる國家すら存在するのである。(9)――

右のホップハウスの所論から興味ある示唆を得ることが出来る。共同生活體は氏に於ても社會生活の包括的なる獨立的範圍である。故に既成の共同生活體について氏の叙述に基づいて次の公式を得る。

$Community = Societies + Social Relations$

此共同生活體の内部には、種々なる社會と社會的關係とあるも、前者即ち社會の内特殊の企圖或は機能あるものは、之を結社といふのである。従つて前記の公式は、

$Community = Associations + Other Societies + Social Relations$

となる。然るに大なる共同生活體の内部には、小なる共同生活體の幾つかを包含し得るといふのである。而して右公式中にて、此小共同生活體は社會の内に包含されて居る筈であるから、之を取出せば公式は、

$Community = Associations + Smaller Communities + Other Societies + Social Relations$

となる。然るに共同生活體の内に、結社や小共同生活體を控除して、なほ他に殘る社會がなほ存するであらうか。若し存在するとせば、それは特殊の企圖も機能もなき所の集團でなければならぬ。左様な集團があり得るであらうかと云ふに、吾人は先づ無形態なる群集 *Crowd* 公衆 *Public* などをあげ、次にテンニイスの所謂共同體 *Gemeinschaft* (愛着的結合の團體) を數へることが出来ると思ふ。

これに止まらず、ホップハウスのいふ社會的關係は、フイアカント等の論ずる基礎的社會關係の形式としての共同社會と利益社會を包含する筈である。此等の事實を考慮せる上、ホップハウスの見方を徹底する時には、共同生活體内部の社會的構成をよく明ならしめるに至り、マッキンヴァー、コール等英國派社會學者によつて攻究されつゝあつた社會團體の種類の問題は、ホップハウスによつて社會的關係をこめて、一步進んだ考察がなされるに至つたと謂ひうるであらう。

- (46) Social Development, pp. 31—33, 74—87.
 (47) *ibid.* pp. 87—89.
 (48) *ibid.* pp. 95—96.
 (49) *ibid.* pp. 96—104.
 (50) *ibid.* pp. 104—107.
 (51) *ibid.* pp. 107—111.
 (52) *ibid.* pp. 111—124.
 (53) *ibid.* pp. 132—134, 136, Chap. VII.
 (54) *ibid.* pp. 172—173.
 (55) *ibid.* pp. 180—181, 181 note.
 (56) *ibid.* pp. 184—186.
 (57) *ibid.* pp. 186—187.
 (58) *ibid.* pp. 187—193.
 (59) Intellectual development, pp. 217 ff.
 (60) The development of institutions. pp. 246 ff.
 (61) Chap. XII, XIV.

- (62) Society and the community, pp. 38—54.
 (63) *ibid.* pp. 38—39.
 (64) *ibid.* pp. 39—40, 85, 210.
 (65) *ibid.* p. 76.
 (66) *ibid.* pp. 41—47.
 (67) *ibid.* pp. 48—50.
 (68) *ibid.* pp. 50.
 (69) *ibid.* pp. 50—51.

五

ホップハウスの社會學の實質的内容は、之迄紹介せる通りのものである。然らばかくの如き複雑なる内容を盛れる氏の社會學の體系は、果して如何なる科學的基礎觀念の上に建設さるゝのであらうか。社會學其者に關する氏の見解は抑々如何なるものであるか。

此疑問に對して氏は、右に紹介した最終の著述で、自己の立場を明瞭ならしめて居る。氏によれば社會學は先づ二大部門から成立つのである。社會哲學 Social Philosophy と呼ぶ部門及び社會科

學、Social Science と稱する部門が是である。凡そ社會生活の核心は實に人間の企圖であり、此企圖たるや、之を自然的事實の如く因果的に理解さるべきでは無く、其の賢きか愚なるか、善なるか悪なるか、一言にして云へば其價值について解釋すべきである。併し乍ら一切に於て社會生活には必然的側面の存在することも忘るべからざる事柄である。この兩面が社會現象に存在する結果、或人は社會の研究は全然哲學の問題であると唱へ、又之に反して或る人々は社會學を全然自然科學的に樹立せんと努力する對立があらはれる。そして此二つの立場の間の論争について、左の二つの明白なる事柄を指摘しうるとして居る。

一、二つの方法は共に至當なるものである。併し乍ら吾人の見解によれば、科學と哲學とを區別するは究局の問題では無い。此二つの方法は夫々異なる側面を取扱へるものであり、共に社會の研究に必要な方法であること。

二、此二つの方法を併用することは之を許すも、此等を混同すべからざること。

要するにホップハウスは混同を避けつゝ、社會研究の異なる二方法、哲學的方法と科學的方法とを併用するのである。而して氏の社會學にありて、科學的研究即ち社會科學と稱する部門が社會の發達を取扱ひ、完全に發達した社會は人間能力の調和的實現であるといふことを明にし、次に此事

實は倫理的理想の研究たる社會哲學の部門の結論に全然一致するものなることを證明する。従つて社會哲學と社會科學とは、氏の社會學に於て二大部門として相伍する深き理由を認められるのである。

かく氏の社會學が、社會の包括的研究なることを充分に明にするであらう。社會の異なる二大側面が夫々異なる方法を以て研究されつゝも、此二つの研究は奇しくも融合するのである。そして社會哲學と名づけらるゝ部門は普通の哲學的論理學の範圍と一致するのを見逃し難い。残された社會科學の部門こそ、普通にいふ社會學の研究に當る。唯ホップハウスは此社會科學なるものを、決してフィアカントなどの如く、抽象的科學として樹立せんとはしない。嚴密なる分科的社會學の企圖とは反對に、飽まで具體的科學として社會學を建てんと試みる者である。

具體的社會科學として社會學をたつことは、物的要素生物的要素心理的要素等の綜合的事實として存在する具體的社會現象について、可能の法則を取扱ふにある。抑々此等三種の要素は夫々物理的科學生物學心理學等個々の科學によつて別々の取扱を受くるのであるが、今其綜合現象を實地的可能の事實として取扱はんとするのである。此等の諸要素中にて最も積極的なるは心理的要素であつて、之を主とし他の要素が協合して種々なる社會的產物があり得る。かゝる社會的產物を中心

として社會現象を取扱ふは一般の社會的諸科學の研究である。之に反して社會學の立場は斯様な社會的諸科學の綜合たることを理想とする(73)。それ故に社會學は時處を軸として生起する社會現象の一般的法則を論ずるものと見ねばならぬといふ(73)。

ホップハウスの社會科學に於て、時間の範疇に於て擧げられた一般法則は實に社會發達論である。而して空間の範疇に於て取扱ふべきは、社會的産物の相關論であるやうに見られるのであるが(74)、之について氏は遂に特別に論ずる所がないのである。

ホップハウスの社會學が素材として歴史その他の社會の記述的研究に頼るのは、此種の社會學の一般的傾向から頷かるゝことである(75)。それと同時に氏は社會の共通的要素を探ぐる爲め、分析法を用いるといつて居る。然し結局氏が最も力を入るゝのは比較法であつて、此比較法によつて社會形態學なるものを完成し、社會發達の核心を捉へやうとするのである(76)。

最後にホップハウスは、此等の方法によつて到達される社會學的法則が、決して自然科學の如く現象の生起を正確に豫知せしむるもので無いことを容認して居る(77)。社會研究に於て意志の自由といふことを認めなければならぬからである。かくて社會學的説明は傾向以上のことを云々し得ぬのである。如何なる科學もその對象の總ての要素を、悉皆明にすることを期し得ぬであらう。社會學

に於て明にするを得ぬは、意志の自由といふ要素である。此點から或は社會學的法則は存在し得ぬと論ずる者があり得るのであるが、此反對論は誤りである。自由意志は或事に關して之を探り、或は之を棄つるを得るのであるが、之を探り之を棄つる夫々の蓋然率(78)は共に二分の一でなくてはならぬ。若しその蓋然率が二分の一でなく、一方へだけ傾く傾向があるとすれば、それは既に社會學の法則として捉へられてある筈だからである。従つて社會學の研究に於て意志の自由は、恰もこの要素が存在せざるかの如くに見做し研究を進めて結果に變りがない。意志の自由は社會學的法則の成立を妨げないといつて居る(79)。

ホップハウスの社會學は其規模が頗る廣大である。一方に於て哲學問題に觸れて心理學に基礎を置いて社會の精神的發達を唱導し、特色のある倫理説を樹立し、進んで實際政治、社會政策の問題にまで論及しつゝ、他方科學としての社會學の研究をば豊ならしめて居る。氏の識見は極めて卓拔であり、その觀察は概ね穩當であるといへる。ホップハウスの如きは、確に現代社會學界の一方重鎮であると稱すべきであらう。併し乍ら忌憚なく評せしめれば、現代に於ける純粹社會學の研究者に對して、最も興味を惹くは氏の社會學說の内社會科學といふ部門に屬するものであり、それも社會進化の研究よりも、むしろ社會の通有的要素の研究と及び社會的産物の相關の問題であらう。然

るに氏は此方面について叙述すること比較的貧弱である。要するにその社會哲學は社會學者よりも、倫理學者がより、多分の興味を覺ゆる研究であり、社會發達論は單に人類學的社會學の研究者などに多少の示唆を與ふるに止るではないかと危まれる。而して氏の社會學の全體系の規模構造に至つては、哲學者のみが最もよくこれを批判し得るのではなからうかと思ふ。(二三・二—三)

- (70) Social development, p. 92.
 (71) *ibid.* pp. 91—92.
 (72) *ibid.* pp. 131, 213.
 (73) *ibid.* pp. 322—323.
 (74) *ibid.* p. 211.
 (75) *ibid.* pp. 36, 131, 208 214, 303, 324.
 (76) *ibid.* pp. 214.
 (77) *ibid.* p. 322.
 (78) *ibid.* pp. 317—321.

【附言】 ホッブソウは前に掲げた外に、なほ次の如き著述を有する。

Labour Movement, 1893.

Democracy and Reaction, 1895.

Social Evolution and Political Theory, 1911. (これはハーヴァード大學に於ける講演集で、氏の社會學說の全體を簡単に知るに便宜である。土生秀種氏により邦譯がある。)

World in Conflict, 1915.

Question of War and Peace, 1916.

氏の學說については American Journal of Sociology, January 1922 の著 Harry E. Barnes, Some Typical Contribution of English Sociology to Political Theory に解説がある。但しメインズの此論文執筆當時ホッブソウの社會學體系は未だ完成されなかつた關係上、その解説は充分のものであるとは目し難い。ホッブソウは自身 The Sociological Review, January 1923 の號に「相關研究としての社會學」Sociology as a Study of Correlation なる短篇を掲げてその社會學體系の縮圖を提供して居る。

最後に氏の「國家の形而上學的學說」の邦譯が鈴木榮太郎氏によつて完成されたことを附言する。この邦譯は右にあげたメインズ氏の米國社會學雜誌々上の解説の翻譯が、譯者の特別なる用意から附録として翻譯採録されてある。又最近鹽田秀介氏によつて、「社會哲學原理」の書名を以て、「社會的公正の諸要素」の邦譯がなされたことを追記する。

パレト社會學に於ける「社會選良の周流」

一 パレトと社會學

伊太利社會學者ギルフレド・パレト *Vilfredo Pareto* が一九二三年八月、七十五歳の高齡を以て、瑞西レマン湖畔に逝いてから既に二年餘の歳月を経た。氏は主として數學的研究方法を經濟學の研究に應用し、所謂數理經濟學派と呼ばれる人達の内でも、その最も有力なる代表者の一人である。氏は名はクールノー、ワルラス、チエヴォンス等と共に併稱される。それは氏の生前に夙に然りしものであつた。然るに氏は其死後その遺著一般社會學 *Trattato di Sociologia Generale*, 2. Ed. Firenze 1928 三卷、二千六百十二頁の大著によつて、今や各國社會學界の新なる注目の焦點となりつゝある。パレトの社會學はその祖國伊太利學界を風靡する概があり、最近の伊太利社會學徒達は、實にパレト熱に冒されつゝあると傳へられる。固より氏の學問的立場とその學說に對しては、祖國伊太利に於てすら非難の聲を聞かぬでも無い。特に、氏が科學的社會學の立場から下した猛烈

なる形而上學排撃に對しては、哲學者側の極度の憎惡を挑發したのである。そしてナポリの哲人クローチエの如きは、今日パレト反對者の旗手たるかの觀さへある。

パレトの社會學について、伊太利學界の事情に通曉する獨逸社會學者ロベルト・ミヘールズ教授は、最近ケルン社會學季刊雜誌々上に於て、獨逸學界の注意を喚起する所があつた⁽¹⁾。中欧の學界に於ても、パレトの學說は漸次に問題となり來るであらう。而してそれより先パレトの大著の初版は、一九一九年を以て佛譯を完成されたのである。

經濟學者としてのパレトに就ては、經濟論叢(大正十三年六月號)に松岡孝兒氏の追憶がある。社會學者としてのパレトについて、岩崎卯一氏は社會學雜誌(大正十三年九月號)にその生活を中心として物語つて居る。ケルン社會學季刊雜誌 *Kölnner Vierteljahrshefte für Soziologie*, 4. Jahrg. Heft 3/4 にはフイリッホ・カルリ教授がパレト社會學體系と行動主義との關係を論じて居る。かゝる論文の出現は如き獨逸學界がパレトに注意し來りし一證左であらう。

遍く現代社會學の研究を貫く興味は、之を二つとして見ることが出来る。一つは方法論に關し、他の一つは實質的研究に關する。如何なる科學も研究對象の整理を企つる點に於て、後者の興味を主としない筈はない。併し乍ら社會學に於ては其研究對象の特殊的性質から、換言すれば社會學の

研究対象は高度の複雑性と歴史性とを有する事から、自然科学的方法を其儘に採用することに餘程の反省を加へる必要が起るのである。此處に今立入つて此關係を考察すること無く、唯社會學的研究が此事情の爲めに着手されるに大に手間取り迂餘曲折を経たること、並びにコントが社會學を創始するに當つて、如何許り實證主義の方法論に意を用ゐたか、又社會學文獻に於て方法論を取扱へるものが、如何に數多きかを想起して止みたいと思ふ。

パレトの社會學の如きも亦先づ方法論に始まる。氏は方法論に於て、論理的實驗的方法 *Méthode logico-experimentale* なるものを採用し、此方法に基づいて社會學的對象を克服せんと計る⁽²⁾。もと此論理的實驗的方法なるものは、吾人の經驗に對して與へらるゝ現實體を合理的に整理し、經驗界の統一性 *Uniformité* を求めることにあり、此統一性が科學の法則であるといふ見解なるを以てパレトに於ては、總べて自然科学的方法が其儘に社會科學の研究に對しても採用されてある⁽³⁾。此意味に於て氏の社會學の研究法は、根本に於てコント、スペンサー、デュルケム、コスト等と一致し、近くはワックスワイラー、ギーズ等と共通するのである。パレトの方法は社會現象の客觀的統一的法則を求めることに向ひ、而してこれに停止するを以て、最近の社會學方法論争に於ける認識論的問題はなほ問題とはなつて居らない。此點より云ふならば、氏の社會學方法論は、古き型の方

法論に屬することを否み得ないであらう。

なほパレトの論理的實驗的方法に對して、今一つの非難が行はれて居る。パレトは次に述ぶるが如く、人性 *Human Nature* の一部として認むべき *Résidu* (不變性) が殆んど常に不變なりとする一方、*Dérivation* (派生體) なるものが極めて變化に富むことを立證して居る。然るにパレトに於ては、科學の理由の如きも畢竟一種の派生體なのであるから、此事は科學の基礎をなす所謂論理的實驗的方法の合理性に對して反つて疑を挿ましむるものであり、論理的實驗的方法は根本に於て動搖を感ずると云ふにある。此非難は認識社會學(知の社會學)への非難と其軌を齊しうし、パレトは恰も認識の社會學的研究を試みしデュルケム同様の困難に陥る惧れがあるのである。パレトの社會學方法論は以上の如くに多少の不備を含むかの如くであるが、此等の點を非難する者に對して氏は結局その社會學の實質的研究成績を以て最後の答辯とするより外に途がないであらう。

(1) Köhler *Vie tejhshshette für Soziologie*, 3. Jahrg, H. 4. S. 240—243.

(2) *Traité de sociologie générale*. Chap. Premier.

(3) *Traité*, 2 96, 99, 144, 218 etc.

二 バレトの社會學

11211

こゝにバレト社會學の實質的研究の中心問題たる「選良の周流」Circulation des Elites に就て述ぶる前に、なほ豫め顧慮したいのは、氏の社會學の對象である。之も亦今日の社會學に於ては先決問題の一つであり、又その方法論に密接なる關係を有するものである。先づ之に關するバレトの考察を窺ふことにする。

抑も社會學は如何なる種類の現象を其研究對象とするのであるか。社會學は社會現象一般を對象として攻究し、その結果所謂「一般社會學」(總合社會學)たるのであるか。若し然らざれば、社會學は如何なる特殊の社會現象を選んでその研究對象とするのであるか。此問題は一般に社會學の科學存在に對し眞に根本的な課題であり、特に現在の社會學體系の組織に於て常に最初の問題となるものである。然るにバレトの社會學に於て、此問題は奇妙にも明瞭に論述されては居らぬのである。氏は上記の著述の何處に於ても、此問題に正面から觸れて居ないのである。そこで吾人はバレトの社會學の内容として提出されたるものに就て之を明にし、他面能ふべくんば氏が片言隻句に於て漏す所のものを探ねて、その意を汲むより外はないのである。

先づバレトは如何なる實質的内容を其「社會學」の著述中に盛つて居るのであるかを調べやう。

私はバレト社會學概論の佛譯によつた。それはすなはち Vifredo Pareto, *Traité de Sociologie Générale*, Edition française par Pierre Boven, revue par l'auteur, 2 volumes chap. XIII+pp. 1763. Paris Payot 1917-17. 242p.

佛譯二卷から成るその老なる著述の大部分は、右にいへる不變性と派生體、及びその關係の論定に費され、最後の部分(第十二章)に於て始めて社會の一般的形態及び其歴史的表示が取扱はれて居る。バレトの社會的形態といふは、社會的平衡 *Equilibre Social* と稱せらるゝものであり、社會的平衡の要素として問題に上るのは、上下關係等の社會關係に於ける不變性 派生體 外部的利害關係 社會構成等の諸要素であるが故に、バレトの社會學は不變性と派生體とを主なる對象とし、其等のものゝ社會的關係を取扱へるものであるといへる。然らば「不變性」といひ「派生體」と稱するは、果して如何なるものなるか、重要な問題とならねばならぬ。

バレトは此不變性と派生體なるものについて、次の如くに説明する(5)。社會現象に關する在來の具體的理論(之を假に(C)で表はす)には、事實の記述以外に二つの主なる部分或は要素が存在するのである。その一つの部分は基礎論のもの、不變的性質のものである(之を假に(A)で表はす)。

今一つの部分は偶然的のもので、可成に變化的のものである（之を假に(B)で表はす）。今(A)の部分は直接に人間の非論理的行爲に對應するもので感情本能の表示である。之に反し(B)の部分は人間の有する論理的欲求の表示に外ならぬもので、同じく部分的に非論理感情に所應するものには相違ないが、かゝる感情を論理、詳しく云へば似而非論理を以て粉飾せるものである。従つて(A)の部分は人間精神の根本律であり、(B)の部分はこの根本律の説明であり演繹たるのである。(A)を不變性といひ、(B)を派生體と名づける。

パレットは凡そ六種の不變性と四種の派生體とをあげて居る(9)。一般的にいへばパレットは「不變性」に於て本能的なる人間性を捉へ、「派生體」に於てその思想的表示を問題とするのであつて、前者は在來の社會學者の云へる利益、本能など、餘程酷似せるものであるが、パレットの「不變性」は思想的表示に關係のある本能以上な人性、いはゞ本能の複雑なる形態までを問題せるのである。

一例をあぐれば基督教徒は洗禮を儀式として行ふ。これ本性の罪業を消滅せんとする儀式である。併し乍ら此説明は物足らぬのである。吾人は類似の事實を他の方面に於て知るからである。すなはち異教徒も亦贖罪の爲の「淨水」を使用するのである。かうして一先づ水の使用と贖罪の間に密接なる關係が考へられるのであるが、更に他の方面の事實は水の使用が此現象の必然的部分でないこ

とをば明にする。贖罪には水の外、血液や其他の物をも使用することが出來た。なほこれに止らず此目的の爲めに他の種々なる手段さへも存在するのである。タブー(禁制)を侵したことから、再び清淨の身に還る諸種の方法は、其例である。此様に其手段方法には一定したものとは無いのであるが、贖罪の感情は不變であつて、或る仕方によつて人は人格的保全を恢復するのである。そこで不變性(A)は贖罪の感情であり、派生體(B)は人格保全を恢復する方法と此方法の有効なることを證明する論理である(7)。

扱てパレットはかゝる不變性と派生體とを主なる要素とし、これに外部的利害關係、社會構成等の要素が如何なる社會的平衡關係を現はすかを最後の問題とするのであるが(8)、此問題こそはパレット社會學の主要問題なりと見做される。パレットが「社會的平衡」を以て意味するものは右社會的要素の現實的靜學的關係である(9)。此社會的平衡は常に動的なる現實の現象から、吾人の認識の必然的結果として把握された一種の抽象概念たるのである。併し乍らパレットによれば、社會的平衡は經濟學的平衡が吾人の認識上の積極的要求から規定された假定的平衡状態なるに比較しかゝる積極的性質は無く、飽まで現實に即せる平衡状態たるのである。そして此點に於て社會學が經濟學等に比較して、より根本的の學問なることを屢々繰り返して述べるのである(10)。

パレトの社會學は社會的諸勢力の平衡状態を問題とし、更に其歴史的表現を闡明して居るのであるから⁽¹¹⁾、此點より氏の社會學の實質的研究の意圖は明に觀取し得るのである。すなはちパレトは現實の社會現象に於ける諸勢力の關係を考察せんとするもので、氏は社會學を單に社會心理學的側面に限局せんとする多くの考へ方に反し、むしろ諸勢力の綜合現象としての社會現象を其まゝの姿に於て分析せんとする譯である⁽¹²⁾。

然し過去の總合社會學體系が、或意味にて皆失敗せることから推量さるゝやうに、パレトの意圖は決して遽に達成し得らるべきでは無い。嚴密なる論理的實驗的方法を採用する氏は無論之を辨へ常に社會現象の擴大なること微妙なることをいひ、一舉にして其包括的學理を提出することが如何に危険なるか、又之を企つる者あらば其如何に幼稚なるかを繰り返して述べて居る。

なほ此關係に於て注意して置きたきは、數理經濟學者たるパレトは社會學の研究に於ても數學的公式、幾何學的圖式表示に頼り、又數量的考察が如何に有益なるものなるかを指摘するに努めるも⁽¹³⁾（氏は多數の學者が量的問題を質的問題と誤解して居ることを非難する）、氏が實際に採用する方法は統計法に非ずしてむしろ歴史法たることである。

事實パレトの「社會的形態」に取扱はれし社會的平衡の内容は、「選良の周流」を中心とする或る

種の問題たるに止る。而も此平衡状態の主要素たる不變性に於ても、總ての不變性に亘つて取扱はず「結合の本能」*Instinct de Combination*「結合體の持續」*Persistence des Agrégats*の二種類に限られて居る（他の種類を加へて考察するは複雑化する困難があるからである⁽¹⁴⁾）。而して此平衡關係の如きも、専ら社會の上下階級關係に於けるものに限局されて居る。かうして社會學の問題は最初から假定的に取扱はれぬとしても事實上にはある要素を遊離して取扱ふ結果となり、對象の現實性に對してある構成を加へつゝ進むことを餘儀なくされて居る。

此最後の事實はパレトの社會學が抽象的社會科學たる所の經濟學 國家學等と同一の立場に接近しつゝあるを教へるものであらう。併し乍らパレトにありては、社會學は他の社會科學の如くに抽象的科學ではない。此間に區別が存するのである。

パレトによれば「個人も團體も、尊敬や名譽を求めると同時に、有用なる若くは單に生活に快き物質的貨財を消費する本能と、理性によつて動かされて居る。人は此傾向の全體に對して利害關係 *Intérêts* としふ名稱を與へる。此全體は社會的平衡の決定に、一つの重大なる役割を演ずるのである⁽¹⁵⁾。此全體の大部分を經濟學の取扱に於て見るのである。パレトは此問題より先づ經濟學の性質を説き、社會學との關係を述べ、最後に社會學の性質を指摘するのである。

經濟學には純粹經濟學と應用經濟學とがある。純粹法律學が或る原理からの結論を演繹すると同じ仕方で、純粹經濟學は或る假定よりの結論を演繹する。法律學にしる、經濟學にしる、彼等は共に具體的現象に應用されるのであるが、彼等の假定が現象中に重い役割を演ずれば演ずる程それはよく適用されるのである。人間の認識の経過は先づ分析法によつて具體的事實から抽象的事實に向ひ、次に綜合法によりて抽象的事實から具體的事實に還り來れるのである。今日の純粹經濟學は後者の立場にある。こゝに生物ありて或る欲望と傾向とを有し、之を満足する爲に或る障礙に當面するものとせよ。純粹經濟學は此問題に答ふるのである。此科學は欲望の非常なる多様性と之に對する障礙の極端なる多様性の爲めに、頗る廣汎なる科學たるのである。そして此科學の到達する結論は、社會學の本質的なる最も重要な一部分を構成するのである。併し乍ら、經濟學の問題は畢竟社會學の單なる一部分である。此部分は或る現象については些々たるもので、閑却し得る程度のものであらう。總ての場合に於て、吾人に具體的現象の形像を與へる爲めにはこれが他の部分と關聯させられねばならぬのである(16)。

さてパレットにありては、純粹經濟學の外に應用經濟學が認められるのであるから、社會學と經濟學の關係を更に應用經濟學の方面について顧慮するを要する。純粹經濟學が經濟現象裡の貨幣の作

用を教ふるに比し、應用經濟學は現行貨幣制 過去の貨幣制 貨幣制度の變遷等を教へる。かくの如く、應用經濟學によりて吾人は現實に對して一層接近するのであるが、然し決して現實その者に到達はしないのである(17)。

此場合現實其者に到達する爲めには、地質學及び金屬學の知識を必要とするのである。然し之は姑く別とし單に社會的勢力の考察に止めるとしても、必要な知識は、或る政府は如何にして、又何故に貨幣を偽造せるか。他の政府は何故に之をなさざりしか。英國の金單本位制は如何にして佛國の後れた複本位制と兩立し得るのであるか。支那の銀單本位制は如何にして各國の紙幣流通と兩立して存在し得るか等の理由が残るのである。貨幣は交換の要具である。此等の研究は確に經濟學に屬するのであるが、貨幣は同時に租稅徵收の手段ともなり得るのであつて、此點にて貨幣の研究は社會學の種々なる部門の問題となるのである(18)。

要するに經濟學の取扱ふものは現實的社會現象に非ず、それ故に經濟學者は經濟現象の上に作用し、之を變化する所の社會現象を顧慮しないのである。此問題は別の科學によつて取扱はれねばならぬ。パレットはこゝにコブデン協會の例をあげて社會學の問題を判明ならしめて居る。コブデン及びその一味の見識と雄辯とは英國保護貿易派の主張を破つて自由貿易主義を確立し、其結果英國

は未曾有の繁榮を來したのである。そこでコブデン協會を眞似た協會が各國に興つた。その結果經濟學者の豫期するやうな經濟學狀態の更生が生るべき筈であつたが、事實は之に反して此等の協會はコブデンのそれには似もつかぬ結果を招來せるのである。人は暫くの間、此不可思議なる結果を愚民教育の困難といふ事實から説明せんとした。然し、かゝる説明は今日之を信ずることが出来ないのである。次に人は政治家が反對の術策を弄することが、その眞因であるとしたのであるが、社會學の問題は實に如何にして、又何故に政治家がかゝる力を有するかといふことであつて、社會學的問題は經濟學的問題を支配するものなのである(19)。

パレットは他の個所に於て(20)、次の如くに述べて居る。不變性を是認することによつて、派生體は演繹法によつて構成するを得る。此事は後者の研究が、前者の研究なる社會學よりも遙に容易なる所以である。而して此後の方面に今日よく發達したる嚴密なる二個の社會科學が存在する。法律學と純粹經濟學とが是であると。

此等の説明によれば、パレットは社會學を經濟學、法律學に比較して根本的科學なること、而して社會學の研究は具體的社會現象に適切なる説明を與へ得るものなることをよく明瞭にして居る。

以下、パレットの社會學の中心問題の一つである「選良の周流」の研究に入つて、氏の述べる所を

考へたSと題す。

- (4) § 1.
- (5) § 798, 803, 848—868.
- (6) Chap. VI, § 888; Chap. IX, § 1419.
- (7) § 863.
- (8) Chap. XII.
- (9) § 2067—2078.
- (10) § 2011, 2014—2016, 2022, 2079.
- (11) Chap. XIII.
- (12) § 2060—2066.
- (13) § 144, 2107, 2281.
- (14) § 2025.
- (15) § 2009.
- (16) § 824, 2011—2013.
- (17) § 2014.
- (18) § 2014.

三 選良と選良の周流の定義

人間の種々なる性質に對する善惡の評價、利益ありや否やの評價、賞讃と非難とを放棄して吾人の注意を唯此性質の程度に向けて見やう。換言すれば重要ならぬか、普通なるか、大に重要なるかといふこと、更に換言すれば重要ならぬか、普通なるか、大に重要なるかといふこと、又更に換言すれば、各人の重要性に如何なる數量的指數を與へ得るかといふことを考へて見やう(21)。

此問題は試験の評點に似て居る。假に職業上に優秀なる才能を有する者に十點を與へ、一人も常華客を持ち得ぬ者に一點を與へ、全くの低能者に零點を與へやう。數百萬金を儲くる者に十點を與ふれば、數千金を儲ける者には六點を與へる。殆んど餓死の境遇に在る者には一點しか與へ得られず、貧民收容所に手當を受くる者には零點を與へるより外はない。奈翁一世を神として崇拜する者又之と反對に彼を極惡非道の人物として唾棄する者があるが、今其孰れが正當なるやを知らぬ。善惡いづれにせよ、奈翁一世は低能兒たらざるは事實であり、尋常の者ならざりしことも亦事實であ

る。すなはち彼は特別なる才能を有して居つた。此事實は吾人をして、奈翁一世を社會上高い階級に置く必要を感じしめる(さりとて奈翁の道德や其社會的貢獻を問題とするのでは無い)(22)。

かくの如くにして、社會上各活動方面に於て高度の指數を有する者より成る或る一階級を作り此階級に「選良」(Elite)といふ名稱を與へやう。選良といふ名稱が若し不適當ならば、何と呼んでもよい。アルファベットの一字を之に代用しても、毫も差支は無いのである(23)。

「社會選良」の定義は右の如くである。此定義には見る通り數量的の限定がない。それ故「選良」は比較的のものとして成立つもので、彼等を社會の上流階級といへば、之に對する下層階級があり得る許りである。パレットは此二個の階級を政治方面に於て「支配者」(Gouvernantes)と「被治者」(Gouvernés)との區別として見る。又社會選良たる人々は、或は統治に關與するのであるが、又之に關與せざる者もあるのである。そこで選良は二種に大別され得る。「統治的選良」(Elite Gouvernementeale)と之に對する「非統治的選良」(Elite non-gouvernementale)是である。前者は直接或は間接に統治に相當の役割を演ずる者から成立ち、之に反して統治に何等の關係なきは後者である。例へば將棻の名人は確に社會選良には屬するのであるが、彼の技藝は政治に對して影響を與へぬのであつて、これは非統治的選良の一種たるに止るのである(24)。

扱て社會人口の種々なる集團が混合する仕方を考ふるに、一つの集團から他の集團へと入り込む者は、常に、彼等が之迄所屬した集團から得た或る傾向、或る感情、或る才能を、新らしく所屬する集團へ輸入するのである。此現象を社會選良と夫れ以外のもの、二つの集團に限つて云ふ場合、之に選良の周流、*la circulation des élites* の名稱を與へることとする(21)。

(21) 1 2026.

(22) 1 2029—2030.

(23) 1 2031.

(24) 1 2032—2034.

(25) 1 2041—2042.

四 「投機者」と「ランチエ」

社會選良の周流の問題の考察に當つて、こゝに人間の概括的な型として、投機者 *Spéculateurs* と *ランチエ* *Rentiers* を分つ必要が起る。これはパレットに於ける選良の周流の理論を理解する爲めに缺くべからざる區別であるから、左に之を説くことゝしたい。

パレットによれば、人は資本家といふ名稱の下に常に異なる二種類の人々を包含せしめて居るのである。その一部分は彼等の所有する土地或は貯蓄よりの収益によつて衣食する者である。之に反して、他の部分は諸種の事業に活動する企業家である。此兩者を混同することは、經濟現象の考察はいはずもがな、社會現象の考察に大きな障礙となつて居る。何となれば此等二種類の「資本家」は、事實上、各々異なる利害關係を有し、全く反對の立場にあることすらあり得、兩者の對立は往々にして「資本家」に對する「無産者」の反對よりも甚しいものがあり得るからである。資本に對する利潤が多ければ多い程企業家には打撃であるが、資本提供者には有利である。自己の生産する商品の騰貴は企業家には利益であるが、一般商品の騰貴は單純なる財産衣食者には、不利益たるを免れない。消費課税は企業家には、甚しき打撃とはならぬ。企業家は租税の負擔の増加を常に消費者の肩に轉嫁するからである。時として課税は競争者を驅逐する故に有利でさへある。之に反して消費者の一部たる資本家は租税負擔を他の者に轉嫁し得ず、課税によつて損害を被るのである。同様に、人件費の増加は企業家に對して僅少の損害を與ふるに過ぎない。高々損害は當座のことで出費の増加は間もなく商品の値段に算入されるのである。之に反し財産衣食者は最後に之を負擔せねばならぬのである。要するに、企業家と労働者とは共通の利害關係を有し、財産衣食者に對峙することゝ